

日本における

# マルクス主義批判論集

戸田義雄編



国文研叢書

No. 17

社団法人 国民文化研究会

日本における

マルクス主義批判論集

戸田義雄 編

## はしがき

(この「はしがき」には、編者の戸田義雄さんの一文が載るはずであったが、あいにくご健康を害して、目下ペンをお執りになれないために、私(小田村)が、代って拙文をもって埋め合わせることにした。ご了承をいただきたい。)

四年ほど前の昭和四十八年一月に、この「国文研叢書」の「No.14」が出版された。それは、いまは亡き桑原暁一さんの編集なさったもので、題名は、「ヨーロッパにおけるマルクス主義批判論集」(三四〇ページ)である。本書は、その姉妹編ともいふべきものであるが、桑原さんは、さきの本の「はしがき」の冒頭に、次のやうに書いて、その本の出版の意味を記してをられた。すなはち、

「どこの書店にも、マルキシズム関係文献は、小さからぬ場所を占めて、いつでもズラリとならべられてゐる。……それにひきかへて、マルキシズム批判文献を書店で見

出すことは、皆無とは云はないまでも、きはめてまれである。……このやうな情況の中でぼくらのこの本の出ることは、むしろ遅きにすぎるとのそしりをまぬがれない。」と。その本は、ヨーロッパの人たち、すなはち、ド・マン、ハイエーク、ミーゼス、ピグウ、ベルジャエフ、ジラス、レブケ、オルテガ、ドウソウ、アラン、ヴント、ゲーテ、ミレー、オーウエル、チェスタトン、リンド、イング、ケナン、ケアリー、などの人たちの「マルキシズムについての批判的な感触」を、桑原さんを中心にした同人たちで共同執筆して世に紹介したものであった。当時は、類書が余りなくて珍しい本といふためか、大変ご好評をいただいた。しかし、編者の桑原さんは、それから半年もたたぬその年の五月十九日に、ご遺族や私ども同人の痛歎のなかで、病魔に勝ち得ず遂に不帰の客となってしまはれた。

桑原暁一さんは、右の「ヨーロッパにおけるマルクス主義批判論集」が出来上る前から、次は「日本におけるマルクス主義批判論集」の編集に取組まうではないか、と私たちに声をかけてをられたので、本来ならばこの書は、当然に桑原さんを中心にして、姉妹編にふさはしく編集されることになってゐたものである。



でも、それが不可能となって二年の歳月が過ぎたころ、仲間たちは、振ひ立って、なんとか桑原さんの素志を実現しようではないか、といふことになった。それから一年かけて出来上ったのが、本書である。それより先、編集目的にもっとも造詣の深い戸田義雄さんが、期せずして「編者」に推されることになった。

しかし、いざ取組んでみると、前書のやうに外国人のものを取りまとめるのとは、また違ったいくつかの難関にぶつかった。戸田さんのご苦労は一方ならぬものであったと思ふ。本書の目次に見る三つの章への仕分け、すなはち「日本におけるマルクス主義」に対する「第一章」での「総括的な批判の推移」、第二章」でのその「経済学説に対する批判の推移」、第三章」での「先人たちのマルクス主義批判の内容」にまとめられることになった。そしてさいごに、「付章」として、現ソ連の学者カントロヴィッチの所説を紹介して、これを附加することにしたのである。それは、前書と本書との関連が深いことを性格づけてくれるもの、との見地に立ってのことである。（「付章」は文の性質上、現代仮名遣ひによったが、他は引用文を除いてすべて正仮名遣ひによった。）

書中、同人力の及ばぬ部面のいくつかについては、浅野晃・古川哲史両先生のご寄稿を懇請し、また、高山岩男・葦津珍彦両先生には、対談形式によるご所見の表明をお願い申し上げたところ、四人の方々が快諾くださって、お心こもるご協力をお寄せくださったことは、編者はもとよりのこと、関係者一同の感謝措く能はざるところである。

また、執筆分担各位、編集委員諸氏にも、編者とともに深甚の謝意を表したいと思ふ。

編者―戸田さん―が、もし終始御健康であられたならば、本書は、さらにいくたの精彩を添へ得たであらうことが思はれるにつけ、中途からの編集代行上の不行届の点は、戸田さんにもお許しいただきたく、その責は、すべて私に帰するもの、とさせていただきたいと思ふ。なほ、この間執筆分担のほか、終始、編集実務、校正に、惜しみなくご協力ください、巻末の「関係年表」の作成にも応じてくださった梶村昇氏と、校正にご協力いただいた島田好衛氏にもお礼を申し上げます。

(なほ、本書の第一冊は、謹んで故桑原暁一先輩のご霊前に捧げさせていただきたいと思ふ。)

昭和五十一年二月十九日

小田村寅二郎

執筆者紹介

浅野 晃 立正大学文学部教授・詩人

葦津 珍彦 「神社新報」元論説委員、同社社友

高山 岩男 元京都大学教授・日本大学教授・文学博士

古川 哲史 東京大学名誉教授・亜細亜大学教授・文学博士

三浦 貞蔵 川崎製線(株)取締役

高木 尚一 高崎経済大学教授

葛西 順夫 東京都立一ツ橋高校教諭

夜久 正雄 亜細亜大学教授・教養部長

小田村寅二郎 亜細亜大学教授

川井 修治 鹿児島大学教授

吉田 靖彦 青山学院大学教授・経済学博士

山田 輝彦 福岡教育大学教授

梶村 昇 亜細亜大学教授

戸田 義雄 国学院大学日本文化研究所員・文学博士

## 目次

はしがき	小田村 寅二郎	3
執筆者紹介		9
第一章 日本におけるマルクス主義者の思想と行動	(対談) 葦津 珍彦	1
	(対談者・戸田義雄)	
一 マルクス・レーニン主義の移入と発展		3
二 マルクス主義の批判		22
三 現代日本のマルキシズムと世界のマルキシズム		37
第二章 日本におけるマルクス経済理論批判の歩み	三浦 貞蔵	47
一 マルクス価値論をめぐる論争		52
二 マルクス労働価値説の致命的欠陥		75
三 マルクス地代論批判		86
四 資本主義崩壊論批判		93

	五	社会主義経済の根本的難点—経済計算論	98
<b>第三章 日本におけるマルクス主義に対する思想的文化的批判</b>			
一		「日本におけるマルクス主義批判」の前史	117
		——南洲・天心・漱石・蘆花・鷗外——	119
二		京都学派（哲学）におけるマルクス主義批判はどうであつたか、その他	144
		（対談）高山岩男	144
		（対談者・小田村寅二郎）	
三		三井甲之（付・養田胸喜・河村幹雄）のマルキシズム批判	162
四		川合貞一の『マルキシズムの哲学的批判』	180
五		寺田寅彦とマルキシズム	188
六		和辻哲郎とマルキシズム	198
七		佐野学のマルキシズム批判	211
八		矢内原忠雄のマルキシズム批判	222
九		尾高朝雄の『法の窮極に在るもの』	229

十	小林秀雄とマルキシズム	山田輝彦	235
十一	神川彦松のマルキシズム批判	高木尚一	247
十二	三島由紀夫のマルキシズム批判	戸田義雄	254
付章	カントロヴィッチの経済理論をめぐるソ連経済学の潮流	吉田靖彦	771
一	経済システムと資源配分		273
二	社会主義経済とマルクス経済学		274
三	ソ連経済と計画編成システム		276
四	資源配分と一九六五年経済改革		279
五	カントロヴィッチ経済学と労働価値説		284
六	カントロヴィッチ経済学の影響と効果		293
七	カントロヴィッチ教授とノーベル経済学賞		298

関係年表	303
------	-----

第一章 日本におけるマルクス主義者の思想と行動

葦津 珍彦

(戸田義雄との対談)

一、マルクスレーニン主義の移入と発展……………3

徳富蘇峰のソーシアリズム・大杉栄のアナーキズム・幸徳秋水のアナーキ  
ズムと天皇制論・大杉栄と頭山満・福本和夫のマルクシズム

二、マルクス主義の批判……………22

高島素之と北一輝・吉野作造・宮本顕治の宗教容認説・山本勝市のマルク  
シズム批判・小泉信三のマルクシズム批判・高島素之の国家論・高橋亀吉  
の実証的研究

三、現代日本のマルクシズムと世界のマルクシズム……………37



一、マルクスレーニン主義の移入と発展

はじめに

戸田 ベトナムからアメリカ軍が撤退してまだ半歳も経ちませんが、南ベトナムはもちろん、カンボジア、ラオスともに、マルクス主義の支配するところとなり、インドシナ半島はマルクス主義の手中におちたことになりました。マルクス主義は、すでに世界の三分の一以上を完全に支配し、さらに全世界を支配しようとして強力な運動を展開してゐます。日本の内外にもその強い働きかけがつついてゐて、このままでは日本にもなしくづしに共産主義・社会主義革命の起ることも杞憂ではないと思はれます。そこで、マルクス主義についての知識と批判とが必要ですが、日本では、大学の中とかジャーナリズムの上でマルクス主義の批判がとりあげられるのは、極めて稀なことと言つてよい状態です。

まづ、マルクシズムはどのやうにして日本に入つて来たか、その辺からお話していただきたいと存じますが――。

**葦津** ソ連のスターリン（一八七九―一九五三）については種々の問題がありますが、彼はマルクスレーニン主義ですよね。この、マルクス（一八一八―一八八三）からレーニン（一八七〇―一九二四）に流れていったマルクス主義を議題にするのか、それともマルクスからカウツキー（一八五四―一九三四）に流れていったマルクス主義を問題にするか、どちらかによつてマルクス自体の読み方もかなり力点が変わると思ふのですが、いまあなたの問題になすつてゐるのは、マルクスレーニン主義だといふ意味で解釈してよいか、どうでせう。

**戸田** ぼくもさう思つてゐます。ただ、いまはまづ、大變大雑把な言ひ方ですが、いはゆるマルクス主義として受け取られたものは――。

**葦津** マルクスレーニン主義でも共産党ばかりでなく、労農派までをふくんだ意味での――。労農派といふのは一九二七年創刊の雑誌『労農』を中心として集つた社会主義者たちの総称で、山川均（一八八〇―一九五八）猪俣津南雄（一八八九―一九四二）などが

代表者でせう。彼は、経済学的に当時の日本はすでに資本主義最高段階の独占主義・帝国主义段階に達してをることを主張し、日本を高度資本主義のブルジョア国家と解し、社会主義革命の敵目標は、独占ブルジョアジーに他ならないと主張しました。これは山川派の明治維新は市民革命だとする史論の経済学的裏づけにもなります。(だが政治的には、かく云ふことによって、天皇制の特殊の意味を軽く評価して、天皇制に鋭く対決するのをさけて、強圧をまぬかれたとも云へます。これが労農派と称するもので、今の社会党の協会派の源流です。)

**戸田** 労農派に対するいはゆる諸派の問題などありますが、それはあとまはしにしまして、まづ、マルクスズムが、どういふ形で、いつ、誰によって受け入れられたか、その理解の段階と実行する動きと、さういふことを時代的にピックアップしてお話いただきたいのですが――。

**葦津** それは、――。私の考へは間違つてをるかも知れませんが。ただヒントだけとして、考へていただきたいのですが――ソーシアリズム――マルクス主義以前のソーシアリズム――の輸入は、『国民の友』の徳富蘇峰が先駆です。しかしマルクス・エン

ゲルス（一八二〇—一八九五）が問題になって来るのは、これは大体日露戦争前後だと思ふのです。堺利彦（一八七〇—一九三三）、幸徳秋水（一八七一—一九二一）あたりの「共産党宣言」（一八四八）の初めての和訳（明治三十七年—一九〇四—「平民新聞」五十三号）が、マルクス・エンゲルスの日本に入った最初のころだと思ふのです。

ところが当時の連中では、まだマルクス・エンゲルスのソーシアリズムも、バクニン（一八一四—一八七六）のアナーキズムも、どこが違ふのか明確でないといふ程度であつたと思ふのです。それが明治の末年まではつきりしてゐないですね。幸徳秋水らの「平民社」（『平民新聞』、明治三十六年—一九〇三—創刊）あたりでも、混合ですか。それが、大正初期の河上肇（一八七九—一九四六）が唯物史観を書くやうな時代になつて、だんだんマルクス主義を独自のものとして研究してくるのです。

一方、実践的な運動にかなり関連があるので、アナーキズムの傾向を明瞭にして来るのが、幸徳の門弟の大杉栄（一八八五—一九三三）で、彼がはじめてアンチ・マルクスのアナーキストといふものをはつきりするやうになつたと私は理解してゐます。

それから一方は、山川均、堺枯川（利彦）です。

ところが、当時のマルクシズムの理解といふものは、非常にぞんざいなものでした。その後、ロシア革命が起って、コミンテルン（第三インターナショナル、一九一九年創立の国際共産主義運動の指導機関。一九四三年、第二次大戦中解散）が、日本に対する働きかけをするやうになります。

コムニニストとしては、随分悲劇的な死に方をした人で、いまほとんど問題にされないけれども、ウラジオストクにゐた朝鮮人の李東輝といふ人が、上海あたりで活動をはじめ、とにかくアジア各地の社会主義運動の中の革命的な分子との連携を取ってみよう、かういふ方針で、コミンテルンの上海からの働きかけがあつて、一番最初に行ったのが大杉栄なんですね。大杉は金だけ取って勝手にアナーキズムを主張して帰って来て、結局、コミンテルンの指令に従はなかつたわけです。

それから「アナーキストではだめなんだ」といふことになって、トロツキー（二八七七一―一九四〇）の親友の片山潜（一八五九―一九三三）あたりが、だんだんにコミンテルンに参画するやうになり、近藤栄蔵などが上海を往復して連絡に当るやうになって、初めて、マルクスレーニン主義の線が日本に入るやうになって来ます。それで、第一

次共産党が、堺枯川・山川均あたりも入って、彼らがリーダーでやります。大正十二年（一九三三）の関東大震災の前頃のことです。

『共産党史』には、第一回の経緯は書いてありますが、第一回の創立の時に黨員で入ったものでいま生きてゐるのは野坂参三ぐらゐではないですかね。ほかはほとんどが反党的立場に回ったり除名になったりしてゐますね。

ところが、大正末年頃から昭和初期の時代に、福本和夫（二八九四）がドイツに行つて、はじめてドイツのコムニストとの接触によつて「唯物弁証法」の勉強をして歸つて来て、河上肇や山川均の通俗常識論的なマルクス主義解釈をメチャメチャに叩いたんですね。それで学生などはドツと福本の方に行つた。それで山川・堺の線との対決になつて、コミンテルン第七回大会（一九三五年、人民戦線戦術採用）かに、日本問題の討議があつて、コミンテルンは山川主義に対して福本主義に対しても全面的な承認を与へないで、批判を加へたのです。

それで山川のほうは結局その批判に服しないで脱党するわけです。福本のほうが批判に服して共産党の再建を第七回コミンテルン大会の日本テーゼによつてやつてい

く。かういふことになって、三・一五、四・一六事件となつていったのです。

\* 三・一五事件 昭和三年三月十五日、日本共産黨員ら一六〇〇名の一斉検挙。

\* 四・一六事件 昭和四年四月十六日の日本共産党検挙事件

以上がマルクスレーニン主義の日本に入って来た大筋を、年代を追つて述べてみたつもりですが――。

### 徳富蘇峰のソシアリズム

戸田 そこでちょっと質問させてください。まづ、蘇峰のソシアリズムについて――。

葦津 蘇峰からソシアリズムが始まるといふのは割合みんな気にしてゐないけれども、面白いと思ふのです。その頃のものを書いた本で『明治社会主義史論』といふのが、ここにあるから、あげておきませう。蘇峰以前のラディカルといふのはみんないはゆる民権論だけであつて、ソシアリズムの傾向が出てくるのは蘇峰の『国民の友』からです。



戸田 どうしてラディカルなソーシアリズムに行く前に、一種のさういふ宗教ヒューマニズムみたいな形でソーシアリズムにみんなが飛びついたかといふことなんです。

葦津 それは、当時の日本はいはゆる資本主義の発展の初期で、マルクスの言ふ原始的蓄積時代ですが、労働条件が随分手ひどい非人道的なものがあるので、その惨状を見たインテリゲンチヤに資本主義体制に対する疑問、反問が起るやうになる。ぼくはこれはあたりまへだと思ふのです。

### 大杉栄のアナーキズム

戸田 それから、アンチ・マルクシズムとしてのアナーキズム、それは大杉栄の場合です。彼のマルクシズム批判といふのは、どの程度に評価し、位置づけたりしたらよろしいでせうか。

葦津 私はやはりかなりなものだと思ひますね。マルクス・レーニン主義の骨格とも言ふべき独裁強権ディクタートル・ゲバルトの思想に対して、俗流政治の利害、現実を



無視してでも徹底的に反抗する思想の論理を追求するといふ点では、アナーキズムは一番徹底してゐると思ふのです。

### 幸徳秋水のアナーキズムと天皇制論

それで結局、一時全く消えてしまったやうな形になったアナーキズムが、また最近出て来るのですね。各国共産政権の独裁の實驗を見てまた出て来る。實際運動としてのアナーキズムといふものは、常識を外れたやうなことまで空想するわけですから、大衆の支持も信頼も得られないとしても「思想の論理」としての対決で見えていくといふ点では、アナーキズムが一番徹底したものだと思ふのです。

戸田 その場合に、明治におけるアナーキズムは、たとへば天皇制については、最終的にどういふ態度でせうか。

葦津 天皇制について、幸徳を非常に高く評価することが、いまの日本のジャーナリズムでは行はれてゐますが、ぼくは幸徳の天皇制反対は未熟だつたと思ふのです。

幸徳はソーシアリストの中では、その初期には、とくに尊皇論を書く男として特徴

があつたのです。明治三十四、五年までかなり尊皇論を書いてをります。田中正造（一八四一〜一九二三）の、例の足尾鉍害問題の上奏文（一九〇二）の起草を幸徳に頼んだといふのは、有名な話です。山川均などは幸徳の尊皇論を、ソーシアリストの尊皇論なんといふのはをかしい、といふ態度でからかつてゐたのではないですか。

幸徳が尊皇論から離れてゆくのは日露戦争だと思ふのです。日露戦争でかなり尊皇論から離れていって、そして彼は米国に行く。米国に行ってもSL系のアナキスト（社会革命党系）に近づき、何とかいふ女の亡命者にサンフランシスコで非常に影響を受けて帰って来て、アナルコ・サンジカリズムの思想を日本に移入し紹介をするわけです。明治四十一年（一九〇八）頃のこと。

戸田 アナルコ・サンジカリズムといふのは、何と訳したらいいでせうか。

葦津 無政府組合主義とも言ふのでせうか。政治運動でなく、職場・工場での労働組合による直接的破壊活動で革命をやれといふ主義で、フランス、アメリカで相当有力で、テロ、破壊活動を盛んにやってみました。その頃は、権力者は爆殺せよといふことで、米国大統領以下世界各国の元首なり首相なりに対する暗殺計画を何十件となく

試みてをる。幸徳のはその連鎖反応ですな。

それで、ぼくはよく幸徳研究を紹介する連中をからかふのですけれども、日露戦争の際の例の平和アピールといふのが非常に名高いですけれども、平民社の『平民新聞』を見てもわかるやうに、戦争は早く終結するがよい、その点ではロシアの社会党に共鳴し協力してやりたいが、ロシアの社会党が暴力的な実力行動を取るのとは文明的でないといふやうなことを書いて、直接行動に対する反対勧告を日本の方から書いて送ってゐるのです。その相手はメンシエヴィキ（ロシア社会民主党の分派）ですよ、ボルシェヴィキ（過激派）ではないのですよ。メンシエヴィキに対してさういふアピールをやった。こっちの方は当時はまだボルシェヴィキもメンシエヴィキも知らなかったのですな。それで、社会民主党といふのを相手にしてやったら、メンシエヴィキが受取って、回答をよこした。その回答は、メンシエヴィキでさへも、「ロシアでは直接行動はよくないなどと言へるやうな国情ではないのだ」といふやうな回答です。

それで幸徳は、明治三十八年（一九〇五）あたりまでは、直接行動はよくないといふ主張を懐いてをるだけでなく、国際的にもアピールする程度の考へだったことがわか

ります。その彼が、直接行動主義を持って米国から帰って来たのです。それから大逆事件（一九一〇）までわづか二年か三年でせう。それから考へても思想を練った、固めたといふほどの歴史はないんですよ。外国で初めて聞いて、これは新しい理論だと感心した程度ではないですか。

一番ひどいのは日本の学者だと思ひますが、ソーシアリストにも極く近年まで、獨創的に自ら深く十分に思想した人がゐないといふことですね。外国流行の翻訳をしたことばかりなんです。幸徳の「帝國主義論」を非常に獨創的なもののやうに評価する連中がありますが、さうではないのです。これはその当時の外国の反帝國主義論を見ればわかる。幸徳自身が書いてゐるんです。「帝國主義論は自分の著書といふのはちよつと恥かしい」と。そしてその例言に「これは著でなく述」と書いてゐるんですよ。といふのは、その当時のロシア、フランス、ドイツ等の思想なり、説なりをただゴチャゴチャに書いたといふだけなんですからね。この著に幸徳の特徴があるとすれば、その頃、幸徳が熱心に親近するにつとめた貴族院の重鎮、谷干城將軍（子爵・一八三七—一九二二）のユニークな漢学風の対露非戦論が、奇妙な形で混入してゐることで

せう(葦津著『武士道・戦闘者の精神』で分析した)。

ちやうど幸徳が米国に行った時に、米国でアナルコ・サンジカリズムが流行してをった。それで帰って来て「最近の傾向はかうなんだ」と言って説明した。そしたら管野すが(一八八一—一九二二)と宮下太吉あたりが非常に共鳴した。そして、三十人ばかりのひとにぎりのグループが共鳴した。

管野なり宮下なりの陳述書などを見ると、かなり精神異常的ですよね。日本の人民が天皇に反抗するなどといふことは到底予想できないといふのです。財閥や官僚に対する弾劾演説をやっている際には非常に熱心に聞いてゐる連中が、こと天皇になるとどうもみんな躊躇する、いやな風をする、といふのです。それで、大衆に対してむかつ腹が立ったといふのです。それで、大逆をやったら、大衆も少しは考へぬか、といふので決心したといふのです。

あの調書を読んでも「大逆事件裁判」そのものは、デッチあげがあるといふのはほんとうで、陛下に爆弾をぶっつけたいと本気に思ったのは、管野と宮下の二名だけではないでせうか。あとの連中は、いはゆる幸徳の直接行動主義理論には一応の共感を

してをった、それをみんな一網打尽にやってしまった。

幸徳本人は「かういふことは新しい時代のソーシアリズムの傾向なんだ」といふ程度のことを教へただけけれども、本人はやる気が全然ない。やる気がないだけでなく、みんながさういふ気になってくると、このままでは危いと考へたわけです。

それで、小泉策太郎・三申（一八七二〜一九三七、政治家）といふのが親友ですが、三申に話しまして、社会主義運動からしばらく手を引きたいと言ふのです。「戦国武将伝」といふやうなものを書いて食っていきたいといふのです。彼は、『常山紀談』（一七三九成立）を考へてゐたとぼくは思ひます。『常山紀談』は、中江兆民が、かねてから一番推奨した武将伝です。だからそれを種本にするつもりだったのだとぼくは思ふのですが、そんなものを書きたいといふので三申も賛成して、三申が金を拵へてやることになる。その金で、湯河原の温泉宿で執筆することにしてゐたのが、その場で捕つてゐるのです。

だから幸徳は直接行動から逃げたいと考へて、逃げる準備も十分にしておいて、逃げたと思つたところで捕つてをるのです。それで大逆の首領だといふことになつたわけです。



ね。

それで幸徳は「社会主義運動をやめて著述に転向をしたい」と言って三申に頼んだその書面を、法廷に出すか出さないかで、最後まで煩悶してゐるわけです。そして、とうとう出さなかったのではないですか。

ぼくが察するに、幸徳は裁判の進行過程を見て、管野・宮下以下何名かは到底死刑を免れないといふ判断がついたのですね。それで、彼は、自分の言論によって思想的影響を受けた人間が殺されて行くのに、「おれは逃げたんだ」と言つて軽い罪になつたり、釈放されたのでは、士道の義が立たないといふ、さういふ考へがあつたやうに思ふのですね。そこがぼくは明治のソーシアリストの一つの面白いところだと思ふのです。やはり中江兆民門下の秋水には、日本の武士的面目といふ意識が非常にあるやうに思ふのです。

天皇制についての問答でも、調書などを見てみても、あいまいなんです。「一体どうしたらよいと思ふのだ、君らの言ふアナキズムから言つて天皇をどうしたらよいと思ふのか」といふ意味の訊問に対して、「それは天皇自身が決めることなんだ、他

人が強制することではない」と、こんなことなど言ってみる問答があります。「アナキズムといふのは他人には強制しないといふことが根本なのだ。だから天皇は天皇として自ら考へてみたらよい、これが本当の無政府思想です」といふやうなことを言つてゐるのです。

とにかく思想として固まつてゐないのです。まだアナキズムの路線にはいつてせいでいい、三年ぐらゐなのですから、アナキズムも初等生なんです、幸徳は。その後アナキズム理論を一応固めていくのは大杉です。

### 大杉栄と頭山満

その大杉も、最後までやはり懐疑の念が非常に多い男です。だから彼の一番愛用したモットーといふのが、「懐疑者の如く思想し、信者の如くに行動する」といふのです。彼は心情的にはバクーニンに非常に惹かれたやうですけれども、理論はバクーニン（二八一四～一八七六）の理論ではどうしても整理がつかないらしくて、クロパトキン（二八四八～一九二五）を理論説明に使ふことが多いですね。感情論はバクーニン。クロ



パトキンになって来ると、その理論には、すこぶる厳格な道徳的、倫理的、戒律的なものがあるんですね。やはり研究者ですよね、頭の底は。

これは余計な話になるのですが、大杉栄は頭山満（一八五五—一九四四）を訪ねて行って、頭山のアドヴァイスで杉山茂丸に会ひに行き、杉山の斡旋で後藤新平に会って、その資金で日本脱出をするわけなんです。これは当時議会でも明瞭になって、後藤新平は議会でも随分とつちめられてゐるんです。大杉が甘粕正彦（当時、憲兵大尉）によって殺害されたあと、いろいろなものの調査で出て来たのです。

ぼくはずっと前に「忠誠と反逆の論理」といふ題で一文を書いたことがあります。ほとんどあらゆる社会思想といふのは、忠義の思想ばかりなんです。コミニズムなんぞはもちろんさうですし、民権主義でもなんでも、あるものを義と考へてゐて、義に対する忠を一番大切にするといふことになってゐる。ただ忠義をつくす義の対象が違ふから、「あいつは謀反人だ」とか「新しい異端だ」とか「反抗がすべて」とかいふけれども、義に対して忠といふ点ではみんな似たやうな思想の論理で、本当に一切に対してもすべて反抗する「自由」といふやうなものはほとんどない。

ところがアナーキズムだけは、その反抗の自由といふことを非常に考へたんですね。それで義に対して束縛を受けるやうでは真の「われ」の自由ではない。自己に対するエゴであっても、昨日の我が欲する意思と今日の我が欲する意思は違ふといふのです。だから約束に対してでも、ある時点での自己に対してでも、忠であることは出来ないと、いふことになって来るのです。この真のアナーキズムは、ステイルネルに源流すると思つてゐるのです。しかしこれでは、社会大衆の運動にはならないわけです。自己に対しては忠でない、約束も履行し得ぬといふのですから。まして他人との間の約束などは、そんなものの価値を認めて真の自由があるか、と、かういふのですから。

いままたフランスあたりではそれがはやってゐるやうですが、そのやうなステイルネルに対しても理論としては、大杉は非常に敬意を表したのです。ところが頭山のところへ行つて、かう言つてゐるのです。「先生が自由奔放にあらゆる束縛を無視して明治年代に行動されたその精神で、私は今日やつてゐるんだ」とかう言つたといふのです。「それで多少援助を得たいと思ふがどうですか」と言ふわけです。そしたら頭

山が「さうか、お前も義に対して忠なる者なのか」と言ったといふのです。そしたら大杉は黙っちゃった。大杉の哲学で、もっとも決めにくい最後の問題点です。それで、黙ったまま返答しなかったといふのです。そしたら、頭山が、「お前は杉山のところへでも行ったらよい」と言ったといふのです。

○

アナキズムの始祖はマックス・スティルナー（一八〇六～五六）。主著『唯一者とその所有』。この個人的無政府思想がブルードン（一八〇九～一八六五）の社会主義と結合して、初めて社会運動となり、バクーニン、クロポトキンへと発展しますが、その「無政府」の思想原理を論理的に結晶すると、アナキストはこのスティルナーに戻る者が多い。スティルナーは、今でも国際アナキストには深い影響を残してゐます。

### 福本和夫のマルキシズム

戸田 福本和夫のマルキシズムは？

葦津 これは、いままでの乱雑な非論理的なものを、できるだけ厳格に論理的に、追求

する関心を高めたといふ点、その程度の評価はいいでせうね。『経済学批判のために』と『唯物史観のために』の二著が彼の代表作（昭和三年改造社発行）ですが、やはり唯物弁証法に対するロジカルな研究を刺激したことは大きいでせうね。

## 一、マルクス主義の批判

戸田 さて、いまマルクシズムの移入の全体をトレースしていただいたのですけれども、今度はさういったソーシアリズム、マルクシズム、マルクスレーニン主義の流れに対する批判です。いまのお話のやうに思想が非常にラフな段階と、それからいはゆるデアリクティークを正確に理解しようとする段階と違ふと思ふのですけれども、まず明治中期から昭和にかけて、批判者として取り上げなければならぬ人物といふとどういふ人がをりませうか。

葦津 いま言ったやうなアナキスト系の人たちと、それから荒畑寒村（一八八七〜）。明

治時代からのソーシアリストとしていままだ生きてゐるのは荒畑寒村だけです。彼の立場はアンチ幸徳、アンチ大杉で、だからやっぱりマルクス主義者でせうか。幸徳などには決闘状などをやっていますが、これは思想家としてではなく、プライバシーの話のやうですが――。

プライバシーと言へば、頭山のところへ何で大杉が行ったかといふと、伊藤野枝（一八九五―一九三三）――これが支洋社員の娘とかいふ話です。それで、大杉・伊藤が殺されたのちの世話も、甘粕の世話も頭山がやってゐるわけです。人間の縁といふのは、割合小さな範囲内でサークルはキリキリ回つてゐるものですよ。

伊藤野枝が大杉に結びついたのを憤つて、大杉の前の恋人が包丁で刺さうとせう。刺しかかつて刺し損つたのでせう。あの頃もやっぱり性の解放なんといふことでもかなり乱雑といふか無法です。かういふプライベートルな問題も人間の社会行動のコースには影響を与へてゐますね。論文などで書くやうな問題ではないけれども、問題があると思ふのです。史上人物のプライバシーを見てゐて、だから社会行動もこんなに失敗しちゃつたのかなあといふところがありますね。私はプライバシー研究は

嫌ひですが、プライバシーを見て、はじめてその人の社会的姿勢なり決断の理由がわかるといふことは少なくない。

### 高島素之と北一輝

葦津　そこで、マルキストにしろ、アナキストにしろ、彼らの一番の弱点は、国際的な社会主義運動の優勢な潮流にいつもついて行ってをるだけであって、自ら思想した独自のものはほとんど出て来なかったことだと思ひます。「日共の独自路線」といふものは、さういふ独自の性格が全然なかったといふ弱みをみとめての反省もあるのかもしれない。ともかくすべてが直訳で追従、それが終戦当時までの日本社会主義運動です。

かういふ点で言ふと、非常に単純なものですけれども、高島素之（一八八六～一九二八）北一輝（一八八三～一九三七）などは、一個の思想家たるの価値があると思ふのです。これはどちらも、日露戦争を支持したことから平民新聞社系統と訣別して、ずっと左翼の主流からは相手にされないのですが、どちらも自分自身で考へようといふ態度を取

ったのは立派だと思ひますね。

高島などは、マルクスの『資本論』の完訳を出しましたが、そのずつとあとで、河上肇のどうか、向坂逸郎のが出るけれども、これを対照してみると明瞭で、高島の書いたものを故意に用語を変へたといふやうなものです。その意味で高島のが手本になってゐます。それくらゐ読解力がすぐれてゐたのです。しかし、彼は決してただマルクスについて行かうとはしなかつた、自分自身で改めて考へてみようと思つたのです。

しかし、高島の国家社会主義といふのは、マルクス主義と理論の上では、それほど本質的に違つたものではないのです。この人は情感的には、かなり異なる所があつたらしいが理論の上では、独裁の段階までは似たものでせう。しかし、独裁国家を「国家死滅」の初めとは考へないで、むしろこれで国家が完成するのだ、国家といふものはさういふものなんだと考へる。独裁段階から国家のない無政府の高度共産社会へ発展するなどといふことを空想だとするのです。かう言つただけが特徴程度のものですけれど、かれは社会主義研究では、ツガン・バラノウスキー（一八六五～一九一九、



ロシアの経済学者)とか、ベルンシュタイン(一八五〇〜一九三二、ドイツの社会主義者)といふやうなものも大いに参考にしなければならぬといふ立場を取つて、ただ時流の大勢に追随しようとはしなかつた。マルクス主義者は、ベルンシュタインとかバラノウスキーの名をただ口汚く罵るだけだけでも、私は経済学史上、かれらの存在意義は、かなりのものがあると評価してゐるのですが――。

北一輝の方は、ぼくは、高島よりも理論家としては劣ると思ふのですけれども、彼はほとんど、単純なフランス革命史と丘浅次郎(一八六八〜一九四四、動物学者)の『進化論』を読んだだけの知識しかないけれども、彼自身が支那へ行つて、支那革命を見た実感的な感じをもつて、『進化論』なり、フランス革命の翻訳を読んで得た知識を駆使して、自分自身のソーシアリズムを考へてみようとした。

高島とか北などは、それぞれに自ら思想した人間と言ひ得るが、いはゆる日本の社会主義の主流になつた連中で、この人間が考へついたといふものが何もないといふところが問題ですよ。ぼくから言ふと、宮本顕治が出てくるまで、日本人のこの人間が考へついたといふものは、強ひて言へば野坂の延安における天皇論くらゐで、ほかはほ



とんど何もない。例の福本和夫にしても、これはドイツのマルクス主義学会のほう  
 が、多少日本の学会より進歩してゐたといふので、それをまねただけで、ほとんど、  
 ローザ・ルクセンブルグ（二八七〇～一九一九、ポーランド生れ、のち、ドイツの社会革命運動婦人  
 闘士）とか、レーニンとか、デボリーリン（一八八一～一九六三、ソ連の哲学者）とかの知識  
 で、それまでのマルクス主義の読みおとしを叩いただけですね。日本人のマルクス主  
 義理解、ディアレクティークの理解はなつてゐないと言つてゐるのは、みんな引用文  
 でね。お経文のやうにルクセンブルグが出たりレーニンが出たりして、「お前のとは  
 違ふぞ」と言つて叩いただけで、彼自身が考へつゐたものは何もない。ぼくは、これ  
 は日本のインテリゲンチヤの大きな特徴だと思ふのです。

### 吉野作造

**葦津** それで社会主義者ではないが、吉野作造（一八七八～一九三三）さんなんぞ、ぼくは  
 著作集をひろひ読みただけで、をかしくなつちやうのは、思想が実に他愛なくスム  
 ーズに變つてゐる。なんでかう變つたかといふ論理の筋といふものは見えてないので

す。その当時の国際学会や世論の主流をただ追つて行つてゐるといふだけなんです。だから主流が変れば彼の論が変つたといふだけで、彼自身の思想の論理的發展、展開は、極めてあとづけしがたいものになつてゐる。

一番極端なのは、二十一箇条条約（大正四年—一九一五—日本が中華民國に対しての要求）を日本が要求した際に、吉野が書いた論は「当然である」といふ積極支持論ですよ。それから間もなく中国の五・四運動（一九一九年）があつて二十一箇条を激しく弾劾するときに、一番敏感に五・四運動の支持をして名声を得たのが吉野ですね。その間の大転回 of 思想論理的な痛切な葛藤といふものは、ほとんど見られない。ケロツと變つてゐるのですね。彼は二十一箇条を日本が出した時には、当時の第一次大戦の国際情勢の関係で、米英政府も公認してゐるし、当時の欧米知識人の国際世論もみとめてゐるので、国際政治学上当然だと思つてゐるのです。ところが、戦争が終つて米英が日本を牽制するやうになつて、世界の進歩勢力が五・四運動に対して同情するやうになつた際には、五・四運動に共鳴するやうになつたといふだけの話なんです。彼自身の内なる思想の苦悶葛藤としての變化過程を見ることができない。日本では、国際的学会

や時代思潮の主流がどう変化して行くかといふのに、早く追随して行った人が新知識、学問の権威だといふことになってゐるだけだと、ぼくはさう思ふのですよ。

戸田 同感ですね。

葦津 何か先物買ひの競争をやっただけなんだな。それで先物買ひで失敗した連中は出世しなかった、当った奴が出世したといふだけなんだ。社会主義運動をもぼくが批判したのはそれですね。日本の土着の民衆の間からの要求を汲んだものでないといふことですね。民権運動なんかには「東洋的民権百家伝」とか何とか言つて封建時代の佐倉惣五郎とか義民とか、さういふものにファウンデーションを置いて考へてみようとする努力は、多少見られますし、武士の間の忠諫の思想とか、放伐論とかいふものとの交渉関連をも考へた人はあると思ひます。ところが、社会主義運動のほうには、日本の土壌の最底辺の思想を汲みあげようといふ努力がほとんどないといふこと、先進国の思想潮流に追いついてゆかう、学んでいかうといふ態度が、コミンフォルム批判までの間、実に明瞭である。日本社会の条件としては、かう修正しなければならぬのではないかといふ程度の意見も出てゐないといふことですね。これがぼくは一番

問題ではないかと思ふのです。

戸田 それは日本の人文科学の傾向と同じですね。よく似てをるのです。

### 宮本顕治の宗教容認説

戸田 そのお話で承りたいのですが、今度の宮本発言ですね。創価学会との連携の声明

——。

葦津 これはぼくは面白いと思ふのです。

戸田 ある意味においてはね。——つまり、民主的な革命を考へて、高度共産主義社会革命後においても人間の苦悩はあるといふ——。

葦津 宗教ね、これはぼくは大問題だと思ふ。

戸田 これを、いまのお話を聞けば、日本人として初めてソーシアリストが自分で考へたものだといふ評価を素直に与へていいわけですね。

葦津 これは素直に与へてよいかどうか非常に問題だと思ふ。これは宗教学者のあなたに大いに検討していただきたい点ですがね。とにかくクティックとして宗教団体を

利用するといふことですね。ある段階までの間は利用するといふ考へ方、これはコム  
ミスニトの間では、かなりに国際的に大きく一般的に見られることです。とくにイタ  
リアなどでは――。

戸田 フランスもさうですね。

葦津 フランスもさうですが、その利用がまづかったので、ポルトガルではえらい混乱  
をしてをる。その潮流で、ある段階まで反ファシズム闘争においてのカトリック勢力  
との連合といふことまでは、これは例のフランス共産党がレジスタンスの時代にやっ  
たことと同じですね。ポーランドでもウクライナあたりでもみんなやった。宗数の利  
用は、明確にこの段階までといふ考へ方があるわけですね。ところが、その潮流に乗  
って来て、最後に高度共産主義の社会においても宗教は存続すべき理由があるだらう  
といふことを宮本が言った。マルクスレーニン主義の人間でそれを言った人間は今  
まで世界になかったとぼくは思ふ。

ぼくは、高度共産主義社会において宗教が存続し得るといふことを断定すれば、マ  
ルクス主義の階級的唯物弁証法は、根本的に解体すると思ふ。一切の人間の社会意識

は階級の文化的発展の段階に応じて決定するのです。その階級の文化的発展段階に条件づけられない意識といふものは存在しません。あなたのベルジャエフ論か何かにも書いてある、あそこが一番問題なので、普遍的なる人間性とか人間意識なんといふものはあり得ぬといふのですね。とにかく階級意識以外の社会意識はあり得ないといふ、これが一番の根底なんです。ところが、それを階級関係だけでなく、個人関係で、さまざまに社会意識も変り得るだらうと言ふのでなくては、宗教永続論は成立しない。宗教が永続するといふのは同じ階級であっても、異なる意識を持った社会集団が成立し得るだらうといふことを意味するから、これは実にマルクスの世界観の根底の解体なんですよ。それを言ったといふことは、それはあなたのおっしゃるやうに初めてでせう、初めてだけれども、彼がさういふことを言ったのを、マルクスレーニン主義としていつまで容認し得るか。それからまた、さうした宮本主義で行くといふことになる、日本共産党はマルクスレーニン主義の世界観から訣別しなければならぬといふことですね。それは許されないのでせう。

## 山本勝市のマルクスズム批判

戸田 まだいろいろ細かい点があるのですが、それで全体として日本のマルクスIIレーニン主義に対する批判として、先生ご自身を抜きにしまして、「特にこれは批判者として評価できる」といふ方をご指摘願へませんか。かういふ点は正しい批判をした人だといふふうに先生の頭に残るのはどういう方ですか。

葦津 生きてゐる人ですか。

戸田 どちらでもよろしうございます。



カール・マルクス

葦津 ぼくは、山本勝市さんなんか学問的に相当高く評価されていい人だと思ひますよ。マルクス経済学の欠陥は、マーケットといふものの価値を見ない点で、結局うまく運行できないといふことを博士は指摘したのです。これはソ連のやうな社会主義社会でも結局マーケットが大事だといふことは認めるやう



になったんですね。マーケットといふものの意義を強調したのは、先見の明もあったし、マルクシズム経済学のもっとも大きな弱点の核心をついたといふ評価をほくは考へてゐます。

戸田 あとはかにどなたが頭に残ってゐますか。正面切ってマルクシズム批判をやった人はあまりないのでですね。

### 小泉信三のマルクシズム批判

葦津 マルクシズムに反対の人はマルクスが嫌ひでマルクスを勉強しないのですね。古典的マルクス主義を批判した人としては小泉信三。これはマルクスIIエンゲルス時代に対する批判では非常に価値のあるものがありますね。しかし、スターリン時代以後のマルクス主義については、小泉さんは大切なものも読んでゐないのだらうと思はれる点もあります。

### 高島素之の国家論

葦津 それから国家論に対する批評者としては高島素之だらうと思ひますね。国家は消滅しない、階級がなくなっても国家は消滅しないといふ論を立ててゐます。これは結局今日のソヴェト共産党が事実上認めてゐるのじゃないですか。いまは「人民の国家」といふやうなことを言ふ。「階級国家」でなく「人民国家」などといふことは、マルクス・レーニンの原典の階級国家理論を読んだだけでは出て来ないはずなのです。高島は国家といふものは階級がなくても永続するものであると言つてゐるわけですね。

### 高橋亀吉の実証的研究

葦津 それから、前にお話した労農派・講座派の「日本資本主義論争」の際、彼らに反論した高橋亀吉。労農派については前にお話しましたので略しますが、これに対して、共産党主流に立った連中は明治維新を絶対王制の確立にすぎないとする野呂栄太郎、服部之聡等のいはゆる講座派史論で対決、天皇制下においてブルジョア経済は、独占的展開をしめしたが、日本では絶対封建制の残存はなほ強大で、(地主、貴族・

官僚) この二者との堅い不可分的同盟に支配体制の特色があるとし、同盟の統合者たる天皇の打倒が第一前提だとします。だがこの支配体制の同盟が堅いので、その中核の天皇制を倒せば、その後の民主革命は急速にプロレタリア革命へ発展する、との二段革命論です。この天皇制を第一の当面の攻撃目標とするテーゼのために、講座派が労農派とは比較にならない猛烈な弾圧をうけたのは事実です。こちらは結局コミンテルン(ブハーリン主義)を学んで、日本データを集めたものだったやうです。労農派の猪俣津南雄は直接にソ連からは学ばないで、確か米国でマルクス主義経済学を研究して、国際経済学の極めて一般原則論に基礎をおき、その一般様式で日本経済の実情を論じました。

これに対して、反共の高橋亀吉が豊富な日本経済の実証的統計資料知識で反論して、華々しい論争をしました。この高橋はプチ帝国主義論者として、その理論水準は高くなかったやうですが、その実証統計の知識は卓抜でした。この反マルキスト高橋との論争に刺激され、彼を反面教師として、当時のマルキストが日本経済の実証研究に努力するにいたったのは、紛れもない事実だと、私は思ひます。

### 三、現代日本のマルクスズムと世界のマルクスズム

戸田 ただいままでのお話で、日本のマルキストやアナキストたちが、ほとんどみな外国の思潮に動かされて運動して来たことがわかりましたが、現在の状態はどうなっているのでしょうか。

葦津 マルクスレーニン主義は、スターリンが死ぬまで一本だったのです、厳然と。彼が死んでからぐらつき出して、ソヴェエト中心の、ブレジネフ流のマルクス主義と、毛沢東中心のマルクス主義と、ヨーロッパ型マルクス主義と、今度はベトナム、北鮮あたりのやうなマルクス主義と、かなり顯著に分裂したわけです。ヨーロッパのマルクス主義は七分どほりソ連についてゐます。ヨーロッパの共産党は、大体毛沢東に反対ですね。いはゆる平和移行による革命はチリーで失敗したが、——本当の平和移行はできないけれども、なるべく平和移行的に革命を行ひたい、それでないと、とても人民を引っ張って行けない、といふ意識がありますね。それが大きな軸になるの

は、フランスとイタリアじゃないですか。フランスの方がよりソ連に近いでせうね。日本の左翼がまたフランスを先生にしてやってゐるでせうね。

戸田 最近の宮本はイタリアといふことですね。

葦津 イタリアがトリアッチ（一八九三—一九六四）以後構造改革論を出したのですが、日共は初め反対だった。日本共産党が志賀（義雄）を斬ったものだから、志賀をバックアップしたソ連共産党とも和解ができないでゐる。また党史のいきさつからして、構造改革論のイタリアがよいのだといふことを公然と言ひ得ない理由もあるでせう。

戸田 上田耕一郎も構造改革論ですね。

葦津 実質は構造改革論になっちゃつてゐるわけですが、さういふ名のついたイデオロギーはよくないといふことを取つて来た経緯上、公然とは言ひにくいこともあるでせう。フランスにも、イタリアにも、ポルトガルにも常置委員を置いて、ヨーロッパからは毎日レポートを取つて研究してゐるといふ話です。だから、ソ連、中共からはいまほとんど意見を聞いてゐないんじゃないですか。

ところがフランスとイタリアでは、いろいろな点で差があると思ふのです。チリ

の革命後の反応ですね。フランス共産党主流の考へ方は、結局、国軍内に有力な革命への援助者のない革命は、平和革命であれ、暴力革命であれ、なんであれ、決して成功しない。軍隊工作といふものは非常に大切なものだといふことですね。しかしポルトガルほど露骨では、いささかまづいといふのでせう。軍隊が少くとも好意的中立以上の態度を取るのではありません、平和革命も出来ないといふのが、チリーの経験で一番の教訓になったのでせう。日共もいまはさうです。自衛隊、殊に関東管区に将校以上の一定数と下士官・兵を獲得するまではだめだといふのです。これは当然でせう。

**戸田** いまのソ連とは志賀義雄を斬ったことでわかるのですが、中共と一応切れてゐる。それはある意味において、今度の宮本発言の背景にもなると思ふのですけれども、中共と切れてゐる一番の問題はなんですか。

**葦津** 日共の立場は「今日の毛沢東路線と国際主義運動」(一九六七年十月)といふ文で公式に表明されてゐます。中共がいかにかに日共に対して無理な大国主義的干渉をして来たか、日共がその無理に従って来たかを明白な史実をあげて示してゐる点で、この文書は非常に興味ふかいものです。いくつも無理な指導干渉の例がありますが、そのなか

で当時、毛沢東が日本共産党に対して高度工業国の革命理論の必要をみとめないで、中国の毛沢東式人民戦争論で武装蜂起を強要したこと、これが到底宮本一派のついでに行けなくなった最重要でせう。

そのころインドネシア共産党のアイゼット一派は、北京の指令で動いたが、これは惨敗して三十万の死の犠牲を生じた。しかし毛沢東は、すべてのアジア諸国に対して、日本に対しても緊急に反米武装蜂起こそが、唯一のコムミニズムの道だと強要した。一九六七年の日本共産党にそれができなかったのは、当然でせう。

「日本では、今さういふ軍事闘争をするやうに党の組織が出来てゐるのではない」といふので、その説明で周恩来は諒解したとかいふのです。ところが、毛沢東がどうしても聞き入れなかった。それで、間に合せみたいな共同声明を拵へて署名調印するばかりになってをったのを、中共が署名拒否をしたさうです。要するに、アイジエツトのやうに虐殺されてしまったのではかなはんといふことですよね。

中共はあの当時非常に緊迫感を持ったらしいのです。それで中共への米国の直接介入を妨げるのに、太平洋岸を一斉に蜂起させて米軍を分散することが緊急だと思つた



のに、日共はその命令をきかなかった。

それに日共の方では周恩来とは一応の話合いがついてをったのに、毛沢東が最後に、文案は出来てをったのにサイン拒否の命令を出した。日共のほうではかう言っているのに、周恩来は、日本とは何の話もしなかった、その時には外国に行ってをって話もしなかったと『人民日報』で書いたりした。

それをまたこっちで、周恩来が嘘をついたと書いたので、復縁するのが困難になってしまったわけですね。廖承志が来た一昨年の夏にかなり接近したけれども、これは明らかに宮本が反対したと思ふのです。

戸田 今日のお話のポイントになるのですが、日本人としてマルクスレーニン主義を克服するといふことの出て来る背景は、国際共産主義路線の中で、孤立化するといふか、独自化するといふか、さういふことになりますか。

董津 それでもなほ彼らの新しい発想は、フランス、イタリアを学んでゐるといふことですね。

戸田 最終の段階になれば、暴力独裁といふ点では一貫してゐる。

葦津 それでフランス、イタリアを学んでをって、そしてフランス、イタリアにないやうなことを言ったのは、ただ創価学会の話だけだった。ぼくはさう結論出来ると思ふ。あとは大体、日本人のほうが先に言って向うがこちらの言ふやうになったといふ話はないですよ。ところがその学会との協定は失敗に終るらしい。

戸田 ほかの学問でもさうなんです。どうもありがたうございました。

葦津 いや大変にぞんざいな話で恐縮しました。今日の私はあらかじめ何の用意もなかった。戸田さんとは二十余年前かの教養叢書の『現代の思潮』の共著で、私が『社会主義論』を書いたものだから、それで私が社会主義を知ってゐるかと思はれたのかもしれないが、私はあの時代以後は、社会主義研究をやめてしまったので、少しも知識が増してゐないばかりか、今日いきなり明治以後の社会主義思想史のやうな話が出て来たので、実は戸惑ひしました。私は、知識が進まなかつただけでなく、忘れたことや記憶ちがひもあるかと思ひます。私の話が誤つてゐないかどうか、文献で確かめて下さい。はなはだ自信がないのですが、対談を辞退もしないで、お話したの

は多少の意味もあります。それは、日本社会主義史を戸田さんがお考へになる時、一つの御参考になるかと思ってお答へした一つの私の過去の経験があるからなのです。

私が社会主義勉強をしたのは、戦前のことで、コミンテルン文書等の時局論のみでなく、歴史的なマルクス・レーニンの古典ですらも発禁が多くて、伏字やカットが多かった時代です。私の友人に熱心なコミュニニストがゐて、英訳書などをくれるので、対照しながら読みました。だから一行一行を熱心に読みました。友人のコミュニニストは獄中で病をえて、家に帰って来て間もなく死んだり、ある者は自殺したりしました。彼らは、いかにも冷徹な唯物理論を主張してゐるかに見えました。その実は、人道主義の殉教者のやうな青年で、私が、人間的に彼らに同情したの  
は事実です。ただ私は、人間的に同情的でありながらも、彼らのやうに殉教者の心理にはなりにくくて、彼らがマルクス、レーニン、スターリンの一系列で行くのに対して、アナーキズムを併行させて読み、今日お話ししたやうな批判者のものもいろいろと読み考へました。私は、命を懸けての研究である以上、できるだけ博く読み、自らの思想で十分の自信を固めたかったので。それは私の家の事情が、特殊に日本主義的だったので、最後の決断をして殉教者となるには、よほどの慎重さを要したからです。そして結局は、昭和の動乱時代には右翼的思想の側に急激に傾いて行きましたが、それでも私は、戦時中にも社会主義研究をつづけました。

戦時中も獄窓から洩れて来るコミニユニストの声は、私の心にいつも問題を投げかけてゐました。だが戦後の左翼解放の時が来て、コミニユニストが公然と先覚者のやうにして、活動しはじめると同時に、私のコミニユニズムに対する関心は、一瞬にして消え去りました。それは白昼の幽霊のやうにバカバカしく見えました。私は、すでに古典的思想研究などしなくなり、ただ現実政治の時勢論として観察するに止まりました。戸田さんとの共著で「社会主義論」を書いたころは、そんな時でした。その後は、いよいよ不勉強になり、二十年を過して来たわけです。今の時代は、私がまじめで勉強した時代とは全く反対で、左翼コミニユニズムの著書は、大量出版され、とくに思想史などは、資料も正確で豊富なものが、洪水のやうに流れてゐます。私のやうな不自由な時代に、大変な苦勞をして、ともかく英訳書などを入手してひそかに隠して、一語一語を確かめ、自分でいろいろ考へなければならなかつた時代とは全く反対です。おそらく今の人は、私が十年を要して読んだものを何の苦勞もなく、一年で読み通し得ると思ひます。だから私などが話をすることの知識は、ごく貧弱で、まったく微々たるものであることは確実です。

だが一つ言ひ得ることは、今のやうな自由な時代には、何の印象も残らないままに、数冊の書を読み棄ててしまふ。それに反して私共は、一章ごとに強烈な印象や、深い疑問や感想をもって読み、考へたと言へるかもしれません。それで、そのやうな意味で、今は全く不勉強にしてゐる

私などの「感想」も、貴方がたが、今日、豊富便利なデータで、新しく勉強なさる時の何等かの参考、ヒントになるかもしれません。私の話は、それ以上のもものでは決してありません。記憶力がひや誤ちもあるかもしれません。新しい資料で、正確な御研究を進めて下さることを願ひします。



第二章 日本におけるマルクス経済理論批判の歩み

三浦貞蔵



はしがき	49
一、マルクス価値論をめぐる論争	52
小泉信三「労働価値説と平均利潤の問題」	
小泉対河上、榊田論争	
生産価格説の構成上の欠陥	
二、マルクス労働価値説の致命的欠陥	75
異質労働還元の問題	
「社会的必要労働時間」の問題	
三、マルクス地代論批判	86
二木保幾氏の批判をめぐって	
高田保馬氏の批判	
四、資本主義崩壊論批判	93
五、社会主義経済の根本的難点—経済計算論	98
むすび	111

## 第二章 日本におけるマルクス経済理論批判の歩み

はしがき

「科学的社会主義の聖書」といはれるマルクスの大著『資本論』第一巻が出版されたのは、一八六七年のことであるが、その第二巻および第三巻は、彼の死（一八八三年）後、その莫逆の友フリードリッヒ・エンゲルスの校訂を経て、一八八五年および一八九四年に、それぞれ公刊されたものである。『資本論』には、一体何が書かれてあるのか。

マルクスの研究目的は、労働者を備ひ、市場に販売するための商品を生産する「近代社会の経済的運動法則」を明かにするにあつた（『資本論』第一版序文）。彼の言をつきつめると、資本主義的生産方法が発達するにしたがつて、働きたくても働けぬ労働者（過剰の人口）と、売らうとしても売れぬ商品（過剰の商品）がつくりだされて、資本主義の

没落と社会主義の到来は必至である、といふのである。そしてこれらの理論の土台をなすものは、彼の価値論である。この説は、『共産党宣言』（一八四八年）、『賃銀労働と資本』（一八四九年）、『経済学批判』（一八五九年）、『価値・価格及び利潤』（一八六五年）等において述べられてゐるが、『資本論』において、さらに精細に展開されたのである。

マルクスの経済理論に対して、ウィーン学派のポエーム・バヴェルクが有名な『マルクス体系の終焉』<sup>(1)</sup>を書いたのは、『資本論』第三巻公刊二年後の一八九六年のことであり、つづいて著名な社会主義者の間からも、マルクス学説に対する批評が行はれるにいたつた。修正主義を唱へたエドゥアルト・ベルンシュタインの名はよく知られてゐるが、高橋誠一郎氏（一八八四〜）の『経済学説史略』（三九三頁）のなかには、イタリアのサンヂカリスト、アルツリオ・ラブリオラのつぎのごとき文言が紹介されてある。

「吾人マルクス主義者が先師の外套を彌縫せんと試みつつある間に、経済学は日々若干の成長を為しつつあるのである。吾人にしてマルクスの『資本論』とマーシャルの『経済原論』（一八九〇年初版）』とを逐章比較したならば、吾人は『資本論』中に於いて数百頁を費した問題がマーシャルによって僅々数行裡に解決せられて居ることを発見

するであらう。」

このマルクスの経済理論が我が国に伝へられたのは、日露戦争（一九〇四～五年）前後のことで、右のヨーロッパにおけるマルクス批判が現はれはじめた頃とほぼ時を同じくしてゐる。西川光次郎著『カール・マルクス』（一九〇二年）がその先駆といはれ、つづいて片山潜（二八五九～一九三三）、幸徳秋水（二八七一～一九二二）、堺利彦（二八七〇～一九三三）、森近運平（二八八一～一九二二）、山川均（二八八〇～一九五八）氏等の社会運動家の論文、著作、翻訳等により<sup>(2)</sup>伝播普及されたのであるが、やがて大学内に侵入して、多くのマルクス学者が輩出し、ロシア革命（一九一七年）、第一次世界大戦終結（二八一八年）の前後から思想界に勢力を振ふにいたつたのである。そしてマルクス主義が、多くの知識人にとって殆ど常識となつたことが、当時の著書論文等に見うけられる。

## 一、マルクス価値論をめぐる論争

マルクス経済学説に対する我が国における批判については、経済学界とくに、マルクス主義陣営に与へたその影響の甚大なることからいって、慶應大学の小泉信三教授（一八八八—一九六六）が、大正十一年（一九二二）二月の『改造』誌上に発表した論文「労働価値説と平均利潤の問題—マルクスの価値学説に対する一批判」をまづ重視すべきではないかと思はれる。

右の小泉論文を発端として、小泉氏と山川均、二葉大三、河上肇（一八七九—一九四六）、榎田民蔵（一八八五—一九三四）、高島素之（一八八六—一九二八）の諸氏との間に、はげしい論争が展開され、とくに河上、榎田両氏との間の論争は、昭和改元の頃にまで及んでゐる。後れて、土方成美（一八九〇—一九七五）、高田保馬（一八八三—一九七二）、加田哲二氏等が登場して、前記の河上、榎田氏のほか、舞出長五郎（一八九一—一九六四）、向坂逸郎（一八九七—）氏等を加へて論争がつづき、これも数年にわたって行はれた。この間にあって、マルク



小泉信三

スの「差額地代論」の部分について、二木保幾氏（一八九二～一九三四）（当時早稲田大学教授）が批判論文を公けにしたのを契機として、主に『改造』、『中央公論』、『日本評論』等の諸誌上で討論がなされ、価値論論争は地代論論争へと発展したのである。

小泉信三氏がマルクスの価値論に対して提起した問題は、『資本論』第一巻に説かれる労働価値説は、『同』第三巻における平均利潤を前提とする生産価格理論によって覆へらざるを得ないのではないか、といふことであつた。労働価値説がマルクス経済学説の根本理論であるとするれば、右の小泉氏の批判は、重大な問題提起であり、これに対してマルクス主義者たちは、労働価値説と生産価格説とを何とかして調和させようと工夫して、小泉氏に対する反批判を展開し、小泉氏また、周到緻密の論理をもってこれに應酬したのである。そこでまづ、この論争の発端をなした前記『改造』誌上の小泉論文の要点をここに引用することにしよう。

### 小泉信三氏「労働価値説と平均利潤の問題」

小泉氏はいふ。

「問題は斯うである。マルクスの資本論第一巻に説かれるやうに、(而してリカルドオがその価値論の章の前半に説き、ロオドベルトスがその分配理論において承認するやうに)、財の価値がその生産に必要な労働量のみによって決定せらるるものならば、生産に投下せらるる資本は同額であっても、その資本が代表する(若しくは働かす)ところの労働量が同一でない場合には、新たに産出せらるる収益は同一でなかるべき筈である。即ち同額の資本の挙げ得る利潤額、従って利潤率は、資本中の労働雇傭に充てらるる部分の大小によって一々違って来なければならぬ筈である。然るにマルクスは、一方においてリカルドオ及びロオドベルトスと同じく、利潤率なるものが、實際上においては決して資本の組成如何(即ちその如何なる部分が労働雇傭のため投ぜられ、如何なる部分がそれ以外の用に充てらるるか)によって一々相違するものではなくて、利潤率は諸種の資本を通じて均一に帰するの事実(少なくとも傾向)を認めてゐるのである。そこでマルクスは矛盾に陥つてゐるものではないかといふ疑が起るのである。」(『小泉信三全集』3・一六八頁)



「マルクスは始めにA商品とB商品とが一定の比率、例へばX・Yで相互交換されるのは、(註、三浦記—『資本論』の原文にしたがへば、一クオーターの小麦と二ツェントネルの鉄が交換されるのは)この異なる二商品の間に、共通の或るものが同一量だけ含まれてゐるからだといふ考から出発して、その共通の或るものは労働で、これが即ち価値形成実質であるとの推究に進み、一商品の価値はそれを生産するため『社会的に必要な労働時間』(註、三浦記—世間的に普通または平均的に必要な労働時間)によって定められ、同じ(社会的必要)労働時間の生産物は、相互に価値を等しうし、等価のものは等価のものと交換されるとの結論に達したのである。而してこの理論を一商品たる労働力に適用すれば、その剰価値論が得られる。即ち、労働力の価値は、労働者及びその家族の生活維持に必要な物品の価値によって定まるのである。然るに労働者とその生活必需品の再生産に必要な程度以上の労働に服すれば、ここに消費せられた衣食住用品、及び消耗せられた生産用具の補償以上に、全く新たなる価値が発生する。これが剰価値であつて、資本家の支出資本に対する利潤となるものである。然るにこの新価値は、一に活労働のみから生ずるもので、既に生産用具に体现せられてゐる死労働は、ただ

その生産上に消耗せられただけが、そのまま生産物の価値に移されるに過ぎぬといふところから、マルクスは資本の、労働力に変形せらるる（即ち賃銀として労働力購買の用に充てらるる）部分を可変資本部分と名づけて、自余の不変資本部分と相對せしめてゐる。而して新たに生じた余剰価値額の、可変資本部分のみに対する比例が、彼の謂ゆる余剰価値率、その資本全額に対する比例が利潤率である。然るにその全資本額中において可変部分と不変部分との占める割合は、技術上の關係から一定量の労働に対して建物、機械、道具、原料を要する程度の一ならざるため、産業の種類によつて一々相違があるべき筈である。この技術上の理由に基づき決定せらるる、資本の不変部分の価値と可変部分の価値との組合せを稱して、資本の有機的組成といふ。そこで今、凡ての産業を通じて余剰価値率が同一（例へば百分の百）であるとすれば、産業の種類によつて、その資本の有機的組成を異にする結果、それに應じて各産業は、各々その特有の利潤率をもたなければならぬ筈であることは、左記の第一表に示される通りである。

即ち表の如くI乃至Vの五個の資本があつて、その金額は各々百であるが、その中

第一表

資本	資本	余剰価値率	余剰価値	利潤率	消費不変資本	商品価値	費用価格
I	80 c + 20 v	100%	20	20%	50	90	70
II	70 c + 30 v	100%	30	30%	51	111	81
III	60 c + 40 v	100%	40	40%	51	131	91
IV	85 c + 15 v	100%	15	15%	40	70	55
V	95 c + 5 v	100%	5	5%	10	20	15

第二表

資本	資本	余剰価値	消費不変資本	商品価値	費用価格	商品価格	利潤率	価値ト価格トノ差
I	80 c + 20 v	20	50	90	70	92	22%	+ 2
II	70 c + 30 v	30	51	111	81	103	22%	- 8
III	60 c + 40 v	40	51	131	91	113	22%	-18
IV	85 c + 15 v	15	40	70	55	77	22%	+ 7
V	95 c + 5 v	5	10	20	15	37	22%	+17
	390 c + 110 v	110		422		422		0

で不変資本（c）と可変資本（v）との占める割合は一々異なり、而して余剰価値は  
 一様に百分の百であるとすれば、利潤率は第四項に示される如く、資本の有機的組成

に應じて一々異なり、而して生産せられた商品の価値（ $\text{可變資本} + \text{消費不變資本} = \text{費用}$ ）。費用（ $\text{可變資本} + \text{消費不變資本} = \text{費用}$ ）は第六項の数字に示される通りであらう。

而して『資本論』第三卷のこの点に到るまでにマルクスが説くところは、大体においてその第一卷の読者の当然予期するところで、少しも了解に苦しむところはない。

然るに（マルクスに従へば）自由競争は、かくの如く各商品がその価値で売られて、各資本百に帰属する利潤額に異同のあることを許さない。資本は利潤率の低い生産方面から引出されて、高い方面に移され、彼此の供給の減少及び増加によって平均が実現せられるまで、この資本の移動出入は止まぬであらう。而してこの平均が実現せられた場合には、凡て五種の産業において産出せられた余剰価値総額が、五個の資本全額に対して均等に配分されるといふ。さうすると前者は一一〇、後者は五〇〇であるから、二二%なる平均利潤率が成立し、各資本がこの平均率に應じた利潤を得んがためには、各商品はその価値で売れずに、その費用価格に平均利潤を加算した『生産価格』をもって売られなければならぬ。この個々商品の生産価格は、必然一部はその価値以上に昇り、一部はその価値以下に下らなければならぬことは、上記第二表の

示す通りである。」（前掲書一六九—一七二頁）

「『……而して斯くの如き価格で売ることによってのみIよりVに至る資本が、その有機的組成を異にするにも拘らず、能く利潤が自I至Vにとって均等、即ち二二%なることを得るのである』（資本論第三卷上一三五頁）。斯く商品が、価値から離れた価格で売られることは、決して偶発的、一時的の現象ではなくて、資本の有機的組成に異同があるところで、利潤率平均の一事を認める以上は、必然的、永続的に起らなければならぬ現象である。否、却って一商品の生産価格は、『例外的にのみその価値と一致する』もので、最も発達せる工業上の生産（即ち不変部分が重きを占める資本をもつてする生産）においては、価値は生産価格以下にあるのが通則であるといふ。（前掲書一七二—一七三頁）」

「吾々にとつての問題は、これが『矛盾』或は労働価値説の抛棄を意味せぬであらうか否か、の一事に懸る。先づ結論を云へば、私は、他の労働価値説論者の場合は姑く措き、マルクスの場合に限り、その労働価値説と生産価格の説とは相容れないものであると思ふ。マルクス独特の方法によって立証せられた労働価値説は、決して財が

必要労働量以外の比例において、相互交換せらるる事実を承認することを許さない。もしこれを承認すれば、価値論の依って立つ基礎が崩壊せざるを得ないと思ふのである。」（前掲書、一七三頁）

「……………私が最も重要視するのは、上述の如き論理過程によって証明せられた価値法則（註、三浦記—投下労働量が商品価値を定める）は、必ず現実の商品交換比率を支配して、商品は必ずその価値で売買されなければならぬものだと云う一点である。上記マルクスの価値法則の証明方法が正しいものならば、それは、生産価格における商品の現実交換比率にも適用されなければならぬ。而して生産価格が価値から離れてゐれば、当初の価値法則そのものは破壊されることになるのである（前掲書一八二頁）。」

「……………彼の価値法則は、相交換さるる二商品には、共通の或るものが、同量だけ含まれてゐるとの断定から出発するもので、決して上記一クォタアの小麦と二ツェントネルの鉄の個々について、その生産に要する労働量を調査し、その結果として帰納的に、この二者が相交換されるのは互に労働費用を等しくするからであると論結したのではない。もし相交換さるる二商品の個々について調査したならば、マルクスは決



してその同一ならざることを発見したであろう。それは資本論第三卷上第十章の後半、市場価格と市場価値とを論ずる条下において、マルクス自身の明らかに認めてゐるところである。

以上がマルクスに対する私の批評の主要点である。而して右の理由に基いて、彼の価値法則は平均利潤率と両立し難きものであると断定する。」(前掲書一八四頁)

右に引用した小泉信三氏のマルクス価値論批判における論点は、前記ボエーム・パウエルクの『マルクス体系の終焉』に発するものではあるが、一部のマルクス主義者等がいふように、ボエームの単なる祖述ではない。小泉氏によれば、リカアドと、共にリカアドに学び、そこから出発して自分の理論を大成したロオドベルトスおよびマルクスの三者を一括して考察の対象とするともに、マルクスを正しく理解して批判するためには、『資本論』のみならず、彼がリカアドの影響をうけた始めから『資本論』に到達するまでの、彼自身の内部における発達と変遷過程を窺ふことを大切と考へて、『資本論』以前のマルクスの所説に対しても考察を加へたのである。<sup>(5)</sup>



この点、たしかに小泉氏の価値論批判には、他の学者には見出しがたい特色があり、方法として正しいと思はれる。「これに依て往々一部のマルクシストに免れぬ、癡り過ぎの独り相撲に類する偏執と訓詁癖とから免れ」得たことを、後年小泉氏は述懐してゐるのである。それはともかく、小泉氏は右のやうな見地から「ロオドベルトスの労働価値説と平均利潤の問題」(『国民経済雑誌』大正九年—一九二〇—九月)および「ロオドベルトスの地代論とリカアドオ」(『三田学会雑誌』大正九年—一九二〇—十月)の二篇を書き、そのつづきとして『改造』誌上に、前記マルクス価値論批判の論文を寄せたのである。前の二論文に対しては、経済学界、マルクス主義者の反駁はなかったが、後者が発表されるや、マルクス主義者側から、マルクス弁護の反駁が相次いでなされるにいたつたのである。

小泉氏に対して最初に反批判の矢を放つたのは、山川均氏で、同じ年の五月、『社会主義研究』第五卷第四号に、「マルクスの価値学説に対する小泉教授の批評を読む」と題する論文を掲載した。しかし小泉氏は、近世以降のヨーロッパの経済学説について、原典に即して綿密精細な研究をつづけ、それを基礎として論旨を展開してゐるのに対して、山川氏の批判は、その点において不十分であり、明らかに不利な立場にあつた。そ

のためか、山川氏の論調には不必要とも思はれる揶揄冷笑が交へられてあり、小泉氏は「再び労働価値説と平均利潤の問題を論ず—山川均氏の批判に答ふ」(『改造』大正十一年—一九二二七月)において、山川氏を評して、マルクスの亜流米人ブヂンおよびウンタアマンの著書を抛りどころとする「亜流毒の中毒症状」ときめつけ、これを問題にしなかつたのである。

### 小泉対河上、櫛田論争

小泉・山川論争につづいて、河上肇氏がその個人雑誌『社会問題研究』第三十九、四十一冊に「マルクスの労働価値説(小泉教授の之に対する批評について)」を書き、小泉氏に対して挑戦を開始した。ここで河上氏は、マルクスの価値と生産価格との関係を述べ、両者の間に矛盾のないことを説かうとしたのである。河上氏につづいて櫛田民蔵氏が登場し、小泉氏の主なる論争相手は河上、櫛田の両氏にしほられるのである。

いま、この論争経過に委曲をつくす紙幅は与へられてゐないので、河上氏および櫛田氏のマルクス弁護のための反批判の論点を示し、これに対する小泉氏の反論を要約する

にとどめざるを得ない。

その一 河上氏は、商品の価値通りの交換は、資本主義以前の経済段階に適用され、競争によって価格と価値が一致せず、生産価格に帰着するのは、発達せる資本主義段階についていはれたものとして、価値通りの交換と、価格は価値から必然的にはなれるといふマルクスの二つの主張は矛盾しないといったのである（『社会問題研究』第三十九冊所載前記論文）。これに対して小泉氏は、「三たび労働費用と平均利潤の問題を論ず」（大正十四年—一九二五—四月『改造』）によって反駁した。

『資本論』第一巻初章におけるマルクスの労働価値法則の説明には、それが資本主義以前の経済段階に適用されるべきものであるとは一言も述べられてゐない。したがって価値通りの交換を資本主義以前に逐ひやることは全くのナンセンスである。しかし小泉氏は、右のやうな文義解釈にはこだはることなく、これを度外視して、河上氏が主張するやうに、資本主義以前の段階では、果して商品が価値通りに交換されたと解しうるか否かを問題として提起し、かう説いている。

——河上氏の主張は『資本論』にその典拠はある。即ち第三巻において、商品の価値通りの交換は、生産価格による交換とくらべて「遙かに低級なる一段階」においてこれを見出すことができるが、生産価格による交換は「一定高度の資本制発達」が必要であると説かれてゐることがそれである。「遙かに低級なる一段階」では、労働が産出する価値の投下資本額に対する比率、したがって利潤が、異なる産業間に違ひがあるといふ事實は、生産者にとっては「どうでも宜いこと」であるから、産業間における生産の流動がおこらず、故に価値通りの交換が行はれる、とマルクスはいふ。「この場合問題を決するものは、かかる社会において競争が行はれて、各生産者（労働者）は充分打算的に合理的に行動したものと想像することを許すか、これを許さぬか」である。もしこれを許すとすれば、利潤率の高低は「どうでも宜いこと」ではなく、生産はより有利な産業へ移り、その産業の生産物価格を下落に追ひこむことは、ボエームが詳述したところである。反対に「どうでも宜いこと」であつたらどうなるか。

「……利潤率が平均せず、従つて生産価格が成立せぬ一事のみである」が、生産価格の不成立は価値通りの交換が行はれることを意味しない。否利潤率が「どうでも宜い

こと」となると同時に、商品が「価値通りに交換されるといふ保障」も失はれなければならぬ。即ち同じ労働量が費されてあるものでも、例へば、A商品はその需要が多く、B商品はその需要が少ないとすれば、Aは価値以上、Bは価値以下に売れるといふこととなる。この状態が永續することを許さないのは、ただ自由競争による生産が価値以上に高いものに集中する供給の調節があることによるものである。したがって、この仮定が許されぬとすれば、右の調節も行はれず、価値通りの交換は保障されぬ筈である。(前掲書三三三—三四頁、二五二—二五三頁)

かくして、価値通りの交換は資本主義以前に限るといふ河上氏の主張は、『資本論』に典拠ありとしても、その典拠自体が理論的に容認できない。これが河上氏に対する小泉氏の反撃の要点である。

その二 河上氏はまた、マルクスの価値とは、交換経済の現象には現はれぬ一つの觀念であると解することによって、マルクスの価格論と価値論の衝突を救はうとした。それは櫛田民藏氏によって「価値人類犠牲説」(大正十四年『大原社会問題研究』所載、「マルクス価

値概念に関する一考察」と非難されたものである。河上氏によれば、経済的価値には使用価値（効用）と費用価値（犠牲）があるが、「此費用価値を人類全体の立場から見たもの」がマルクスの所謂価値であるといふ。そして「平等なる人間同士の間」では、この人類の立場から見た価値において物の交換が行はれ、これに反して、他人を生産手段として利用する「階級社会」では、価値は「階級的に歪められて観念される。」その社会では、「価値は、マルクスの所謂価値から多少の程度」離れる。したがって商品の交換はその価値を標準として行はれないのだ、とかういふのである。（『社会問題研究』第四十冊）

小泉氏は、河上氏の右の所論に対して、「マルクスが最も攻撃に力を用ひたのは、如何なる特殊社会形態からも独立せる非歴史的、普遍的な経済概念を立てようとする旧経済学者の研究方法」（前掲二六〇頁）であって、河上氏の主張する価値概念はマルクスの意図に戻るものである、と反駁した。しかし小泉氏は議論をここで停めず、マルクスの所謂価値を、何時いかなる社会にも通用しうるとすることがマルクスの真意なることを認めるとしても、かかる意味での価値は価格を支配する力を有せず、マルクスの「価値論と価格論の連繫」はこの解釈のために切断されて、かへってマルクスの意図に反するの



結果となることを指摘し、さらに次のやうにいふ。

「予は、以上の論によって、決して労働費用が交換比率に影響することを否認するものではない。しかし資本主義社会においては、労働費用はそれが資本家の出費(ex-pence)に現はるる限りにおいてのみ、交換比率を左右する。而して資本家出費が労働費用のみによって決せらるるは、賃銀が労働費用を代表し、而して全放下資本(註、三浦記—全放下資本)中にあって支出賃銀額の占める割合が均一なる場合にのみ限る。それ以外の場合においては、労働費用は交換比率を決定する一原因たるに過ぎぬのである。而してこの意味ならば、労働費用の自然価格、正常価格を与り決することを否認するものは、リカード以後殆ど一人もないといつてよい。吾々は敢へてカアル・マルクスを待つて始めてこの理を解するものではないのである。」(前掲二六八—二六九頁)

かくしてマルクスの価値論と価格論との衝突は、仮に「価値人類犠牲説」を容認するとしても、避け得ないといふことができよう。以上述べた河上氏に対する小泉氏の批判に対して、河上氏は、『社会問題研究』(第六十一—二冊)において応答し、櫛田民蔵氏が『改造』(第七卷第六号)に、「学説の矛盾と事実の矛盾」と題する小泉評を書いて、新た



に論争に加はった。小泉氏は『改造』(大正十四年—一九二五年十一月)に「四たび労働費用と平均利潤の問題を論ず——河上肇、榊田民蔵両氏のマルクス弁護説——」を寄稿して、右の両氏に応答してゐる。まづ河上氏の論点に対する応答の骨子から述べよう。

その三 河上氏は、マルクスの価値法則と価格論との衝突を避けしめるために、まづ『資本論』第一巻首章における交換方程式 ( $C_1 + K_1 + M_1 = C_2 + K_2 + M_2$ ) は、交換を意味せず、等価を意味するにすぎぬ、と解した。しかしこれは、マルクスの説明と明かに抵触するものであり、「殆ど一つの形容矛盾」であり、河上氏自ら撤回したはずの「価値人類犠牲説」を前提としなければ、容認しがたい議論であるとして、河上説を斥けてゐる。

その四 河上氏のもう一つのマルクス弁護——『資本論』第一巻首章において論ぜられる商品とは、「資本家的商品」が資本の生産物であるといふ一面の性質を抽象した「商品としての商品」であるとする事によって、上述のマルクスが陥った矛盾を調和させ

ようとしたのである。小泉氏は、「商品としての商品」は、なぜ価値通りに交換されるのかが問題であるが、この点に関する河上氏の説明が頗る曖昧なことを指摘した。そしてその追求の手をやすめず、痛烈にかう反駁したのである。

——「商品としての商品」が価値通りに交換されるといふことは、「一つの理論的仮定」なのか。もしさうであるとすれば、交換される一クォーターの小麦と二ツェントネルの鉄とが互いに等価なることをまづ承認しておいて、この二物間に共通なものをたづね、商品の交換比率に現はれる共通な或るものは、即ちその価値である、と論結するのは、もとめようとする結論をばその前提とするものである。マルクスは交換される二物間に共通なものが等量の労働であると結論する。ところがこの場合、交換は等価の商品の間にのみ行はれることを前提とするとすれば、ここで等価とは何を意味するのか。もし等価とは等労働量を意味するといへば（マルクシストはかういはざるを得まい）、「吾々の知りうることは、含有労働量相等しき商品には相等しき労働量含有せらるゝといふこと以外には出ないのである。」——

小泉氏は前記の諸論文および「資本論以前におけるマルクスの価値論、価格論」（大正

十一年—一九三十一月『三田学会雑誌』において、マルクス学説の全系統には互いに相容れない二つの思想が存在する、といふことを再々指摘してゐる。即ち彼の『賃銀労働と資本』および『価値・価格及び利潤』では、労働費用と適応しない価格が成立すれば、利潤率の不平均をきたし、平均を回復しようとする力が価格を費用（価値）に帰着せしめることが説かれてゐるが、『資本論』第三巻では、利潤率の平均に基く生産価格が価値と一致しないことを論じてゐる。利潤率の平均は、競争と不可分である。そこでマルクスの所説を素直に信ずれば、自由競争は、価値通りの交換の成立条件でもあるし、反対に妨害条件としても作用することになる。一体マルクスは、自由競争は価格を価値に引きつけるといふのか、それとも価値から引きはなすといふのか、どっちなのだ、と小泉氏は問ひを発してゐるのである。「四たび労働費用と平均利潤の問題を論ず」における、河上、櫛田の両氏に対する反論もこの点に集中してゐる。

その五 河上、櫛田の両氏は右の小泉氏の問ひに対して、ひとくちに競争といつても二つの種類があるといふ。同一生産部門内の競争と異なる生産部門間の競争がそれ

で、競争は、前の場合には価格を価値に引きつけるけれども、後の場合には利潤率を平均させて価格を価値から引きはなすのである。したがってマルクスが、競争は、一方では価格を価値に引きつけるといひながら、他方で価格は価値から引きはなされると主張しても、それは彼の思想的混乱ではないのだ、とマルクスを弁護したのである。

これに対して小泉氏は、このやうなマルクス弁護論が出てくることは、『資本論』第三卷第十章にその典拠があるとはいへ、そのことの証明はマルクスによってなされてゐないことを指摘し、その後で、小泉氏はかう反論した。

——「同一の産業部門における競争が実現するのは無差別の法則」による単一価格の成立だけである。この単一価格が労働費用といかなる関係にあるかについては、「無差別の法則及び同一産業内の競争は何を告げることもしできないのである。」この価格は需給関係如何によって、或は価値と一致し、或は価値の上下にはなれることもありうる。価格を価値にむすびつける作用は、価格の騰落による供給の増減によるほかはない。この供給の増減は「産業間の資本の流出入」によらなければ、説明の途がない。もし産業間における資本の流出入を認めるとすれば、価格は価値に帰着せず、生

産価格を引力中心とすることは、マルクスの説明のとほりである。――

結局競争に二種ありとするマルクス弁護論は、自由競争は価格を、価値に引きつけるのか、それとも価値から引きはなすのか、といふ小泉氏の問ひに対する回答とはなり得ない。したがってマルクスの思想的混乱を救ふことにはならなかった、と見るほかはない。

その六 櫛田氏はまた、『資本論』冒頭の商品を、「資本主義的生産様式の支配的である社会」の商品と解したのでは労働価値法則と生産価格説との衝突を免れ得ないことから、資本主義以前の単純商品と解釈した。(『資本論劈頭の文句とマルクスの価値法則』(大正十四年―一九二五―『我等』所載)しかしこれは『資本論』の首章を素直に読んだ者には、小泉氏の指摘を俟つまでもなく、到底理解しがたいところである。ところが右の商品の性質について、資本家商品説(河上氏)と単純商品説の対立が今日なほマルクス主義者間に存在するのは、一つの奇観といふべきではなからうか。

以上、小泉氏を中心としてマルキストとの間で展開した価値論論争を通観して、注目されることは、右に述べたやうに、河上、櫛田氏等のマルクス弁護の論点が、ああいへば、かういふ式に転変してある点で、このことがかへって、その論拠の薄弱さを示す結果に終わったやうである。そしてこれによつて、マルクスの価値、価格論の矛盾が、かへつて浮彫りにされてしまったのである。

### 生産価格説の構成上の欠陥

さてここで、マルクスの生産価格論の構成上の欠陥を指摘した、高田保馬氏の所説にふれておきたい。『経済論叢』（第三十卷第一号）所載の「マルクス価値論の価値論」中の一節に、つぎのやうに述べられてある。

——マルクスの生産価格説は、「構論の出発点に於て、不変資本を構成する諸商品ならびに、間接に労働者たちの生活資料として可変資本を構成する諸商品ともに、価値に於て売らるることを前提とする」が、生産価格説そのものは「これら資本を構成する諸商品が、価値に於て売られざることを主張する。生産価格の理論は、資本を構成



する商品（仮に略して資本商品と云はふ）が、価値に於て売られざることを主張し、而もそれ自体の論証は、かかる商品が価値において売らるることを前提としてはじめて可能にせられてゐる。……かの資本商品そのものはどこから来たか。資本主義社会に於てである以上、それは資本主義生産の生産物としてのみつくり出されてゐる。さうである以上、それは、価値に於て買はるる道理はない。然るに、これを価値に於て買はれたるものと見てはじめて商品価値の生産価格化が説明せらるゝものとすれば、此説明は根拠を有しないものと云はれざるを得ないではないか。」――

この点について、小泉氏も、生産物は生産価格で売買されながら、生産手段は、価値によつて売買されると想定しなければ、価値論に基礎をおく生産価格説の成りたがたいこと、そしてこの想定は容認しがたい不合理であることを、既述の「労働価値説と平均利潤の問題」のなかで指摘してゐることを付記しておかう。

## 二、マルクス労働価値説の致命的欠陥

以上、マルクスの価値、価格論について、主として小泉氏の論争形式による批判を中



心に述べてきたが、ここで『資本論』第一巻の労働価値説そのものに対する批判をふりかへてみたい。

これについては既述の小泉氏の諸論文のなかでも触れられてゐるが、ほかに土方成美氏の『マルクス価値論』の排撃（昭和二年—一九二七）があり、高田保馬氏が「マルクス価値論の価値論」、「労働の異質性」（昭和五年—一九三〇—二月『祖国』）、「労働価値説は支持し得らるるや」（昭和五年『改造』第十卷第八号所載）の諸論文を発表してゐる。右両氏の批判に対して、河上氏、櫛田氏等の反批判があり、これに対する応酬もあるが、この経過はここでは割愛することにして、『資本論』第一巻の労働価値説に対する批判に関して、代表的といはれる高田氏の所論のうちで、同氏が最も重視してゐる点を、前記の「労働価値説は支持し得らるるや」に拠って、まづ紹介することとしたい。

異質労働還元の問題　高田保馬氏は、マルクスにおける「労働価値説の組立」を説明して、

(一) 交換される二商品には共通同量の或るものがあるといふこと、

(二)この共通物は使用価値の抽象による「抽象的人間労働」であること、  
(三)商品の価値の大きさは、そのなかに含まれる社会的必要労働量によって定まり、複雑労働は単純労働に換算され、それは「社会的過程」によって確定されるといふことである。

といふ。高田氏が最も重視するのは右の第三の論証であって、労働価値説の成否はこの論証如何にかかるとみた。以下同氏の主張の要点を紹介する。

——交換される二つの商品は、その双方に「体化」(註、三浦記—または対象化)されてゐる労働の比率にしたがつて、その割合が定まる、といふのがマルクスの立場である。

「此立場はまさしく、価格が(交換せらるる商品の中に体化されてゐる)労働の数量によって定まる、と見るのである。然るに、この労働の数量は如何にして計量せらるるか。作り出さるる使用価値の方面からは、如何に異質的である労働といへども、それが単純労働である限り、その労働の継続時間によりて、……複雑労働bの生産物Bは、単純労働aの生産物Aと交換せられる。ABの交換比率は、それぞれの生産の為に社会的に必要な労働abの数量によりてことなる。」ところが複雑労働bは一定

単位の単純労働  $a$  に還元され、「そこに  $A$  と  $B$  との交換比例が定まると云ふことになる。 $A$  と  $B$  との交換比例は、それぞれの生産に必要な労働、 $a$  と  $b$  との比例に外ならぬ。」「然らば複雑労働  $b$  は単純労働  $a$  にまで、如何にして還元または換算せらるるか。……『複雑労働は自乗化せられたる、又むしろ倍化せられたる単純労働として妥当し、従ひて複雑労働のより小なる分量は単純労働の大なる分量に等しい。かかる換算—還元がたえず行はれてゐることは経験が示す。』（註、三浦記—『資本論』第一卷第一章第二節）『ある商品は複雑労働の生産物であるとしても、その価値はその商品を単純労働の生産物と等しからしめ、従ひてそれ自身はたゞ単純労働の一定分量を表示する』（同上）。けれども、これは還元又は換算が行はれてゐることを主張するに止まつてゐる。労働価値説が成立しようとする限り、此換算は必要条件である、此条件が存立してゐることを主張するに止まる。」この点に関する河上博士の解説（『マルクス主義経済学の基礎理論』四八八頁）も、「複雑労働が単純労働に換算せられてゐると云ふこと、それが交換の過程に於て行はれてゐると云ふ主張だけである。」「而して此場合、換算の割合（比率又は尺度と云ふも等しい）はどうなつてゐるか。それは生産物  $AB$  の交換の比

率に於て与へられてゐる。かくて、前に述べたる部分とこの部分を一括して考へる。ABの交換比例は（その各々の中に）体化せられてゐる労働a bのそれぞれの数量によりて定まる。此数量は何によりて知らるるか、ABの交換比例によりて。これではすべてが一の循環に於て動いてゐる。交換比例（従ひて価格もさうであるはずであるが）は、労働量の比率によりて定まる、労働量の比率は交換比例に於て定まる。これだけの理論の形式に於てならば、労働量と云ふのに何を置きかへても、矛盾なく主張し得らるるであらう。」——

以上が、高田氏の主張する所であつて、問題は、労働量が価値の大きさを定めるといふことの説明にかかつてゐる。高田氏の言をくりかへすことになるが、単純労働の生産物Aと複雑労働の生産物Bが、仮に二対一の割合で交換せられるとした場合、労働価値説の立場からは、この二対一の割合でABの二物が交換されるのは、AとBのそれぞれに等量の労働が含まれてゐるからである、と説明するのは極めて当然である。しかしここで、等量の労働が含まれてゐるのは、AとBが二対一の割合で交換されるからであるといふならば、それは高田氏が非難するやうに循環論であつて、論証ではない。シユム

ペーター教授が、労働価値説は「実際の諸過程」を記述または説明するのに「分析の用具」としては極めて拙劣にしか働かないといひ、「第一労働価値説は完全競争の場合以外にはまったく働かず」、「第二に完全競争の場合ですら、労働が生産の唯一の要因でなく、労働がすべて一種類でないとなれば、円滑に働かない」<sup>(6)</sup>と簡単にいつてのけたが、この意味は、高田氏の詳密な分析批判を読んだ者には容易に納得される所であらうと思ふ。高田氏が、労働価値説は「信念として生きてゐるので、科学として支配してゐるとは思はれぬ」と断じたのは、きはめて急所を突いた見解である。<sup>(7)</sup>

「社会的必要労働時間」の問題　商品の価値は、その生産に費される社会的必要労働時間によって定まる」とは、マルクス労働価値説の「最高命題」である。ところが、これを経済の現実に適用しようとして、マルクスの立場から、精細に推究すると、彼にとっては甚だ不本意であらうが、価値と価格との関係は逆になってしまふのである。即ち、価値が価格を定めるのではなく、価格が価値を左右する、といふ結論がひき出されてきてしまふ。そしてそれはとりもなほさず、余剰価値説の破壊となつてしまふ。これ

は、小泉信三著『経済原論』（昭和六年—一九三二—）第十四節中における敘述の骨子である。以下少しく立入って著者の言に耳を傾けてみたいと思ふ。

——前述のごとく、商品価値から離れた生産価格が成立するのは、結局資本の流動による供給の増減がさうさせるのである。これはマルクスも承認するところである。もしさうならば、価値通りの交換も当然需給関係によるといはねばならぬ。ところがマルクスは、多くの場合、需要は価値実現の条件ではあるが、価値を造出するものではない、価値はどこまでも労働により、しかもその時の状態において技術上普通の必要労働によって定まる、としたのである。彼がこの立場を貫かうとすれば、人間労働力の支出は、その用途の如何を問はず、つねに一定の価値を生ずるといはねばならぬ。しかしかかる価値論は余剰価値論、利潤論の根拠とするわけにはゆかぬ。無用のものや売れぬものをつくったのでは、何人も利潤を取得することはできないからである。マルクスも、有用労働にしてはじめて価値を生じ、無用物に投ぜられた労働は何らの価値を産出するものではないことを認めてゐる（註、三浦記—『資本論』第一巻第一章第一節）。そこで有用物に投ぜられた労働が価値を生ずるとするならば、有用度の大小によって



価値の高低が生ずることを承認しなければならぬ。ところが多くの場合一物の有用度の大小は他物との数量的比例によって定まる。いかに有用なものでも、その供給量を増していけば、その価値が低下することは日常の経験によって知られることである。

ここに有用度の大小とは、つまり需要の強弱といふことに帰着する。さうすると、強い需要の対象物は価値が大きく、弱い需要の対象物は価値が小さい、といはざるを得ない。マルクスは、社会的必要労働時間が価値を形成する、といふ「最高命題」は譲歩しなかったから、これに別解釈を下し、「技術的必要といふ意味ではなく、供給と需要を比例せしむるための必要な労働量」を社会的必要労働時間として、これが価値を定めるといはうとした。「即ち一商品の生産行程上において一定量（例へば $m$ ）の労働が費されても、その商品に対する需要量が供給量に比して乏しければ、その商品は $m$ だけの労働を含有せぬものと見るのである。」その著しい例証は「資本論」のなかにいくつも見出しうる。商品価値はその生産に社会的に必要な労働時間によって定まるとしても、その必要は需要に対する必要を意味するといふことになる。マルクスの価値理論体系における価値と価格との関係は全く逆になる。即ち価値が価格を定



めるのではなくて、反対に需要供給によって定まる価格が価値を定めることになる。一商品はその生産に費される労働量如何にかかはりなく、需要供給関係によって定まる「価格だけの価値」を有するといはなければならぬことになる。これは、マルクスが一方において人間労働力の支出が価値を形成するといひ、他方において無用物に対する労働からは価値を生じ得ないとしたところから、必然的に導きださなければならぬ結論である。社会的必要労働時間を技術的意味に解しても、「社会的」を「平均的」と解する以上は、やはり需要を無視し得ない。平均的とは現在生産に従事する者の平均的労働費用と解するならば、需要の増減によって比較的劣等の生産者が参加するか否かによって、平均費用が増減することになるからである。上述のごとく、「社会的必要」の意味を需要に対する必要と解せざるを得ないとすると、その結果はマルクスにとって重大である。価格が価値を支配するといふことを労働力の価値に適用すると、労働者の生活費如何にかかはらず、労働力の価値は労働者に支払はれる賃銀だけのものであるといふことになる。「不払労働」が生ずる余地はなく、したがって搾取の概念は尠くとも経済理論の領域では成立しない。「マルクスの価値理論は、搾取を

説明するため存在する。然るに今推究し得たところによれば、マルクスの立場から出発しても搾取は有り得ぬこととなる。」

「マルクスの価値論はリカアドオの展開である。しかも彼の理論は、リカアドオミルを離れた限りにおいて失敗に終つてゐる。而してその失敗は労働を商品の供給を左右する重要な一要素と見るに止めず、進んで或は労働を価値形成実質となし、或は凝結労働即ち価値となすところに帰因する。……価値は労働の所産ではない。労働は商品の供給を左右する重要原因であり、任意に生産し得べきものにあつては、——需要を予定すれば——その長時に亘る交換比率は、その供給事情によつて左右されるといふだけのこと過ぎないのである。さうすると結局価値、価格の問題は、その欲望に対する稀少性 (Seltenheit, Knappheit, rareté) によつて決せられるといはなければならぬ。生産物の価値は労働費用が稀少性を左右する限りにおいてこれによつて左右されるのである。」利潤はいかにして生ずるのか。すでに生産された生産物とくらべて、労働そのものは稀少性の程度が劣る。その理由は、将来生産物となるべき労働そのものは、すでに出来上つた生産物ほどに人間の欲望を充たし得ないからであ

る。完成品と労働用具、原料とを問はず、生産されたものは、これを生産すべき労働より必ず強くもとめられる。したがって生産物の価格は労働の価格—賃銀よりも高く、その間に或る差額をおいてはじめて均衡が得られるであらう。この差額が利潤となり、賃銀を支払ひ、生産物を売る資本家の取得するところとなるのである。「要するに、労働によって価値が生産せられ、生産せられた価値から労働力の価値を差引いた残余が余剰価値で、これが利潤として配分されると見るのは失当である。」労働の価値も、生産物の価値も、それぞれ稀少性によって定まるとする外はないから、生産物も労働も、「共にその全価値だけの支払を受けてなほ且つ存在し得る。それは生産物の稀少性の方が高いからである。そこに支払はれざる労働はないのである。」但し以上は経済理論上の説明であって、労働者の現在における賃銀水準が高いか否か、その処置如何といふことは別問題である。——

以上、小泉氏の所説を、かなり詳しく紹介したが、小泉氏は、前記の価値論争の発端をなした論文「労働価値説と平均利潤の問題」の末尾で、ベルンシュタインやツガン・パラノウスキーの言を引用しつつ、搾取を説明するためには何等の価値論を必要とし

ないといった。労働搾取は事実として存在する、とみたのである。多くの非マルクスのな立場の人々でも、労働搾取論だけは案外素朴に信じこんでゐるが、これを理論的に克服した小泉氏の努力と力倆は流石であると思はざるを得ない。

### 三、マルクス地代論批判

マルクスの価値論と不可分の関係にあるものは、その地代論である。よく知られてゐるやうに、リカアドは、優等地と劣等地とが共に耕作されてゐる場合には、農産物の価格は、劣等耕作地における生産条件によつてきまり、優等の耕作地は、生産費の差額だけの地代を生ずるといった。マルクスは、リカアドの地代論に対して批評を加へながら、右の差額地代論の部分はこれを承認してゐるのである。

### 二木保幾氏の批判をめぐって

右のマルクスの所説に対して、土方成美氏が「地代論より見たるマルクス価値論の崩壊」と題する論文を『経済学論集』（昭和三年—一九二八—）に発表し、これに対して河上氏



土方成美

が『社会問題研究』誌上に反論を書いた。また、二木保幾氏が『中央公論』誌（昭和四年—一九二九—十二月）に、「マルクス価値論における平均観察と限界原理の矛盾」と題する論文を発表するや、マルクス主義者側からの反論が集中し、価値論論争は地代論論争へ発展し、それは昭和五年—一九三〇—頃までつづけられた。まづ二木論文の要点を述べることにしよう。

——マルクスは『資本論』第一巻から第三巻前半にいたるまでは、商品価値の考察にあたって「平均観察」を貫いてきた。即ち商品の価値または価格は、その個別的価値できまらず、社会的平均の市場価値或は平均的な生産条件のもとにおける生産価格に

よって定まる、と規定したのである。ところが第三巻後半の較差地代論（註、三浦記—差額地代論）においては、農産物の市場価値は、最劣等耕作地即ち限界耕作地の個別的な生産価格或は個別的な価値即ち限界生産価格に統制されると説いてゐる。かかる「限界原理」による価値、価格の決定方法は「平均原理」

の方法とは両立しない。

もし農産物の価値、価格が、最劣等耕作地における生産条件のもとにおける、産物の個別的価値または生産価格で決定されるとするならば、それより生産条件の良い優等耕作地の産物に生ずる超過利潤即ち「較差地代」は、マルクスのいふ、「虚偽の社会的価値」(註、三浦記—労働量によって定まらぬ、即ち価値なき価格)であつて、いかなる意味においても剰余価値ではない、といふ矛盾をさけ得ない。それは畢竟平均観察と限界原理の矛盾にはかならない。

「何れにしても平均観察に於ては『剰余価値』と負の利潤は相殺する。それ故に地代は消滅する(『資本論』第三卷第一部二六五頁)。之に反して較差地代を成立せしめようとするれば、商品の価値量は、其の商品の生産に社会的平均的に必要な労働量によって決定される、と云ふ価値法則を殆ど否定し去らなければならない。——」

カール・ムース教授は、その著『反マルクス論』<sup>(8)</sup>のなかで、マルクス理論は統一的原理を欠くといふことを屢々指摘してゐるが、右に述べた二木氏の批判は、まさしくマルクスのこの欠陥を衝いた一見識であるといへよう。



二木氏が提起した、平均原理と限界原理の矛盾といふ第一の論点に対して、マルクス擁護のための反批判は、その根拠が論者によりまちまちで、なかには、差額地代論そのものの否定にいたるやうな説明をしたり（猪俣津奈雄氏）、或は差額地代の場合における価格決定と独占価格決定とを混同するやうな錯誤（林要氏）に陥ったりしてゐる。

今日マルクス主義者間に定説となつてゐるといはれる向坂説によると、マルクスの価値法則は、農業部門では、「一つの重大なる偏倚を受けなければならぬ」といふ。その論拠は、商品生産には、自然的その他の制限がなく自由競争が行はれる結果、平均原理が価値を支配するが、農産物については、土地の豊度不等といふ自然的な制限的性質が競争に対する「一つの抵抗」となるからである、といふにある。しかし地味の不等といふ生産条件の優劣が競争に対する「抵抗」となるとするならば、一般の商品生産においてもこれに相当する事実は存在する。卑近な例をあげるならば、最新鋭の高エネルギー機械と陳腐化した低エネルギー機械が共に運転される場合には、当然生産条件において生ずる優劣の開きが資本力の違ひなどの事情によつて、相当長期にわたることもある。土地におけ



る地味の不等の場合と異なるとはいへないのである。その意味で、一般の商品生産においても競争に対する「一つの抵抗」は存在するのである。したがって向坂氏が主張するやうに、マルクスの価値法則に対する「一つの重大なる偏倚」は農業部門だけの問題ではないといふことにならう。

二木氏のもう一つの論点、差額地代は余剰価値説に抵触する、といふことについても、マルクス主義者たちの反論は、マルクス解釈に統一を欠き、相互に異見をたたかす状況も見られ、到底二木氏に満足を与へるやうな答はつひになされてゐない。

### 高田保馬氏の批判

労働価値説は、個々の商品交換を左右しないとしてみれば、社会全体についてみれば、総価格と総価値は一致するが故に、その効力は失はれぬ、とマルクスは強弁したが、差額地代を認めてしまふと、このマルクスの主張も壊れざるを得ないことを指摘したのは、高田保馬氏である。これは前記の「マルクス価値論の価値論」のなかで論及されてゐるものであるが、ここでは同じ趣旨がわかりやすく述べられてある『マルキシズムの経済

学的批判』(青年教育普及会、昭和七年―一九三二―)のなかから引用しておかう。

「例えば、茲に上田と中田と下田があつて、さうして、一定の生産物を挙げるのに下田では百、中田では七十、上田では五十といふ費用がかかると仮定する。若し価値即ち価格であるならば、此の場合の総価格は、矢張り二百二十である筈である。然るに前述したやうに差額地代の方から言へば、上田の品物も百で売れ、中田の品物も百で売れるのであるから、売上げは二百二十ではなくして、三百になる。言ひ換へれば、八十だけ価格が価値より大きいといふことになるのである。……而して農業以外の生産物に於て価値と価格とが総体から見ると一致するといふ考が維持されてゐる以上は、農産物も合せ考へた社会の生産物の全体に就て言へば、総価値よりも其の売上げの全体が矢張り地代だけ大きいのである。言ひ換へれば、総価格から地代だけを差引いたものが総価値になると言はざるを得ないのである。即ち価値と価格とは等しいといふことは、其差額地代の説明から当然毀れて来るのである。これは極めて明瞭であると思ふ。」(前掲書七六一―七七頁)

高田氏のこの論旨はまことに明快で、よけいな注釈を加へない方が賢明であらう。地

代論論争には加はらなかつたが、小泉信三氏が、既述の価値論論争のさなかの大正十三年―一九二四―『三田学会雑誌』（第十八卷第十号）に「較差地代と絶対地代」と題する長論文を書いてゐることを付記しておきたい。

#### 四、資本主義崩壊論批判

マルクスの資本主義崩壊論は、労働価値説、余剰価値説を礎石とするものであるが、その具体的論拠は、結局、資本主義が進むと、儲はれぬ労働者（産業予備軍）が巷にあふれ、商品がありあまって（販路欠乏また過剰商品）、さまざまの社会的災厄と混乱を生じ、しかもこれを救済する途は一切断たれる、といふことにつきてゐる。これについては、小泉、高田、福田（徳三）の諸氏によるのほか、多くの批評が加へられてゐるが、マルクスが論拠とする産業予備軍説、販路欠乏説そのものに多くの遺漏があり、また未完成のところがあるにもかかはらず、資本主義の没落崩壊の必至なことを予断したマルクスの主張は、まさに、偏頗に誇張されてゐる、と主張する小泉氏の所説を、以下に引用しておくことにする。

「産業予備軍とは畢竟失業者、又は就職を求めて得ない労働者である。それが如何

にして発生するか。……略言すれば、機械が人間を不要ならしめる。そこで資本の蓄積せらるること愈々大にして雇傭せられざる労働者は愈々多く、労働者の地位は愈々不安なるものとなる。……此法則が資本主義の存続を不可能ならしめるといふのである。」

「……吾々はマルクスに依て総資本に対する可変資本の相対的減少を教へられる（註、三浦記—資本主義が發展すると）。さうしてそれは容易く承認し得る所である。しかし労働者の福祉の程度を定めるものは、総資本に対する可変資本の割合ではなくて、人口の増減に対する可変資本絶対額の増減の速度如何の一事である。可変資本絶対額の増減は、当然総資本蓄積の遅速と、資本組成高度化の遅速に由て定まる。……即ち労働者将来の境遇を判定する為めには、吾々は之を決定する三の要素を先づ確めねばならぬ。人口と資本蓄積と資本高度化とのそれぞれの速度即ちこれである。而してこの三者皆な之を理論的に決定し得る丈の条件は与へられて居らぬのである。従て爾今産業予備軍が益々増加し、『労働者の窮乏、労働苦、隷属、無智、動物化、道德的墮落等云々』（註、三浦記—『資本論』第一卷第二十四章第四節）が益々甚だしきを加へる、といふ

ことは、マルクスの論拠では理論的に論証し得ない筈である。」

「結局問題は、ミルもいふ如く、機械其他生産上の改良の採用の速度如何に由て決せらるるであらう。……兎に角資本の有機的組成が高くなっても、被傭労働者の員数の増加は其為めに妨げられぬであらう。此事はオッペンハイマーが農村人口の都市流入の事実に由て証明せんとした所である。若しも産業予備軍は不変資本の相対的增加に因つて造り出されるものならば、機械を使用すること多き工業が之を造り出して、寧ろ農業が之を吸収しなければならぬ筈である。然るに實際に於ては、これと正反對の運動が、而かも余りに顯著に行はれてゐる。……文明諸国の統計を見れば、何処の國に於ても同様の現象に逢着する。人口は到る処に於て、不変資本の増加の速かならざる農村を去つて、其の速かなる都市に集中しつつあるのである。これは確かにマルクスの理論とは相反する現象である。」

「販路欠乏説は結論としてはまマルクス、エンゲルスの夙くから抱壞する所であつた。それは既に『共産党宣言』にも説かれ、『賃銀労働と資本』にも説かれてゐる。

……此結論を説明する理論は最後まで完了せられずじまつた。要するに問題は、資本

が益々蓄積されて行く場合に、生産せらるる消費財は果して都合よく資本家、労働者の所得を以て買ひ取ることが出来るか、又生産せらるる生産財は矢張り都合よく蓄積された資本を以て買ひ取ることが出来るか。必然的にその間に過不及が生ずるや否やといふ点に懸る。……然るに此肝要の点に就いてマルクスは其理論を完了せしむるに及ばず、資本論の原稿は空しく断片の儘で残されたのである。」「此外猶ほマルクスは資本論第二巻で、資本蓄積の可能性に就て、数式を按じて其証明を試みようとする。併し其処では、彼れは生産せられた消費材は資本家並に労働者の所得（所得中の享樂消費に支出せらるる部分）を以て購買せられ、生産せられた生産財は資本中不変資本として使用せらるる部分を以て購入されるのであるから、資本の蓄積即ち生産規模の拡大が円滑に行はれる為めには一定の釣合を以て生産の増加が行はれなくてはならぬといふ自明の理を説いてゐる。……併しマルクスが此処で説明してゐる限りでは、資本主義の行き詰りは説明されないで、却て資本蓄積の円滑進行が説明されてゐる。……

要するに、マルクスの販路欠乏説は、其結論と意向と丈けは分つてゐるが、其説明



は遂に——少なくともマルクス自身の手では——成功しなかったと言ふべきである。」  
以上が小泉氏の所説であるが、要するに資本主義崩壊論は、経済理論としては失敗である、といふことである。マルクスが主張する資本主義崩壊の理論的根柢は、極めて薄弱なものである。「資本家私有の終焉を告げる弔鐘は鳴る。収奪者は収奪される」といふ『資本論』の叙述には、マルクスの革命に対する異常な情熱がこめられてゐる。革命なくして、組織の崩壊はないのである。『共産党宣言』以来不変の、マルクスの革命意志が、資本主義崩壊論の根柢をなしてゐることを見おとすことはできない。偏頗と誇張はここに発するものといへよう。

## 五、社会主義経済の根本的難点—経済計算論

マルクスは、資本主義経済を分析批判して、その崩壊と社会主義の到来の必至なことを予断したが、かりにこの論証が正しいとしても、社会主義社会においては、資本主義社会にたちまさる経済的な生産分配が行はれるといふ約束や保証があるわけではない。これは社会主義経済について、具体的実証的研究を俟って、はじめて評価されるべきことである。

既述のやうに、マルクス経済学説に対する批判は、『資本論』を中心として相当精細になされてきたけれども、社会主義経済そのものに対する吟味は、マルクス主義者は勿論のこと、批判的立場の人々の間でも等閑に付されてきたきらひが多かった。

この問題を根本的に論ずるためには、「経済計算」理論の用意がなければならぬが、我が国においてかかる見地からはじめて社会主義計画経済について精密な検討を加へたのは、戦前、和歌山高商教授であった山本勝市氏（後に文部省国民精神文化研究所員）であ



山本 勝市

り、その研究成果は、『経済計算—計画経済の基本問題—』（昭和七年—一九三二—）として世に問はれてゐる。さらにそれは、のちといつても、昭和十四年（一九三九）に『計画経済の根本問題—経済計算の可能性に関する吟味—』（理想社）に収められてあるが、昭和五年（一九三〇）同氏の処女出版『マルクスイズムを中心として』のなかで、社会主義社会で果して「諸々の均衡が取れるか」を問題としたことが、氏にとっては経済計算論への足掛りをなしたものと考へられるのである。右の経済計算に関する著作の動機は、氏にとって単なる「理論的興味」にとどまらず、「重大な実践的意義」を有するといふ認識によるものであった。そこで、まづ問題の性質について、山本氏の所論の要旨を紹介しておきたいと思ふ。

経済とは、「財貨に対する需要（欲望・要求）」と其の充足との持続的調和を求むる「生の根本的要請」に答へるところの生活現象である。ところが、財貨に対する「全体としての需要」が無限であるのに対して、財貨の供給は、社会形態の如何を問は

ず、つねに稀少である。これは絶対不可抗の事実である。生産物の稀少とは、その生産に必要な資源の稀少性と同義である。「如何なる社会、如何なる時代に於ても、生産資源はその需要に対して稀少であるから、生産資源の各種生産への配分利用は、経済的に、即ち最大の効果を發揮するが如くに遂行されなければならない。而して、かかる資源の経済的配分が行はれるためには、各種財貨の生産費用とその効果が、それぞれ評価比較されなければならない。然るに今日の如く広汎複雑に、分業と迂曲生産の行はれる国民経済に於ては、各種財貨の生産費用と其の効果を相互に評価比較することは、単なる頭腦の価値判断によりて行はるべくもない。」そこで、費用と効果との比較考量—経済計算—が行はれるための根本条件は何かといへば、まづ「何等かの価値尺度（価値単位）が与へられねばならぬといふことが確認されなければならぬ。」そして、生産総資源の経済的配分を實現して、需要とその充足の持続的調和により、国民経済を形成するために経済計算が必要であるとするならば、社会主義経済に対する吟味は、「社会主義経済計算の可能性如何の問題」にかかはることであつて、社会主義に対する批評は、種々な角度からなしうるにせよ、「経済計算の可能性

如何の方面からの批判」こそ最も核心をつくものであることは明白であらう。さて、生産総資源の経済的配分とは何か。比較的緊要でない欲望をさしおいて、比較的緊要な欲望を充たすといふこと、一言でいへば、欲望の選択に帰着する。このことは現在の交換経済組織のもとにおいては、客観的に成立する市場価格をバロメーターとして、各人の利益追求の努力によって行はれてゐる。即ち需要のあるもの、より緊要な欲望の対象物の供給が不足すれば、その価格は騰貴する。さうすると、これを生産することは有利となるから、社会から命令され指揮されなくても、自然にその生産のために、より多くの資源が配分される。供給が過剰になれば価格が下落して、反対のことがおこる。生産者は、その生産費と生産物価格との差額を利潤として収得するのであるから、利潤を得るためには、或はより多くの利潤をあげるためには、生産のために費される生産資源の量を、できるかぎり節減することにとめなければならぬ。この努力は、無論自利追求のために行はれるものではあるが、その結果として節約されるものは、即ち社会の生産資源である。このことが、何等の弊害なしに理想的に行はれるとは無論いひ得ないけれども、社会が意識的計画的に社会の需要を選択判別し

て、これに基いて生産資源の配分を行ってゐないにもかかはらず、各人の責任と判断によつて、自然に、自動的に、社会の生産資源の経済的利用が相当の程度において実現されてゐる事實は、マルクスの所謂「無政府生産」秩序の妙味といふほかはない。——

以上が、社会主義経済における「経済計算」の問題そのものに真向から取組まうとした山本氏の所見のあらましであるが、オーストリアの軍事評論家ポソニーが、利潤は「財貨及び手段の稀少性の反射である」(大内愛七訳『今日の戦争』、昭和十五年——一九四〇——岩波新書)といったことが、山本氏の所説を書きながら、いま興味深くおもひおこされる。詳説は省くけれども、ポソニーが言はうとするその趣意は山本氏の見解と軌を一にしてゐる。

さて、資本主義経済組織に換るべきものとされる社会主義経済組織のものにおいて、生産資源の経済的配分はいかにして保証されるか。この問題について、山本氏は否定的態度をとる。そしてこの重要でありながら、比較的等閑に付されてゐた問題に関する学説史的究明をまづ詳細に行つてゐる。



山本氏によれば、この困難な問題を最初に指摘したのは、オランダの経済学者ピエルソン教授で、一九〇二年「社会主義社会における価値問題」と題する論文を発表し、社会主義社会が当面すべき価値の諸問題は、「価格制度の無き場合に、異なる諸財の価値を如何に定むべきか」にあることを明かにしたのである。ピエルソン教授の右論文はオランダ語で書かれたために、オランダ以外の国では殆ど知られなかったが、オーストリアの経済学者ルードウィッヒ・フォン・ミーゼス教授の論文「社会主義経済における経済計算」（一九二〇年）が発表されるや、ドイツの学界に一大センセーションをおこしたのみならず、経済計算論に関する議論の出発点をなしたのである。ミーゼスと同時またはこれにつづいてこの問題を論じた者に、有名なマックス・ウェーバー教授、レニングラード大学のボリス・ブルツクス教授があり、ほかに、ゲオルグ・ハルム、エドアルド・ハイマン等々の学者の名をあげることができる。また稍おくれて、ハイエーク、ピグーのごとき知名の学者も、この問題をとりあげてゐる。そしてこれらの諸学者のうちの多くの人々によって、社会主義社会では合理的経済計算が不可能である、といふ結論が提示されたのである。



山本氏の前記著書には、独・墺・英・米の学界のみならず、ソ連邦におけるこの問題に対する論争経過が委しく述べられてある。我が国における経済学者の間では、右の経済計算に関する論議はあまり注意をひかれなかった。山本氏の『経済計算』が出版されたとき、小泉信三氏は『社会政策時報』（昭和七年—一九三—十一月特輯号）に「経済計算論」と題する書評を寄せた。小泉氏はそのなかで、次のように山本氏の論作を高く評価した。

「然るに今や計画経済論流行の時に方って、<sup>(4)</sup>山本教授が主として独逸、ロシアの諸学者に依て戦はされた経済計算論を紹介すると共に、進んで自ら社会主義計画経済に対する厳密な原理的批判を加へたのは、頗る時機を得たものと謂はなければならぬ」と。

そして自らの「ソギエト計画経済」と題する長論文のなかで、「社会主義計画経済が果して可能であるか否か。市場なき社会経済に於て生産力の合理的利用の基準が求められるか否か。これは別に経済計算の理論を準備して論じなければならない問題である<sup>(4)</sup>」と説いてゐる。しかし小泉氏のほかに、名古屋高商の宮田喜代蔵教授、高岡高商の大熊信行教授が問題の重要性を承認したにとどまった。

その後昭和十年（一九三五）、ハイエーク教授の経済計算に関する著書<sup>12</sup>が公けにされるに  
いたって、我が国においても当時の若い学徒のなかに熱心な研究者があらはれたが、ひ  
きつづきこの問題を考へてゐた山本氏が上梓したさきの『計画経済の根本問題』は、  
学界に大きな反響を喚びおこしたのである。この労作に対して数多くの書評や読後感が  
発表されたが、なかでも東大の東畑精一教授（一八九九）は『日本読書新聞』（昭和十四年  
一―一九三九―五月二十五日号）所載の書評のなかで、「計画経済論の流行を追った所謂『き  
物』ではなく、もつと根本的な問題を原理的に取扱つたもので」、「社会主義経済の批判  
を通じて示された一個の経済原論と云ふのを適当と考へる」と述べてゐる。また小樽高  
商の手塚寿郎教授は、同校の『緑岳新聞』（昭和十四年五月二十五日号）に書評を寄せて、「加  
之、現在経済計算に関する論文や著者はずいぶん多くなって来てゐるのではあるが、然  
し氏の新著ほど、徹底的に此問題を取扱つたものは世界に比類がない」とまで激賞の辞  
をおくつたのである。これに反して、山本氏の所説に対する強力な反論らしきものは現  
はれなかつたのである。あるいは「経済計算」の問題は社会主義経済にとって、致命的  
な指摘であつたがためかも知れなかつた。

さて肝心の山本氏の所説を述べる余白が少なくなってしまうたが、その結論をごく手短かに要約すれば、かうである。

——資本主義に反対するところの「科学的社会主義」が、市場取引をもって資本主義経済の支柱と見做して、その排棄を主張したことは周知のとほりであるが、社会主義社会には当然市場価格は存在しないから、資源や生産物の客観的評価を行ふべき方法がなく、したがって経済計算を喪失して、社会主義が目的とする合理的な経済運営は不可能となる。これが不可能である以上、社会主義計画経済は一つの幻想にすぎないものとなってしまふ。——

つまり、生産手段にせよ、生産物にせよ、これを評価すべき客観的な標準——市場価格——が与へられないのであるから、費用と効果とを合理的に比較考量する、そのてだてがなく、したがって生産資源が経済的に配分利用されてゐるのかどうか、その判断のしようがない、ときびしく指摘したのである。

山本氏は、社会主義経済に対する原理的批判につづいて、ロシアの現実経験を克明に分析し、周到的な検討を加へた上で、つぎのやうに結んでゐる。（前掲書第三篇第八・九章、附

## 録第三

「廿年に亘るソ聯経済の社会主義経済実現のための曲折は、吾々に何を教へるであらうか。それは第一に、市場を撲滅せる中央集権的な計画経済は、経済計算を喪失して盲目状態に陥り、混乱と生産性の減退に堪へられぬといふことを教へる。第二には、市場の復活（註、三浦記レニンの所謂新経済政策によってとられた措置）は、経済の秩序と生産性の復活を意味する、といふことを教へる。而して第三に、生産手段の国有、国家的経済一般計画の遂行といふ社会主義の根本規定の下に於ては、独立採算、留ルンゲルによる統制、出来高払ひ、スタハノフ運動、社会主義的競争の遂行も部分的な若干の効果を収め得るにすぎず、全体として資源の経済的配分、生産物の経済的配分を実現し難く、従つて生産結果の跛行、需要供給の均衡破壊を避くべくもない、といふことが教へられるであらう。人はややもすれば、ソ連の計画経済遂行の失敗をば、打ち続く清党運動に原因すると説く。けれども、経済遂行失敗の原因を妨害者の罪に帰するソ連当局の言分と合せ考へるならば、市場の自然的自動的な資源の配分をば、国家の意識的計画による配分に変革しようとする社会主義経済理念そのものが、究極の原因で

あつて、この理念が棄てられない限り、経済の復興も望まれないし、清党運動の継続も避けられぬであらうと思ふ。ロシア経済分析の結果として、少くとも私には、その様なことが学ばれたのである。」

以上が、山本勝市氏の所説の要点であつた。なほちなみに、高橋泰蔵・増田四郎編集『経済学辞典』(六一九頁)によると、社会主義における経済計算は市場がなくても現実に可能であることを唱へたパローネやテラー、ランゲの名をあげ、この問題が経済学的には解決済みであるかのごとく、ランゲの「試行錯誤法」の要点が述べられてあるが、この編者は、ほんたうにさう考へてゐるのであらうか。なぜならば、前記山本氏の著書(第二編第五章)には、右の諸説に対する批判が、すでに一九三九年の時点で纏説されてゐるからであつて、さらにギルド社会主義やサンディカリズムに対しても、経済計算の立場からの論及批判が纏説されてゐることを指摘しておかねばならぬ。なほ、その後、山本氏のほかに、経済計算の立場からの社会主義経済批判には、小泉、有井(治)氏等の論がある。<sup>03</sup>

ひるがへつて顧ると、昭和六年(一九三一)に満州事変、十二年(一九三七)に支那事変

が起り、それまで隆盛を極めてゐたマルクス主義は、時勢の転換に合わせるやうに、ナジヨナリズムの昂揚の前に、論壇からは跡を絶つたかのごとくに見うけられた。しかし、表面的にはさう見えても、マルキシズムは、実は統制経済論、計画経済論のなかで生き続け、根を張り続けてゐたのである。

すなはち、自由競争原理の上に立つ資本主義経済は、競争が競争を排除するといふ内的必然性のために独占に移行し、当初の目的とは異なる方向に発展してきてゐるから、国家社会全体の利益のためには、どうしても統制経済へ、そして計画経済へと移行するのだ、それが戦時下の日本の必然的な宿命である、といふ論法が、戦時下の日本の朝野に拡がり、当時の経済思想の主流もまた、これと歩調を合せ出したのである。

この主張は、いかにも「愛国的所説」の印象を周囲に与へた。もとより、マルクスの名などおくびにも出して来なかつた。また、社会主義といふ言葉の一言半句も使はれなかつたのである。だが、その内容は、「戦争から革命へ」といふ社会主義的革命理論の上に立つた、世論の誘導でもあつたのである。かかる折しも、山本勝市氏の前述の出版は、社会主義計画経済に対する原理的批判であるとともに当時の時代思潮に対する痛烈



な批判でもあった。そして、かかる思想と微妙に癒着してゐた当時の『経済国策』の根本をも衝いた重要な提言でもあったのである。

しかしながら時勢の赴くところは、山本氏の主張とはまさに逆であった。戦火が拡大されるにしたがつて、レプケのいふ「秩序ある無政府状態」または「自発的秩序」に対する確信は、当路者の間から失はれていって、経済計算の根本機能が喪失するにいたる、いはゆる「指揮された秩序」なるものに、ひきづり込まれていくばかりで、日本経済は実の所、破局への道を進んで行つたのである。時代思潮には便乗しても、身に危険の及ぶことには黙して語らぬ学者の多いなかであつて、この山本氏の憂国の至情と学者としての良心は、まさに出色のものであつたと評さねばならぬであらう。事実山本氏は、戦時下のきびしい言論統制のさなかに、一身を賭して、氏の経済計算論にひきつけていく軍人、学者、政治家、実業家に対して、講演にまた執筆に、計画経済の非なる所以を説いて息むところがなかつたのである。その所論の一部は、同氏の『計画経済批判』（昭和十六年—一九四一—四月、直ちに発行禁止処分）に収録されてあるのも、よき証拠といふべきであらうか。



## むすび

“敗戦の祖国再建の途は、社会主義的計画経済を措いて他にもとめ得ない”とは、終戦後における日本の世論における支配的傾向であった。これに対してその非なる所以を訴へつづけたのは、戦後政界に身を投じた山本勝市氏その人であったが、山本氏と相呼応するかのごとく、論壇においてその学術的所信を披瀝した人々のなかから、小泉信三、高田保馬の両大家の名を逸することはできない。前にふれた小泉氏の『共産主義批判』、『私とマルクシズム』は、諸誌に発表した論文をまとめて一書としたものであり、高田氏には、『マルクス批判』（昭和二十五年—一九五〇—弘文堂）および『社会主義評論』（昭和三十一年—一九五六—自由アジア社）がある。これらの著作は、つとめて平易に書かれてはいるが、専門学者としての見地に立つもので、聊かも調子を落した書き方ではない。ここにこれらの内容を紹介する余白が尽きてしまったことは残念至極である。『社会主義評論』中の第二部「『経済学教科書』の検討」は、ソ連邦における国定教科書の日本訳四冊の内容に検討を加へたもので、読みごたへのある必読の文字である（この『経済学教科書』の

日本訳は昭和三十年に数十万部が売られたといふ。このほか、レーニンによって完成されたと言われている帝国主義論に対する批判がのべられてあるが、有力な批判が行はれてゐない領域であるだけに、高田説を一つの起点として新たな批判の展開が望まれる次第である。

前記小泉、高田の両氏の著書以外に、平井新『共産主義の理論と批判』（昭和二十五年、渡辺書房）、共産主義批判研究会『共産主義批判全書（昭和二十五年）』、有井治『現代社会主義批判』、土方成美『経済体制論』中の第三編（昭和四十四年、中央経済社）、竹内靖雄『マルクスの経済学』（昭和四十七年、日本評論社）、吉田靖彦『ソ連経済の成長と資源配分』（昭和四十八年、風間書房）等の好著がある。類書は他にもまだまだとめられようが、一般にマルクス経済理論に関する批判は、戦前ほどに活潑ではない。その理由の一つは、近代経済学の吸収に追はれた経済学者に、マルクスを省みる余裕がなかったためともいはれる。

米国のある経済学者が滞日中、「日本ではマルクス主義の学者がはなはだ多く、その立場が広く根をはっている。世界をみわたしたところ、共産圏以外の諸国には全く見られない現象である」といったことが、前記『社会主義評論』（二六七頁）中に書かれてあ

る。昭和三十年の頃のことらしいが、奇異ともいふべきこの状態は今日でもなほ変らな  
い。

小泉、高田の両家ともに、マルクスを学説史上の人物とみて、決してこれを絶対視し  
ようとはしなかった。またさうみるべきではないことを再々説いてゐる。マルクスの弟  
子たちが、いつまでたっても、マルクス教説の訓詁注釈の域を出でないのは、『資本論』  
が「聖典」とされ、資本主義を「止揚」すれば社会主義が成立するといふマルクス経済  
理論の解釈に捉はれてゐるからではなからうか。ところが、社会主義の宗国ソ連邦で  
は、後段に説かれるごとく、価値の源泉は労働であるといふオーソドックスなマルク  
ス理論に対して一つの異見が現われ、論争の焦点となつてゐるのである。

(註)

- (1) 邦訳、神永文三『バヴェルク・マルクス価値説の終焉』(昭和二年、新潮社)  
 (2) 幸徳秋水『社会主義神髓』(明治三十六年)、片山潜『我社会主義』(明治三十六年)、堺利彦・幸徳秋水

訳、マルクス・エンゲルス『共産党宣言』（明治三十七年）、堺利彦・森近運平『社会主義綱要』（明治四十年）、山川均訳『資本論第一卷』（明治四十年）、安倍磯雄訳『資本論』（明治四十二年）等

(3) David Ricard. リカドオ、リカドオ、リカド、リカドなどの音便がある。

(4) 余剰価値説をわかりやすく説明すれば、投下労働量（時間）によって定まる生産物の価値から、賃銀として労働者に支払はれる部分を差引いた残余が余剰価値で、これが利潤として資本家の懐に入る。即ち余剰価値、利潤は「余剰労働」がつくりだすもので、「支払はれぬ労働」である。とマルクスはかういつたのである。

(5) 小泉信三『価値論と社会主義』（昭和二十三年改訂版序一四一—一五頁）

(6) 中山伊知郎・東畑精一訳『シュムペーター、資本主義・社会主義・民主主義』第三版上（東洋経済新報社）四一—四二頁

(7) 高田保馬『労働価値説の吟味』（昭和十四年再版日本評論社）緒言二頁

(8) 邦訳、草間平作『反マルクス論上下』（昭和八年、春秋社）「世界大思想全集」八五）原著は一九二七年。

(9) 小泉信三『マルクス死後五十年』（昭和八年、改造社）同増訂版（昭和二十一年、好学社）九五—一〇〇頁、一一〇—一一五頁）

(10) 『経済』（昭和九年二月、改造社）には、「昭和八年は実業家も政治家もチャナリストも実によく統制経済、計画経済を論じた。昭和八年は統制経済、計画経済で暮れ、昭和九年は又統制経済、計画経済で年が明けたやうな気がする」とある。

(11) 小泉信三『マルクス死後五十年』四三—三頁

(12) ハイネーク『ソヴェト・ロシアにおける計画経済』（一九三五年）及び『集産的計画経済』（一九三五

- (13) 有井治『自由価格と統制価格』（昭和二十三年第五版、有斐閣）第八章（年）  
小泉信三『共産主義批判の常識』（昭和二十四年、新潮社）六八一―八一頁  
小泉信三『私とマルクシズム』（昭和二十五年、文藝春秋社）一七四―一七九頁
- (14) 西村光夫訳『W・レブケ 自由社会の経済学』（昭和四十九年、日本経済評論社）一三―一七頁



### 第三章

日本におけるマルクス主義に対する

思想的・文化論的批判

—分担執筆—



一	「日本におけるマルクス主義批判」の前史	浅野 晃	119
	——南洲・天心・漱石・蘆花・鷗外——		
二	京都学派におけるマルクス主義批判はどうであったか、その他(対談)高山岩男	高山岩男	144
三	三井甲之(付・蓑田胸喜、河村幹雄)のマルキシズム批判	夜久正雄	162
四	川合貞一の『マルキシズムの哲学的批判』	高木尙一	180
五	寺田寅彦とマルキシズム	葛西順夫	188
六	和辻哲郎とマルキシズム	古川哲史	198
七	佐野学のマルキシズム批判	川井修治	211
八	矢内原忠雄のマルキシズム批判	梶村 昇	222
九	尾高朝雄の『法の窮極に在るもの』	高木尙一	229
十	小林秀雄とマルキシズム	山田輝彦	235
十一	神川彦松のマルキシズム批判	高木尙一	247
十二	三島由紀夫のマルキシズム批判	戸田義雄	254

## 一、「日本におけるマルクス主義批判」の前史

—南洲・天心・漱石・芦花・鷗外—

浅野 晃

—

わが国におけるマルクス主義批判の根本の立場は、明治時代における西洋文明との対決に源を発するものであり、それは明治の初期にはやくも西郷南洲（本名—隆盛、一八二七—一八七七）によって打ち出されてゐるといってよい。南洲は『南洲翁遺訓』のなかで、周知のやうに、文明とは何をいふかについて、かういつてゐる——

「文明とは、道の普く行はるるをいへるものにして、宮室の荘嚴、衣服の美麗、外観の浮華をいふに非ず。世人の西洋を評する所を聞くに、何をか文明といひ、何をか野

蛮といふや、少しも了解するを得ず。真に文明ならば、未開の国に対しては慈愛を本とし、懇々説論して開明に導くべきに、然らずして残忍酷薄を事とし、己を利するは、野蛮といふべし。」

これは西洋の覇道に対して、東洋の王道を標示したものである。同時にそれは、道義に対して利欲を重んずる西洋文明への強烈な批判となつてゐる。南洲が去つたあと、明治政府の首脳は文明開化の一路を進んでいった。だから南洲と大久保（利通、一八三〇〜一八七八）らとの対立は、王道と覇道との対立であつた。東洋と西洋との対立であつた。南洲は、さらに次のやうにも云つた。

「人智を開発するとは、愛国忠孝の心を開くなり。国に尽し家に勤むるの道明かならば、百般の事業は従て進歩すべし……猥りに外国の盛大を羨み、家屋の構造より玩弄物に至るまで一々外国を仰ぎ、奢侈の風を長じ、財用を浪費せば、国力疲弊し、人心浮薄に流れ、結局日本身代限りの外あるまじきなり。」

「広く各国の制度を採り、開明に進まんとならば、先づ我国の本体を据え、風教を張り、然してのち徐かに彼の長所を斟酌するものぞ。否らずして猥りに彼れに倣ひな



内村鑑三



西郷南州

ば、國體は衰頹し、風教は萎靡して、匡救すべからず、終に彼の制を受くるに至らんとす。」

南洲のこれらの語を収めた『南洲翁遺訓』を、きはめて早い時期に手にして、ふかく感動した青年に、内村鑑三（一八六一—一九三〇）がゐた。鑑三はその感動を、彼が明治二十六年、三十三歳のときに書いた英文の著作『日本と日本人』（のち改題して、『代表的日本人』）で明らかにした。この書のはじめを飾る「西郷隆盛——新日本の建設者」の一章がそれである。

鑑三はこのときすでに熱烈な基督者であったが、また変らざる純粋な日本人であった。鑑三のなかの日本の武士は、東洋の王道に誇りをもつてゐたから、西洋の貪慾な侵掠主義を許すことはできなかった。

「余輩は、維新は西郷なくして可能であつたか否かを、疑ふものである」と、鑑三は書いてゐる。明治維新において日本は、南洲をスターターとして、ディレクターとして、出発した。だが「文明開花を沢山に有つことができた」とき、

「それとともに甚しい懦弱、断乎たる行動に対する恐怖、明白なる正義を犠牲にした平和の愛好など、真個の武士の慨嘆に堪へない多くのものが、それに随伴した。」かくて、おなじく参議の重任についた「同僚の、もはや彼（南洲）に従ひ得ない時が来た。ここまでは彼等は、一つの目的を共有してゐたが故に、ともに来た。しかし、彼等が止まらうと欲した処にて、彼は始めようと欲した。そして破裂は、つひに来たのである。」

鑑三は、はっきりと、次のやうに断定してゐる――

「明治維新は、彼（南洲）の理想と、かくも相反した結果を生んだ。……」  
だから彼は起つた。そして、謀叛人として斃れた。

「かくの如くにして、武士の最大なるもの、また最後の（と余輩の思ふ）ものが、世を去つたのである。」

鑑三はこのやうに、南洲に対して満腔の敬慕を注いだ。彼は南洲において、真の維新者を見た。

「彼の偉大は、クロムウエル（一四八五—一五四〇）、註、イギリスの政治家）的の偉大であった。ただ彼にピューリタニズムがなかつたために、彼はピューリタンでなかつただけであると思ふ。純粹な意志の力が、彼の場合には、多大の関係を有つてゐる——これは道徳的な偉大、偉大の最善のものである。……」

鑑三の南洲論は、この賛辞で終つてゐる。そして、南洲の志を、さらにくはしく述べ展いたのが、岡倉天心（一八六二—一九一三）である。

## 二

天心は、西洋が東洋の芸術に加へた打撃のなまなましい体験から出発して、西洋との文明が、人類の進むべき道を指示する典型ではないことを力説した。

天心は東洋と西洋とを、次のやうに対比する——

「家を現はすシナの象形文字は、一つ屋根の下なる三人の人から成つてゐる。そのこ

と自体がすでに、夫と妻との西洋の二重奏に対する、父と母と子との三重奏の東洋の観念を示してゐる。それは相互の愛と責任との固い絆で結ばれた父の保護、母の助力、子の随順の三つの関係を同時に含んでゐる。これが社会に拡大されて、アジアの生活の美と香り高さの基である仁愛、義理、忠誠、礼節となつて花咲くのである。西洋の二元性は、曾て家の観念にあまねく溶けこんだことがない。家族の間ですら個人は、社会組織の中でと、ひとしく強く自己を主張したから……子や孫は夫婦生活をととなむために己が家を後にし、女性は妻として敬はれても、母として尊ばれない……」

〔『東洋の覚醒』第三章〕

彼等がゲルマンの林中で摸索し、バルチックの波に翻弄されてゐた時代に先だつて、われわれはすでに家の結合の美しさの中にあつた。東洋の社会は、互いに結ばれた責務の調和といふ点で、おどろくべく美しい。共感の音楽が、一切の共同体の上に、おなじ歓喜と悲哀のリズムを奏でてゐる。仏教において慈悲が一切である如く、仁が儒教の一切であつた。

「社会的なものゝ超社会的なものとの調和こそ、われらの文明の全思想を完成するも



のであり、社会的乃至帝国主義的と反社会的乃至無政府主義的、物質主義とヒューリタンといった対立を切り棄て得ない西洋の一面性を救ふものである。かしこにあっては、王者はヴェルサイユからギリチンへの道に運命づけられてゐる。彼らはネロ（三七〇六八、註、ローマ皇帝）でなければクロムウエルたらざるを得なかった。対立を透して全体を求め、涙のうちに微笑し、死に臨んで莞爾たるを得しむるもの、それが東洋固有の思慮ぶかさなのだ。」（『東洋の覚醒』第三章）

「無礼にも西洋は、われら東洋を、抑止された成長の犠牲として書きたてる。しかしさういふ西洋こそ、特殊な発達の変則的な雛型ではないのか。彼らの黄金と悪徳、彼らの偽善、彼らの「平和」のための軍備と、「愛」のための法律、吝嗇な贅沢と酔ひどれの貧困、安っぽい教育とあさましい人道主義、時間の収縮と希望の緊張——かうしたことを見て、われらは驚くのである。営利主義は資本を帝王に仕立て、労働を奴隷にする。嵐はいよいよ荒狂ひ、無政府状態が背後からうかがつてゐる……」（『東洋の覚醒』第三章）



岡倉天心



夏目漱石

けれども天心は、西洋に対する東洋の究極の勝利を確信した。その確信を彼は、日本の歴史と芸術とから得てゐた。「民族の誇りと有機的結合との巖」は、アジア文明の二つの大極であるインドとシナとから押し寄せた大浪に、日本が圧倒されることを防いだ。彼は書いた——「大陸アジアの日本への接触が、つねに新たな生命とインスピレーションとを生み出したといふこと、これこそは大陸アジアの光栄なのだ。」と。

「日本の国民生活は、永劫の昔から連綿たる万世一系の皇統の光輝がその上を純粹さもて蔽ふてゐる天皇を中心としてゐる。」(『東洋の理想』第十四章、明治時代)

「個人主義の逆巻く狂瀾は……金剛石の如く堅牢無比な忠義の牢固たる巖がその不動の根抵を形づくつてゐるのでなかつたら、沸き返る紛乱のなかに、この国を微塵に碎き去つてゐたらう。」(『東洋の理想』第十四章)

この事実を、われわれは現にくり返し、体験しつつある。天心の言葉は、ただに明治維新を描いてゐるだけなのではないのだ。われらの「民族の不可思議なねばり」は、じつに「建国この方連綿たる皇位の蔭にはぐくまれ」たものなのだ。そのねばりが、日本を、「今日、西洋思想のこのやうなあはただしい無限の流入にもかかはらず、これを無傷のままに保全してゐるのである。」（『東洋の理想』第十五章展望）

だから日本は、西洋がどのやうに外から迫って来ても、そして西洋風にとどのやうに外見が変貌しようと「自分自身にあくまで忠実にとどまる。」これが日本の原理である——と天心はいふ。日本は起って、アジアの回復のために戦はなければならぬ。なぜなら西洋の「物質的忘却の夜」の中から、われらの高貴な理想を救ひ出すのが、日本の使命なのである。

「今日、西洋思想の巨大なかたまりが、われわれを混迷させる。やまとの鏡は曇つてゐるといはうか。革命と共に日本は、真にその過去へと立ち帰る、必要とする力をそこに求めて。あらゆる真正の復古がさうであるやうに、それは相違をもつた反動である。足利時代が創始した芸術の自然へのあの献身が、いまや民族への、人間そのもの

への献身となるに至ったのだ。われわれは、われわれの歴史のなかに、われわれの未来への秘密が横たはってゐることを、本能的に知る。そしてわれわれは、盲目の烈しさで、そのいとぐちを見出さうと手探りする。だがしかし、もしこの考へが真実であるならば、じっさいわれわれの過去に再生の泉がひそんでゐるのであるならば、それが今こそ必要だといふことを、人は承認するにちがひない。なぜなら、近代的俗悪の焦がすやうな渴きが、生活と芸術との咽喉を焼きつつあるのだから。」(『東洋の理想』第十章展望)

天心はここで、レヴオリュションといふ語を用ひてゐるが、それが維新の意味であることは明白である。これはいはば天心の維新の定義であつたといつてよい。いな、第二の維新の宣言であつたといふべきかも知れぬ。彼が勝利はただ「内から」のみ来ることを結語として『東洋の理想』の筆を擱いたのは、その故である。

### 三

天心がインドのタゴール家で『東洋の理想』(一九〇三、ロンドンで出版)や『東洋の覚醒』

(歿後、昭和十五年になって刊行された)を仕上げてゐたころ、夏目漱石(一八六七—一九一六)はロンドンのわびしい下宿で、まだ生きてゐた正岡子規(一八六七—一九〇二)にあててこんな風を書いた——

「こちらに来てから、どういふものか、いやに人間が真面目になってね。いろいろな事を見たり聞いたりするにつけ、日本の将来といふ問題が、しきりに頭のなかに起る……彼ら(日本の紳士)が如何に浮華であるか、如何に空虚であるか、如何に現在の日本に満足して、おのれらが一般の国民を墮落の淵に誘ひつつあるかを知らざるほど近視眼であるか……」(『ホトギス』所載「ロンドン通信」)

同じやうな感想は、彼の当時の日記や断片の到る処に見られる。

「夜、下宿の三階にて、つくづく日本の前途を考ふ。日本人は真面目ならざるべからず。日本人の眼はより大ならざるべからず。」(全集所収、ロンドン滞在中の日記および断片から)



正岡子規

「日本は三十年前に覚めたりといふ。しかれども半鐘の声で急に飛び起きたるなり。その覚めたるは本当の覚めたるにあらず。狼狽しつつあるなり。ただ西洋から吸収するに急にして、消化するに暇なきなり。文学も、政治も、商業もみな然らん。日本は真に目が醒めねばだめだ。」(同前)

「いまの文化は金で買へる文化なり。金で買へる文化が最もよき文化なるか。もし然らずば、日本が万事に於いて西洋を崇拜するは愚なり。」(同前)

このやうな憤満を持てあましつつ帰朝した漱石は、『猫』(『吾が輩は猫である』一九〇五年一月〇六年八月)、『坊っちゃん』(一九〇六年四月)、『草枕』(一九〇六年九月)と、一気に書きまくる。そしてつひに、二十世紀の文明を、その始つたばかりの時点で告発する。

これより先一九〇〇年の秋、土井晩翠(一八七二～一九五二)は「登高賦」の雄篇を物し、人間歴史ありてより星移りゆく五千載

進化のあととは短くて禽獸の域遠からず

一塊の地球今も猶ただ反嚙の場として

愛の権化の教の祖基督世紀第十九



その最後の秋風はここに悲哀の曲と吹く（詩集『曉鐘』から）

と葬送曲を歌ったが、漱石は『草枕』の終りで、始ったばかりの新世紀を汽車として告発するのである。――

「汽車ほど二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百といふ人間を同じ箱へつめて轟と通る。なさけ容赦はない。つめ込まれた人間は、みな同速度の速力で、同一の停車場へとまって、さうして同様に蒸気の恩沢に浴さねばならぬ。人は汽車へ乗るといふ。余は積み込まれるといふ。人は汽車でゆくといふ。余は運搬されるといふ。汽車ほど個性を軽蔑したものはない。文明は、あらゆるかぎりの手段をつくして個性を發達せしめたるのち、あらゆるかぎりの方法によって、この個性を踏みつけようとする……文明は個人に自由を与へて、虎の如く猛からしめたるのち、これを檻のうちへ投げ込んで、天下の平和を維持しつつある。……第二のフランス革命は、この時に起るのであらう……あぶない、あぶない、気をつけねばあぶない、と思ふ。現代の文明は、このあぶないで、鼻をつかれるくらゐ充滿してゐる……」（『草枕』）

漱石が文明と呼んでゐるのは、西洋の文明である。いまそれが、二十世紀の文明とし



て、日本を制しつつある。

天心もさうであるが、漱石もまた一種精妙な予見能力をもつてゐた人であった。例へば『行人』（一九二二）のなかで彼は、近代のスピード・アップの恐怖を訴へてゐる。その恐怖は、今日では現実の恐怖になつてしまつた。

漱石ははやく、マルクスの名も、『資本論』のことも、知つてゐた。しかしマルクス主義そのものについては、恐らく知るところがなかつたらう。だから彼の予見能力も、プロレタリア独裁といふ全体主義体制や、それを中世的な聖なるものにまで祭り上げたイデオロギーに対する宗教的拝跪のやうな事実には及ぶに由なかつた。

だから漱石が第二のフランス革命を呼号したとき、彼の頭にあつた革命は、ブルジョア体制に対する素朴な社会革命であつたらう。汽車が代表するのは機械文明、工業文明である。二十世紀が金権万能の物質文明であることを、漱石はその初頭においてかく明快に断罪したのであつた。この『草枕』のあとをうけて、彼は『二百十日』を書いた。

つぎには『野分』を書いた。そこでは白井道也といふ主人公に、金権打倒を目ざす道義

革命の激越な煽動演説をさせた。そして最後に『虞美人草』（一九〇七）を書き、第一義が現代ではつねに敗北する現実を長歎した。

#### 四

漱石は現代日本の開化を外発的だとした。「われらは歴史を有せざる成り上りもの如くに、ただ前へ前へと押されてゆく」と、彼は云ってゐる。暗い自嘲である。事実また、南洲の悲願を抹殺した明治政府は、「歴史を有せざる成り上りもの如く」であった。「日本人はずゐふん悲惨な国民」になつてしまつた。文明開化の路線に於いて政府は西洋に屈服したのである。漱石は道義が失はれてゆくのを近代文明の一般的動向として確認したが、それが日本をも捲きこんでゆきつつあることに、日本人として、本能的な反撥を感じずにはゐられなかつた。

そのとき、幸徳事件（一九一〇）が起つた。漱石も、天心も、鑑三も、直接これに言及してゐないが、ひとり徳富芦花（一八六八〜一九二七）は別であつた。

芦花は兄の蘇峰（一八六三〜一九五七）に総理への忠告を乞ひ、みづからは「天皇陛下に

願ひ奉る」の一文を草して一味の助命を図ったが、万事は休した。

「死刑執行疾雷耳を俺ふに暇あらざる素早さ。幸徳らも死んでさぞ本望なるべく、平和の国民も皇室も、これより枕を高くして安眠するを得べく候。然しながら我皇をして真に敵を愛する仁君たらしむる能はざりしと、伏魔殿を打開きて不知数の妖星を八方に散らしたるとが、かへすがへす残念に存じ奉り候。先年ある時の夜話に、弟はかく申し候。維新の革命は王政の復古、封建の瓦解、国民の統一を来せしが、今後の革命は更にあらゆる権力を推倒し、国民の障壁を推破り、人間の新結合新組織を来すの日あるべし。而してその革命の前には、我日本にも殉道者の犠牲を出すの要あるべしと。その犠牲がかく速に出で来らむとは、弟も予想せざりし所に有之候。革命は終に来るべし。而して無理に死にたる幸徳らと、あはてて殺したる桂政府と、歴史の眼より見れば正に反対の方向より相槌をうちたるの看あるを知るの日あるべし。これみな天也。人也。かくあるべき約束と思へば、今になりて云ふべき言も無之候……」

これは芦花が明治四十四年（一九一〇）一月二十五日の夜に、兄の蘇峰に宛てて書いた手紙である。この趣旨を次代の若者に、切々と訴へる機会がすぐ彼に訪れた。第一高等

学校の弁論部が、彼に講演を依頼して来たからだ。それは二月一日、彼は「謀叛論」の題で、長広舌をふるった。そのときの草稿が、全集に収めてある。

冒頭、彼は次のやうに語ってゐる。

「僕は武蔵野の片隅に住んでゐる。東京へ出るたびに、必ず世田谷を通る。僕の家から一里ほど行くと、街道の南手に、赤松のぼらぼらと生えた処が見える。豪徳寺、井伊掃部守直弼いかもんのかみなほすけ（一八一五〜一八六〇）の墓で名高い寺である。

豪徳寺から少し行くと、谷の向ふに杉や松の茂った丘が見える。吉田松陰（一八三〇〜一八五九）の墓と松陰神社は、その丘の上にある。井伊と吉田、五十年前には互に不倶戴天の仇敵で、斬りつ斬られつした兩人も、死は一切の恩怨を消してしまつて谷一重のさし向ひ、安らかに眠つてゐる。

今日の我等が人情の眼から見れば、松陰はもとより醇乎として醇なる志士の典型、井伊も幕末の重荷を背負つて立つた剛骨の好男児、五十年後の今日から、歴史の背景に照して見れば、畢竟今日の日本を造り出さんが為に、反対の方向から相槌を打つたにすぎぬ。彼等は各々その位地に立ち自信に立つて、為るだけの事を存分に為て土に

入り、その余沢を明治の今日に享くる百姓らは、さりげなくその墓の近所で、悠々と麦のサクを切つてゐる」(芦花全集「謀叛論」から)

彼は幕末維新からの祖国の狂瀾怒濤の推移を回想し、且つは人類の大理想への進撃を想像し、その間の無数の犠牲を追悼したあと、かういふ。

「新式の吉田松陰らは出てくるに違ひない。僕はかく思ひつつ常に世田谷を過ぎてゐた。思つてゐたが、実に思ひがけなく今、明治四十四年の劈頭に於て、早くも十二名の謀叛人を殺すことになつた。」

(諸君、我々の脈管には自然に勤王の血が流れてゐる。僕は天皇陛下が大好きである。△とこしへに民安かれと祈るなる吾代を守れ伊勢の大神▽その誠は天に逼るといふべきもの。△取る棹の心長くも漕ぎ寄せん芦分小舟さはりありとも▽国家の元首として堅実の向上心は三十一文字に看取される。△あさみどり澄み渡りたる大空の広きをおのが心ともがな▽実に立派な御心掛である。我等はこの天皇陛下を戴いてゐながら、たとへ親殺しの野望を企てた息子にもせよ、なぜに十二名だけが宥ゆるされて、余の十二名を殺さなければならなかつたか。陛下に仁慈の御心がなかつたか。御愛憎があつた



森 外



徳 富 芦 花

か。断じて然ではない。確に輔弼ほひつの責である。もし陛下の御身近く忠義硬骨の臣があつて、陛下の赤子に差異は無い、何卒二十四名の者ども罪の浅きも深きも一同に御宥ゆるし下されて、反省悔悟の機会を御与へ下されかしと、身を以て懇願するものがあつたならば、陛下も御領うなずきになつて、我らは十二名の革命家の墓を建てずにするであらう。……列国も見てゐる。日本にも無政府党が出て来た。恐ろしい企をした。西洋ではみな打殺す。日本では寛仁大度の皇帝陛下が、悉く罪を宥ゆるして反省の機会を与へられた——と言へば、面目が立つてはいないか。然るに

彼ら閣臣やからの輩は、事前さきにその企を萌もすに由よなからしむるほどの遠見と憂国の誠もなく、事後に局面を急転せしむる機智親切もなく、いはば自分で仕立てた不孝の子二十四名を、荒れ出すが最後、得たりや応ひきくと引括ひきくつて……手硬い頭だけ絞殺して、恩威並び行



はれて候と、陛下を小楯に五千万の見物に向つて気取つた見得みえは、何といふ醜体であるか。政府許りでない。議會を始め誰も彼も大逆の名に恐れ、一人として聖明の為に弊事を除かんとする者もない。……」

芦花は最後に、政府がもし、松陰を処刑した井伊のつもりであるとしたり、とんでもない心得違ひだといひ、政府は「不明を陛下に謝し、国民に謝し、死んだ十二名に謝さなければならぬ」といひ、もし責任を陛下に負はし奉るが如き心情なら、「不忠不信の甚しいものである」ときめつけた。

## 五

芦花がこのやうに矯激な政府批判に走つたのは、止むに止まれぬ大和だましひからであつた。彼の憂国の熱情が、一時に暴発したのである。彼は決して幸徳一派の行動を弁護しようとしたのではなかつた。ただその処刑が、天皇のお心を解さぬ政府当局者の行為であると推察して、天皇のお心を偲びながら処刑に反対の意志を表明したのである。それは西洋流の霸道に対して、日本の天皇政治の本姿をここに示せ、と迫つたのであ



る。一介の草莽が、かねて鬱積した政府当局者に対する満腔の憤懣をぶちまけたのである。しかもその心情は、まさしく維新者の心情であったと思ふ。

だが芦花は、自分が糾弾した政府当局者の中に森鷗外（一八六二—一九三〇）がゐたとは、想っても見なかったに違ひない。鷗外の方でも、自分が芦花によって糾弾されたとは、おそらく意識せずに終ったことであらう。

けれどもこの事件に際して、鷗外はかなり重要な役割を負はされるめぐり合せになったもののやうである。彼は「昂」といふ同人雑誌に加はつてゐたが、その同人の一人であつた平出修が、この事件の弁護人を引受けてゐた。平出は弁護に先だつて、鷗外に、無政府主義その他についての知識を仰いだといはれてゐる。

当時かうした西洋の社会革命思想についての知識にかけては、鷗外の右に出るものは少なかつたのではないか。少くとも必要に応じて正確な内容を把握するだけの基礎知識を、鷗外はもつてゐたと思はれる。現に事件当時（四三年十二月）「三田文学」に発表した『食堂』といふ短篇では、木村と名のる主人公が、無政府主義の由来の概説をやつてゐる。スチルネル（一八〇六—一八五六）から始めて、ブルードン（一八〇九—一八六五）、バクー

ニン（二八二四～一八七六）、クロボトキン（二八四二～一九二二）と列挙して、それぞれ簡潔な紹介をしてゐる。そのすぐ前に発表した（同年十一月）『沈黙の塔』には、サン・シモン（一七六〇～一八二五）、マルクス（一八一八～一八八三）のほか、マルクスの若き日の仲間だった文学者のフライリヒラート（二八一〇～一八七六）や、ヘルヴェークや、グッコー（一八一～一八七八）の名前まで出てくる。

このやうな知識を、政府当局が利用しなかった筈はない。そして周知のやうに、鷗外は高級軍人であり、高級官僚であった。さらに加へて、彼は元老の筆頭であった山県有朋（一八三八～一九三三）の知遇を得てゐた。この事件に当たっても、鷗外は山県の諮問をうけたに違ひない。

鷗外は『妄想』のなかで、都会改造論とか、食物改良論とか、仮名遣改良論とか、「人の改良しようとしてゐるあらゆる方向に向つて、自分は本の本阿弥説を唱へた。そして保守党の仲間には逐ひこまれた。」と書いてゐる。天心は保守者を以て任じ、そのことを誇りとしたが、鷗外の心情も多くの隔りはなかつたらう。鷗外は西洋が異質の文明であることをよく認識してゐたから、これとの距離をいつも適当に保つことを忘れまいと

した。おなじ作品のなかで鷗外は切腹に触れ、自分は侍の家に生まれたので、小さい時から両親に切腹といふことが出来なくてはならないと諭されて育った。西洋人は死を恐れないのは野蛮人だといふが、自分は彼らの見解に承服するわけには行かない、とも書いてゐるのからも、さうした彼の態度が分る。ちなみにこの『妄想』といふ作品は、十四年（一九一一）の三月に発表された。

おなじころ一年半にわたって「昂」に連載された長篇『青年』には、個人主義に触れて、彼の見解が示されてゐる。いふまでもなく個人主義は西洋から入ってきたいちばん基本的な「危険思想」である。鷗外は大村といふ医学生に、かう云はせてゐる――

「我といふ城廓を堅く守って、一步も仮借しないであつて、人生のあらゆる事物を領略する。君には忠義を尽す。併し国民としての我は、昔何もかもごちゃごちゃにしてゐた時代の所謂臣妾ではない。親には孝行を尽す。併し人の子としての我は、昔子を売ることも殺すことも出来た時代の奴隸ではない。忠義も孝行も、我の領略し得た人生の価値にすぎない。そんならその我といふものを棄てる事が出来るか。犠牲にすることが出来るか。たしかに出来る。恋愛生活の最大の肯定が情死になるやうに、忠義

生活の最大の肯定が戦死にもなる。生が万有を領略してしまへば、個人は死ぬる。」

このやうな考へ方——鷗外自身の言葉を使へば、「物の両端を敲かずには置かない」ところから、その両端を何とか共存、出来れば調和に持つて行かふといふ、こうした考へ方が、少くとも維新者の考へ方でなかつたことは否めない。『食堂』のなかで、幸徳の如きがこれから殖えたら大変だといふ同僚の発言に答へて、木村といふ主人公は、「まづお国柄だから、当局が巧みに柁を取つてゆけば、殖えずにすむだらう」といつてゐる。これを鷗外が、確固不動の信念を表明したものと受けとめることは出来る。だが、いかにも重量感に欠けてゐる。そのことは彼の『かのやうに』に於いて、いっさう痛感される。この作品は、そのころ一時もてはやされたファイヒンガーのへかのやうにの哲学Vを借りて来て、国体の基礎にある「神話」を何とか擁護しようとしたものである。鷗外の苦心は分るといひたいところだが、あまりにも当座の試みといふ感じが強い。極評すれば浮薄な妄想である。

『かのやうに』が発表されたのは四十五年（一九二二）一月であつた。その夏、明治天皇が崩御され、乃木大将夫妻が殉死した。これは鷗外に強い衝撃を与へた。彼はただち

に筆をとって、『興津弥五右衛門の遺書』の一篇を書きあげた。これは殉死の無限の肯定論であった。これを契機として鷗外は武士の子に立ち戻ったと見る人もあるが、これは最大の厚意的な見方であらう。この献身への讃歌は、切々として悲痛である。

漱石の『こころ』（二九一四）の主人公は、明治の精神に殉じたいといった。それは日本の前途への漱石の絶望的な悲願であった。晩年の天心も、アジアの一体をかたく祈念しながら、心中はしだいに暗かった。さうした中で、忠実な臣僚であった鷗外は、その博学を以て最も多く苦慮したに違ひない。この一代の智者は迷ったのだ。

さらば、われらをして、『南洲翁遺訓』に立ち返り、維新の大道をここにしっかりと踏み出さしめよ。

（筆者付記。鑑三の訳文は岩波文庫本によった。天心の訳文は明治文学全集（中央公論社）並に拙訳によった。）

## 二、京都学派(哲学)におけるマルクス主義批判は

どうであったか、その他

高 山 岩 男

(小田村寅二郎との対談)

小田村 表題のことにつきまして、先生の忌憚のない御感想をお聞かせいただけると有難いのですが……。

高山 実は、あなたに言はれてから、西田幾多郎先生(一八七〇～一九四五)の全集の十八卷・十九卷の書簡集を取り出して、あちこち読んでみました。戸坂潤君(一九〇〇～一九四五)とのあひだに、ちょっととした手紙の往復があるやうですし、三木清、戸坂潤といふやうな猛者連がよく議論をしかけたことは事実です。が、私の知ってゐる限りでは、西田先生が特別にマルキシズムの批判を体系的に行つた論文を書いたことはな

く、当時の論文の中で批判的なことに言及してあるといふ程度に止まっております。思ひます。

田辺元先生(一八八五—一九六二)にしても似たり寄ったりですが、田辺先生のほうが、マルキシズムに対する態度は非常にはっきりさせてみました。田辺先生は、ある段階



西田 幾多郎

では西田先生などより遙かにマルクスに接近してゐましたが、その唯物論との対決は激しいものでありました。しかし、体系的な批判をやった著述を書かれたわけでもありません。また、高坂正顕君や西谷啓治君にしても、はっきりマルキシズムの批判といふ意味の論文やら本やらを書いてはるません。しかし、とにかくマルキシズムは、あれだけ大きな社会的政治的勢力になったのですから、取り上げるのが普通でせうが、哲学としては、それほど大まじめに取り上げるほどの価値があるものではない、と考へて来たのも事実なのです。

小田村 さういたしますと、哲学での京都学派のマルキシズム批判といふテーマは、少



少無理な気がいたしますので、三木清氏（一八九七～一九四五）や戸坂潤氏（一九〇〇～一九四五）のやうに、終戦の年に獄死した兩人と、西田幾多郎先生や田辺元先生などとの関係などをお話しいただきませんか。

高山 戸坂君は、三木さんより四年ほど後輩です。私の知ってゐる限りでは、戸坂君の



田 辺 元

方が本当に唯物論に近く、当時のスターリン主義に傾いてをりました。三木さんは、ドイツから帰って日本のマルクス熱の流行を見てから、マルクスに向いたやうに思はれます。

三木さんは、私は直接には知りませぬが、たしか岩波茂雄さんの好意でドイツに留学したやうに聞いてゐます。三木さんは、はじめてハイデルベルグに行き、後にハイデッガーに行ったやうです。ハイデルベルグの大学のリッケルトといふ人は新カント派で、日本では西田先生が大変持ちあげ、日本の学者は有象無象がハイデル詣でを致したやうです。

これは田辺先生が私に申したことです。西田先生が日本に紹介したのは、新カント

派のカントで、古典的なカントを本当に日本に紹介したのは、実は波多野先生だといふことです。これは私は、正しいことで、また、歴史的には重要なことと思ひます。新カント派といふものは、稔りの少い哲学で、私なども一時はこれに傾きましたが、間もなく離れてしまひました。

で、三木さんが新カント派のリッケルトから離れて、現象学のフッサールの所に行くんですが、これがまた「意識の現象学」程度のものですから、やはり人間の深い実存だの精神だのを追求する人々からすれば、満足できない点があります。ハイデッガーといふ人は初めリッケルトの所に行き、次にフッサールに赴いたのですが、ここでも十分に満たされず、デルタイの解釈学の観念を入れて、「解釈学的現象学」といふものを立てる発想を致してゐたやうです。三木さんは、結局、このハイデッガーの立場に落ちついて日本に帰ってきたやうです。

ハイデッガーのこの考へ方を雑誌『思想』に初めて紹介されたのは、田辺先生で「現象学における新しき転向」といふ題だったと思ひます。私がまだ学生時代のことで、「偉い哲学者がドイツにはあるんださうだ」と、前評判は大したものでした。だからハ

ハイデッガーの最初の主著『ザイン・ウント・ツァイト』が出た時には、私たちはむさぼるやうに読んだのですが、私自身は、実はさう感心しませぬでした。それは、私はヘーゲルの『精神現象学』の虜とりこになってゐたからなんです。

ハイデッガーのこの「解釈学的現象学」といふのは、ドイツ講壇哲学特有の方法論的詮議が長つたらしくて、中身の哲学そのものは、期待するほどのものではありません。禅坊主が、口に不立文字をヘラヘラ言挙げするのとどこか似てゐて、実存といふ本来は不立文字の次元にあるものを、言葉の、それもギリシャ語とドイツ語の、解釈によつて明らかにしようとするので、いつか、どこかで、行詰るものではないか、と私は考へた次第です。

しかし当時とすると、新カント派の稔りは極めて少いし、現象学はもっと稔りがあるのですが、これも「実存」のところまではそのままでは行けない、といふわけで、ここにハイデッガーの「解釈学的現象学」の新しさが注目されたわけです。三木さんは、このハイデッガーにたどり着いたと思はれるのです。

そのころハイデッガーは、パスカルの『パンセ』をゼミナールか何かで使つたと見

えて、それを土産に三木さんは日本に帰ってきます。そして、『思想』に何回か「パスカルにおける人間の研究」といふ論文を出しました。これが、三木一流のなかなか洒落た新鮮味のある文章なので、当時の旧制の高校生や大学生を魅了しました。これが、三木清といふ人物を世に出したと思ひます。

ところが、三木さんが「解釈学的現象学」や「実存哲学」をひっさげて日本に帰って来てみると、日本では、学界も進歩的ジャーナリズムもマルクスの大流行で、マルクスでなければ夜も日も明けぬ有様で、心底では余程驚いたのではないかと思ひます。私なども、大正末の学生時代に、下宿屋にマルキシストの学生が盛んに説得や勧誘に来ました。一知半解の連中ばかりで、ぼくも躍起に論破するものだから、同じ奴は二度とは来ませんでした。私は昭和三年に京大を卒業すると、すぐ向ひの三高に勤めました。でも、担当は何と二年生の修身といひますか、国民倫理といふものでした。でも校長は森外三郎といふ英国仕込みの自由主義者で、窮屈なことは何一つ言はず、プラトンとかアリストテレスなどをやってくれればいい、といはれました。当時の三高は全く自由な空気でした。

しかし、はひって来る三高生は、東京の進歩的綜合雑誌の影響を受け、マルキシズムを振廻すのが半数位ある有様で、実は私も非常に困り抜き、「文化類型学」などといふものを話して、世界の大文化の知識を入れるのに懸命だったのです。このマルキシズムのクライマックスのときですが、いま防大の校長をやっている猪木正道君のクラス（文乙）では、夏休を過ぎて学校に行ってみると、生徒が四十人ゐたのに二十人に減ってゐるんです。「どうしたんだい」と言ったら、「みんな放校になりました」といふのです。

かうした折のことなので、日本に帰って来た三木さんは、パスカルの研究の文章で、一時は学生層の人気を博しましたが、心境に変化を起したのではないでせうか。で、パスカルからやはりマルクスの方に轉換した方がいいと思つたのではないんでせうかね。そして、パスカル論に似たやうな形で、マルキシズムの唯物史観を「解釈学的立場」からする、といふことをやり始めた、と私は思ふのです。

この三木さんの立場といふのは変なもので、私などから見ると、ほんとうの唯物論でもなければマルキシズムでもない。マルキシズムに好意を示しながら、唯物史観を

解釈しよう、とするものに過ぎない。しかもその解釈は、デイルタイが、解釈学は「著者を著者以上に良く理解する」と定義したやうなものとは違ひ、原始共同体から始つて文明共同体で歴史が終るとする「歴史」観念を、ユダヤ教・キリスト教の歴史観念から解するのでもなければ、歴史決定の「生産力」がキリスト教神学の「神」や「神の予定」の宗教概念の変形と解するのでもなく、西洋文化史を知る人でなければできぬいい所を、少しもやらすじまひに終りました。

私は、三木や戸坂のやうな有能な人物が死んだのを、非常に残念に思つてゐます。敗戦後の日本の左翼陣営は、余りにも悲惨だし、三木や戸坂がゐれば、もう少しものになってゐたと思ふからです。戦後の左翼陣営は、十人寄つても三木一人に太刀打ちできる者がゐないでせう。三木は煽動も得意だし、一人で文学評論も社会評論もできました。柳田謙十郎君などは、戦前は西田哲学の紹介をやってゐた人ですが、敗戦後は「軍部に騙された」とざんげしてデモクラシーに転向し、更に「マッカーサーに騙された」とざんげして今度はマルクス主義に転向した人で、自分の哲学などない人です。日本の左翼が余りに思想貧困でみじめなのは、三木ぐらゐの人物が一人もゐない



からだと思ひます。三木といふ人は、これからそのオリジナリティを出し始めようとした所で死んでしまったやうです。

今日出海さんが書いた『三木清における人間の研究』には、三木の風貌がよく出てゐるのではないかと思ひます。軍司令官から頼まれれば、マニラ街頭に名文で「大東亜共栄圏」のおふれを書く。そしてホテルに帰って来ると、テーブルの上に足を延ばして「こんな戦争は陸軍の大バクチだ」と放言して、並居る陸軍派遣の文士、評論家達を啞然たらしめる。正反対のことを同時にやれる力量や技倆を持ってゐた人で、解釈学にも徹底できず、マルクス主義にも徹底しようとしなかつたところに、彼の運命を決したものがあつたやうに思はれます。

小田村 先日先生にお電話申し上げた折に、先生は「戸坂潤は、真理を追求するといふ精神でマルクスに批判的に立ち向ふといふのではなくて、マルクスやスターリンの言ふことは真理だといふ新興宗教みたいなことを主張するので、私はもう彼と議論することは止めた」とおっしゃつてをられました。その点をお話し下さいませんか。

高山 戸坂君は西谷啓治君と同じクラスです。西谷君は戸坂君を非常に高く買ふのです。



が、私はどうも西谷君のいふほど純粹さも力量も認められないんです。科学批判のやうなことを主な仕事にしてゐて、頭の働きは非常に正確な人でした。

戸坂君が東京に移る前ですが、私はある学校での講義で、しばらく顔を合せる時期がありました。それに京大でも、西田先生や田辺先生の講義では、しょつ中顔を合せてゐました。田辺先生は、一時はかなりマルキシズムに傾き、唯物弁証法の意義を認めてゐたことがあるんです。これには戸坂君あたりの議論が与つて力あったものと思ひます。そのためか、戸坂は田辺先生の講義には熱心に聴講してゐましたが、帰路、私に批評して

「今日はいいところまで接近して来たが、あれではまだ観念論だ。」  
とか

「今日も観念論の尻つぼをつかまへた。」  
とか云ふんですね。戸坂君ぐらゐの頭の持ち主でも、唯物論・観念論といふジャンル以外には考へられないのが、私には不思議なのです。

私は、ヘーゲルの「精神現象学」といふ壮大な弁証法的運動のやり方で鍛へられて

みますので、ただ唯物論だ、観念論だといふ風の形式主義的な判決みたいな考へを全く非哲学的と感じてゐて、観念論と唯物論を止揚した田辺先生の「絶対弁証法」といふものにも、同情はできませぬでした。この前、電話で申し上げたときの話は、そんな調子で戸坂君と何か議論してゐたときですが、私は彼に

「スターリンが正しいのなら、君の言ふことは判るが、スターリンが正しいといふのが、をかしいではないか。」

と言ったところ、彼は、

「自分はスターリンが正しいなどといふのではないんだ。スターリンが言つてゐるからすべて正しいんだ。」

と、かう言ふのです。まるで共産党員のやうな口吻で、「スターリンの無謬性」なのです。厳正な哲学徒までこんな「信仰」に走つては、もう話はできぬ、と僕はこれ以後二度と議論はしなくなりました。

およそローマ法王でさへ「神が言つてゐるから正しい」のであって、「ローマ法王が言ったから正しい」といふわけではないでせう。しかし、信徒にとっては、ローマ

法王の言ふことは、「無謬だ」といふことがあっても不思議ではないでせうが、事もあらうに「哲学者がスターリンが絶対無謬だなんて、そんなバカなことでは議論は出来ませんね。」と言ったら、さすがに彼も、自分の言ったことが少々をかしいと思つたやうでした。

小田村 はじめの課題ですが、この辺で西田幾多郎先生とマルキシズムとのことについて、少しお話願へませんか。

高山 はじめにも申し上げたやうに、西田先生がマルキシズムを正面から批判した主題的な論文といふものは、何一つありませんね。ただ、いろいろの論文の中に批判が出てくるだけです。マルクス主義は、唯物論、唯物史観の哲学に立ってゐますが、勿論哲学だけでなく、経済理論もあれば、社会革命の実践でもあるわけです。だから、哲学としては、その哲学面に批判が集中するに止まるのは自然になります。西田先生は体系的な思想家ですから、唯物論とか観念論とかの何れかにくみする、といふことのない全体的立場―「絶対無」―ですし、システマティックな考への上では、唯物史観にも批判の上で然るべき所に所を得しめる、といふことになるわけです。

では、西田哲学のどういふ所に所を与へられてゐるのかといふと、これも明快に論ぜられてゐるわけではありませんが、「場所的論理」の中の直線的限定が観念論であるのに、マルクスの唯物論は円環的限定を重視してゐるといふ風にされてをります。これだけでは何のことやらお判りにならぬかも知れませぬが、要するに、自分の場所的論理の場所に幾らか近い考へ方だといふことになります。

ところが、三木、戸坂といふ人々は、西田先生の場所的論理はよく理解できない立場にある上、唯物論を全面的に支持しようとして対決するわけで、彼等から見れば、場所的論理の西田哲学は観念論となり、この観念論を何とか唯物論に屈服させようといふのですから、特に建設的なものは何一つ出るわけがありません。彼らをはじめ、マルクス信者が相当押しかけたやうで、和歌が『続・思索と体験』に載つてゐますね。

小田村 私も昔、学生時代に記憶した西田さんの和歌に

赤きもの赤しといはであげつらひ五十路あまりの年を経にけり  
といふのと、

夜ふけてまたマルクスを論じたりマルクス故にいねがてにするといふのがありました、いまお話のは、この後者の方でせうか。

高山 さうです。西田先生はマルキシズムといふものの社会的勢力に対して、やっきになつて批判するといふことはなかつたのです。

ところが田辺先生は、マルクス主義の言ふ通りに観念弁証法にも弱点があるが、彼らが言ふ唯物弁証法にも弱点はある、といはれ、唯物弁証法や観念弁証法などは対立する相対的立場のもので、最高の価値を持つ絶対的な真理ではない、と批判される。そして結局、唯物弁証法・観念弁証法に対して、絶対弁証法といふものを立てて、これを自分の立場としてゐる。この意味では、マルクスを相当に位置づけ、その価値も立派に認めるが、しかし、このマルキシズムを絶対化するのには間違ひである、といふわけである。色々の論文でそれを言つてゐます。岩波全書の中の『哲学通論』でしたか、かなり体系的な立場から、このことを論じてをります。

小田村 お話が変わりますが、先生がいつぞやおっしゃつた鈴木成高さんといふ方は、早

大で「マルキシズム歴史観の批判」をなさった方ですか。

高山 それは知りませぬが私と同じ時期に京大にをりまして、『ランケの世界史学』といふ短いがなかなかの名著を出した男で、ランケ、マイネッケの政治史、ブルックハルトその他の文化史や、ルネッサンスといふ概念についての新しい研究などを紹介したりして、西田先生以下私たち、新しい西洋史学の著述論文などについてこの鈴木君から新知識を得ていたのです。鈴木の影響を受けた者は、いま教授・助教授として京都にはかなり多いのです。現在の西洋史学では、歴史感覚に恵まれた珍しい天才的な男です。

小田村 さういたしますと、京大の「史学」では、マルキシズム批判の流れがあったわけでございますね。

高山 それはそれとして小田村さん。エンゲルスは、「唯物論」を盛んに強調してゐますが、マルクスはエンゲルスほどかういふ形式論に余り拘泥してゐませんね。

彼らは、マテリアーレ・プロドクチオン (Materielle Produktion) といふ字を使

ふでせう。これを普通「物質的生産」と訳すやうですが、「物質の生産」と言った方が日本語としてはまぎれがなくていいのじゃないでせうか。具体的に言へば、近代的な工場の中で商品を生産することです。商品の生産は物質の生産です。

ところが、この商品の生産が社会の変動に決定的な影響力を及ぼす。故に、マテリアリズムが真理でなければならぬ。私は、この推論は非常なミスだと思ふのですが、如何でせうか。

非常に精巧な機械から製品が次々とつくられてゐる。この機械は、物質から出来てゐますが、自然物ではなくて人間が発明したものです。機械は動物にはなく、人間だけが作り出し得たもので、これは、人間の高度な精神活動による産物ですね。機械の発明には、物理学の知識のほかに、豊かな構想力が必要です。

すると、物質的生産、つまり商品の生産といふことは、「唯物論」の立場からはとも説明できないことで、「物質的生産」だから「唯物論」といふのは、常識的な「唯物論」の濫用拡大で、精密たるべき哲学の立場には許し得ないミスだと思ふのですが、如何でせう。



私は、三木清や戸坂潤のやうな優秀な頭脳が、「唯物論」といふ言葉の虜となって、「実践的」だの「弁証法的」だの、いろいろ必要なものを「唯物論」の中に投げ入れて、「方法的懷疑」や「理性批判」を魂とする哲学からそれてしまったのを、非常に残念に思ひます。概念をうまく組合せてものが説明できるなどと思ふのは、中世スコラ哲学の亡霊で、本当の哲学者のすべきことではないと思ひます。

残念ながら、大正末、昭和始めの京都哲学では、このやうな唯物論・観念論の概念に終つて、事柄それ自体に逼つてマルクスの唯物史観を批判する、またそれによつて、マルクス主義哲学を離れる、とか修正するとか、の建設的なことは何一つ行はれなかつたと思ひます。

「中間階級」の没落といふ、弁証法的矛盾対立から演繹された観念的思考の批判も出ず、むしろ、知識階級没落論でそれを応援する有様で、ブルジョアもプロレタリアも中産階級化する歴史的事情など、少しも指摘することがなくて終りました。その他、たうてい今日ではそのまま維持できない諸種の難点など、論争にもならずじつと私は残念に思ひ、ちょっと恥かしい気が致します。

小田村 大変に貴重なお話の数々に加へ、マルクス主義哲学についての京都学派の歴史的なご関係につきまして、まことに敬肅な御回顧までを加へられてご披露下さいましたことは、御礼の申し上げやうもございません。たいへんに有難うございました。

（一九七五・九・五）

### 三、三井甲之（付・蓑田胸喜・河村幹雄）のマルキシズム批判

夜久正雄

標題の三氏について、——特に若い読者諸氏には見なれない名前で、なぜかうした人々がマルキシズム批判文献集に出てくるのか、疑問に思はれる方が多いと思ふ。そこではじめに、ごく簡単に、この三氏の業績を紹介しておきたい。まづ「三井甲之」であるが、『和歌文学大辞典』（明治書院・昭和三十七年）に次のやうにある。

「三井甲之みつゐ、明治一六1883・一〇・一六——昭和二八1953・四・三〇。七一歳。本名は甲之助。別称は笹野谷人。

〔閲歴〕山梨県生。一高を経て明治四〇東大国文科卒。明治三七から根岸短歌会に入り「馬酔木」に清新な作品を発表。伊藤左千夫から深く信頼され「馬酔木」終刊の後をうけて明治四一「アカネ」創刊、その経営を一任されたが、やがて甲之の人生主義は左千夫の芸術主義と衝突し、感情



三井甲之

問題もからみ、左千夫らは別に「アララギ」を創刊して「アカネ」を去り、甲之は後々まで「アララギ」の斎藤茂吉らと論争した。明治四五「アカネ」を「人生と表現」と改題、大正一四まで刊行。なお甲之は明治四一から「日本及日本人」の選歌も担当した。甲之は大正中中期から祖国主義を強調、やがて敷島の道を説き、明治天皇御製拝誦の国民宗教を宣説し、大正一四「原理日本」を創刊、昭和三「しきしまのみち会」を組織して、終生和歌を中心とする日本主義を唱道した。昭和一四郷里敷島村々長に就任。昭和二三公職追放。翌二四（昭和二二の誤り）脳溢血で倒れ、病床から昭和二七『今上御歌解説』を頒布、翌年歿した。

著述は詩集『消なば消ぬかに』（明治四〇年）『祖国礼拝』（昭和二年）『日本の歓喜』（昭和一六年）、主著『明治天皇御集研究』（昭和三年）『しきしまのみち原論』（昭和九年）その他『和歌維新』（昭和一七年）『親鸞研究』（昭和一八年）『三条実美伝』（昭和一九年）、歿後『三井甲之歌集』（昭和三三年）『三井甲之存稿』（昭和四四年）等がある。

三井甲之氏は、大正七、八年から昭和の戦前戦中に及ぶ約二十年間、一貫してマルキシズム批判

の筆陣を日本の論壇に張ったのである。

蓑田胸喜氏は、明治二十七年一月二十六日生。東大宗教学科の出身で、慶応大学、国士館専門学校等の教壇に立つ一方、三井甲之氏の『原理日本』創刊に協力して、その中心となった。新潮社刊・藤村作編『日本文学大辞典』の三井甲之の項目には、「蓑田胸喜と協力して『原理日本』を創刊し、日本主義を唱へた」とある。また同じ項目の中に「日本主義運動に従事し、二十年一日の如く、論戦の陣頭にあった」と書かれてゐるのは、蓑田胸喜氏にもあてはまるのである。その主著『學術維新原理日本』（昭和八年）『學術維新』（昭和一六年）は、いづれもマルキシズムの綜合的批判の論説がその中心になつてゐる。昭和二十一年一月三十日逝去、享年五十二。敗戦の責任を死をもってつぐなはうとせられたのであらう、悲痛な最期をとげられた。



蓑田胸喜

河村幹雄氏は東大地質学科卒業、理学博士、九大教授、工  
学部長・学生監を歴任、教育者として著名である。また斯道  
塾の創設者として知られてゐる。昭和六年逝去、享年四十  
六。遺稿集に『河村幹雄博士遺稿』（昭和八年）『名も無き民  
のこゝろ』（昭和九年）等がある。

私は、三井・蓑田両氏に師事して親しく御指導を受け、河



河村 幹 雄

村博士には、博士が三井・荻田両氏の同志盟友であられた機縁で書物の上で師事し学恩を蒙ってゐるので、この三氏については特に「先生」と書かずにはをられない。読者諸氏の中には耳ざほりに思はれる方がをられるかも知れないが、筆者の事情を御諒察くださって、おゆるし願ひたい。

本書の姉妹篇とも言ふべき『ヨーロッパにおける——マルクス主義批判論集』（本書「はしがき」参照）の編集者桑原暁一氏（昭和四十八年五月十九日逝去）は、その主著『日本精神史鈔』（国文研叢書No.2）の「はしがき」の最後にかう書いてゐる。昭和四十一年九月十八日の日付の文章である。

「いま、ぼくらのまはりには、『慈悲』にはあまりに遠い、むしろそれとは逆の、自是非（自らを是とし他を非とする）の冷い風が吹きすさんでゐる。

残忍ノ仁愛慈悲ニソムク思想地上ニ消エヨトセチニ思ヘリ

亡師のこの歌はいつもぼくの心にある。ぼくらは、まはりの残忍酷薄の革命思想にた

じろいてはならぬ。それを消失自滅せしめるものは慈悲のこころのほかにはない。われらをして、慈悲忍辱に生死せしめよ。」

この「亡師」と桑原さんの書いたのは、三井甲之先生のことである。この歌は、三井先生の戦後病中の歌で、次の歌と連作になってゐる。

否定スル論理作用ヲ欲望ニツナグ弁証法的思惟ヲヤブラム

二首はいづれもマルキシズム思想に対する批判の懐ひを詠まれたものである。三井先生にとってはマルキシズムは単なる学説ではなかつたのである。それは強く人心を動かす思想であつたので、その誤謬を指摘批判することも、人心をその思想から護らうとする強い情意に裏づけられてゐたのである。マルキシズムの嵐は人生を荒廃させると信じて、全身心をあげてそのことを説かれたのである。

三井先生のマルキシズム批判は、文献から言へば、大正七年『雄弁』四月号所載の「日本将来の人道的使命」(『三井甲之存稿』所載)といふ論文あたりから始まると見てよいであらう。その後、大正、昭和、戦前、戦中を一貫してマルキシズム批判の論文を發表され、戦後の病床においては、右の歌のやうに、短歌によってその思ひをうたはれたので



ある。マルキシズム批判は実に先生生涯の事業であった。

前記論文「日本将来の人道的使命」の中においてマルクスの思想を論じた箇所は左に引用する箇所である。これは三井先生のマルキシズム批判論文の初期のものと思はれるが、後年の論旨の基礎をなすものであらう。大正七年四月号発表のものであるから、ロシア革命・ソヴィエト政権成立直後の執筆論文であつて、日本にはマルキシズムがまだあまり滲透してゐない頃のものである。そのためであらうと思はれるが、終始理論的な批判が行はれてゐる。まづ社会主義について全体としての批判を述べてある。

「国際的社會民主主義の人生観は、まづ心理学的見地からしては旧式心理学への逆転であつて、人間を一斉に論理的法則と外的影響とのみによつて行動するものと考へてゐるのである。すべて人間が境遇を作るのではなく、境遇が人間を作るかに考へて居るのがその根本的誤解である。人間の情意的創造作用を認めずに、単に機械的受身的作用をのみ認めようとするのである。又それは、歴史哲学的に人間社會の進化開展を考察する場合に、極楽浄土の実現を期待しようとする夢想者の態度を取るものである。又道徳的見地からは自我主義と不斷争闘説とを奉ずるものである。そして階級戦争の

継続を主張するのである。それは現状に対する不満足の心理的動機を考察せずして単に表面に現はれた経済現象をのみ考察するのである。」

次にマルキシズムの学説を要約説明する。

「フェルチナンド・ラサルやカール・マルクスの如き近世社会主義の代表者の思想はヘゲルの史観に基くものであつて、ヘゲルの弁証法を現実化さうとしたものである。即ちヘゲルの観念の自己運動を現実化さうとしたのである。……………  
……マルクスにとつては人間の物的官能的要求が主要のものとせられたからして、つまりるところ経済関係が社会組織の基礎であると考へられたのである。観念の自己運動は経済状態の推移と変じたのである。此の経済事情の変化は歴史に内在する論理的必然性によって成立するとせられたのである。此の経済的基礎の上に一切の社会秩序も精神力も建立せらるるといふのである。かくて観念の自己運動は経済生活の自己運動となり、それが歴史の実内容であるとするのである。」

此の自己運動のために前時代の法則は現代の経済生活にとつて不適當のものであり、相反撥するものであり、此の反撥からして社会制度の弁証法的發展をなすといふ

のである。一時代の法律制度はある一階級の統治を示すものであるから、歴史の進歩は相次いで現はるる統治階級の競争であり、それは論理的必然を以て進み又結末に達するものとせらるるのである。そして此の発展に転回期を画するものは技術的進歩であるとして、火砲の発明、機械の使用等によつてそれを説明しようとするのである。

此の時代の進歩とともに法則を変革せしめようとするのである。それ故に現代の社会的生産の時代においては私有権の上に成立して居る国家は不適當であるといふのである。」

ここで、説明から批判に入る。それはマルキシズムの国家無視・破壊説に対するところから逆にさかのぼつてその論理主義・概念弁証法に及ぶ批判である。

個人の性質を聖人君子的の一面にのみ局限しようとする仮定を認めざる以上、公正は国家的意志によつてのみ正当に実現せらるる。私有権の惰性的発展に対して国家的公正意志の矯正を加ふべきで、それを撤廃しようとすることは性急の論理的潔癖である。封建国家、市民国家、その次には無国家、といふやうに開展階次を区画することは、個人主義観の迷誤である。個人生活ならば少年時代、壮年時代、老年時代、死、

とさう明瞭に区画せられようが、国家の生命は自然の如く無窮であらしめねばならぬ。現在の国家の主要任務は私有権の保護であるからして、私有権の撤廃を要すべき時は国家は無用の長物であるといふやうな考へ方は、史的生活の不断持続の生命を知らずして、国家を道具視しようとする迷信である。……それ故に人間性の弱点を認むることが、そのみが、無極の生命に随順する唯一の大道である。——親鸞が「愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し云々」と告白したことに嚴肅の威力のこもつて居るのは、それが此の人性の真実に触れて居るからである。」

「此のヘーゲル流の概念弁証法から出発した迷信哲学に基く社会主義思想は、社会問題の解決をなすべき方法を最初から誤つたのである。此の概念弁証法の論理主義の技術は、仏教でいふ「戲論」である。小兒の悪戯から大事が起るやうに、概念遊戯から重大事が起るのである。それ故に現文壇に流行して居る概念弁証法的論理主義の時代後れの旧思想を駆逐することは刻下の急務である。……」

三井先生のこのマルキシズム批判は、第一次大戦末期のドイツにあってドイツ敗戦の革命を経験しつつあったウィルヘルム・ヴント（一八三二—一九二〇）に拠るところが多いが、

注意深くこれを読むと、ここには、マルキシズム思想の根本的批判が網羅されてゐることがわかる。そして、それらは、その後も三井先生の論文に開展したものであるが、さらに、蓑田先生の『独露の思想文化とマルクス・レニン主義』（昭和四年）を経て『学術維新原理日本』（昭和九年）の「マルクシズムの根源的総合的批判」十三章に開展したのである。

なほ三井先生のマルキシズム批判は、右に見られるやうな、理論的批判にとどまらずに、マルキシズム革命の具体的内容の検討をともしなふものであったことは、事実を重んずるといふ先生の根本的な学問的態度とあはせて考へなければならぬ。それは当時としては比較的に耳目に入りにくい情報であったが、それを先生は長年にわたって購読したドイツの新聞や英字新聞によって得てをられたのである。先生のマルキシズム批判が国際的交流の渦中にあつてのマルキシズム批判であつたことがわかる。雑誌『国本』大正十年一月号二月号に掲載された「マルクス思想の誤謬」の論文などがその好例である。

それは「一、英国労働代表の露国視察報告に就て」と「二、ヴントのマルクス唯物史

観評」の二章、及び日本の行くべき道にふれた「三、心理学倫理学法則及び日本の統一原理」の三つの章から成り立ってゐることからも、知ることが出来る。

では三井先生はどのような見地からマルキシズムを批判したか、それを示すのが先生の「日本主義」であつた。しかしその「日本主義」は、特定のイデオロギーの宣伝ではない。つまるところ、日本の国家国民生活の歴史的現実にしたがつて、思想し行動すべきであつて、この見地から誤つた思想を批判するのが「日本主義」の内容となる、といふことを先生はくり返し説いてをられる。

「日本人の哲学者でありながら日本思想史を顧みぬ人。日本の美術文学の發達を顧みぬ日本人としての芸術作家及び批評家。自国文化の特色を知らずして外国文化の皮相観に眩惑して居る人。日本語に就て注意せぬ人。それらすべて自己と自国との現実的立脚地を忘れて、概念的幻想世界に遊行するところの思想的漂泊人の理智主義。具體的生活の成立条件と發生徑路とを無視して、眼前に示された世界に対して受身的享樂生活を営みそれを眞の生活だと思つてゐる人。さういふ人々と思想と行為とに対して始めて「日本主義」はその降魔劍となり清凉劑となるのである。



「日本主義」とはそれらの間違つた思想の消毒剤である。積極的に日本主義は第一条云々第二条云々と述べて立て得べきものではない。外国文化を毛嫌ひし、外国語の学習を廃し、世界交通路から退隠し、鎖国攘夷、夜郎自大主義の空想国に住居しようとする如きは決して日本主義の内容ではない。日本主義は積極的に箇条書にして述べ得る如き窮屈の主義であつてはならぬ。」〔三井甲之存稿〕所載『日本主義』の折伏精神——「中央文学」大正七年四月号）

かういふ見地に立つて、三井先生は、第一次世界大戦後の日本の論壇に、正岡子規の「文壇八つ当り」にも似た、八つ当りの論戦を展開されたのであつた。そしてその批判は、子規の短歌批評の態度を基礎にしたので、子規が一首の和歌を批評するやうに、論者の文章を正確に引用しその文章に対する論理的・心理的批評を行ったのである。その批判の主たる対象は、ウイルソン流の国際主義を唱導した東大法科教授の吉野作造博士と日本にマルクス経済学を導入した京大の河上肇博士とであつた。

大正十二年関東大震災は、第一次大戦後の弛緩した国民思想生活に対する一大警鐘となつたが、この時、三井先生は「人生と表現」社宣言を書いて、その信念を広く訴へ、



これをその名著『明治天皇御集研究』の序文とした。その中に、マルキシズムについて次のやうに書いてをられるのは、前記の批判の結論である。

「ロシア最近の革命は地上天国の現出にはあらずして、単に共產主義者政權獲得の政変であつた。彼等の政權獲得思想宣戦の武器は、マルクスの窮極予定の歴史哲学と概念構図の弁証法とであつて、生命の不可思議創造と文化の不断開展とは党派支配の権略によつて阻礙せられたのである。しかしながらかれらは今人間心理の不可抗的法則と国民生活事実の制約とのもとにその共產主義理論を矯正し、またインタアナショナル世界革命の名義によつて宣伝せられたる統一意志と支配計画とに軍備的形式と戦略的組織とをあたへてその国民生活速度をはやめむとし、ドイツに於いても一九一八年の革命は、ただ無確信の政党首領跋扈のメロドラマなりしことを反省し、まことの民衆本能革命は一九一四年の開戦とともに、国民総動員として適法にまた軍事的形式において行はれたることをさとり、フランスに於いてもまたイタリアに於いても理智主義より生れたる国家敵視の社会主義理論はすでにその人生試験を終りて事実感覚と国家思想とは伝統精神によつて統一せられ、いま全世界はまことの宗教的礼拝の対象

を人生そのものに見いだし救済者を外に求めずして、解脱を内心に求め、人生の理想を同胞の内的平等感に求めむとしつつあるのである。

しかるに最近の日本に於いて国家生活の事実と意義とを知らず、国家威厳の保持と祖国防護の用意とを忘るることを誇りとして、大学と新聞雑誌とに巣くへるすべての偽新思想偽進歩思想の宣伝者は、かれら自身、自立国民生活の廣大恩徳をかうぶりつつ、それは実に祖国日本自立のためにその身をささげたりし同胞の靈の威力の冥加によるものなることを忘れ、思想上の後進国ドイツ、ロシアの旧式哲学をまなばむとするところの忘恩の、またそれ故に無自覚のともがらである。かれらは個体概念にとらはれて国家生活の事実を知らず、平和概念にとらはれて祖国防護の用意を思はず、さらに理論と概念とを眩惑武器とする外国の宣伝に内応して国民精神を混乱せしめたる、個我執着理論偏重の近代的迷信者である。……

……震災火災に対する帝都の無防備は敵の襲撃に対する帝都の無防備であり、震災火災の悲惨なる実情は、享樂的平和主義者忘恩的非国家主義者の残虐性のための犠牲である。……」

この文章はその末尾に「(大正十二年十二月脱稿)」と記されてゐる。

大正十四年の『原理日本』社の創設は、この宣言の実行であつた。「原理日本」とは前記の三井先生の文章に示された「日本主義」の意味であつた。蓑田胸喜先生はこの『原理日本』誌の編集責任者として三井先生に協力し、マルキシズム批判の諸論文を誌上に掲載したのである。これが結集されて後に『學術維新原理日本』となつたことも既に述べたとほりである。この中に盛られたマルキシズム批判を要約することはできないので、『學術維新』の「第一篇・精神科学とマルクス主義」の項目をあげ、弁証法批判の結論的部分の一文をあげて蓑田先生のマルキシズム批判の内容を暗示しよう。――

- (一)精神科学の經驗科学的性質と弁証法 (二)精神科学の客観性と階級性 (三)マルクス主義唯物論の心理学的分析 (四)マルクス主義唯物論の認識論的考察 (五)資本論の方法を論じて労働価値説に及ぶ (六)唯物史観とレニンの体験したる露西亞革命 (七)マルクス、エンゲルスの芸術観 (八)マルクス主義対宗教の順逆的考察 (九)河上肇氏の無理解のマルクス盲信と『資本論』誤訳 (一〇)三木清氏のマルクス主義妄執 (一一)昭和研究会の

右の「(一)精神科学の経験科学的性質と弁証法」の結論的部分からの一節を次に引用する。

「マルクス主義の唯物論は、思想は事実の反映であり、従つて事実なきところに思想なしといふのであるから、マルクス主義者にして若しこの唯物論に忠実であるならば、未来に就いては何事をも立言し得ないといふことが唯物論からの必然的帰結でなければならぬ。未来は未だ反映すべき事実なきが故に始めて未来である。然るに彼らは唯物論を奉じながら、頻りに未来に向つて予言をなし理想を描くのである。それ故マルクス主義に於いて、本来の理想社会を説くのは専ら弁証法の方式によるのである。かくなれば事実に基づいて論理をすすむることとなり、ここに唯物弁証法は一糸も纏ふなきその本来の観念論的正体を露呈するのである。

猶ここに指摘せらるべきは屢々論者によつて難詰せらるるマルクス主義弁証法の自己欺瞞である。即ちマルクス主義が弁証法による無限発展を共産主義社会の到来までに打切つて、それ以上の発展を認めぬといふことである。正反合の三開展は無限に継続すべきが故に、共産主義社会は更にそれ自体分裂矛盾を生み次の社会形態を開展すべきであるから、それは窮極の段階ではあり得ないといふことを説くべきに、恰も人

類社会の発展は共產主義社会の実現によつて極限に達するかに論じ、従つてその理想社会の実現のためには如何なる犠牲いかなる罪惡も正当化せられるといふのであつて、ここにかの残虐暴虐革命の理論と実行とが生るのである。」

本論の冒頭にあげた三井先生の歌の中に出てくるマルクス主義弁証法思想の残虐性は、昭和五十年の今日では、数々の爆弾事件、ハイジャック事件、内ゲバ事件等でありやといふほど見せつけられてゐるが、その心理的根拠の一端は、右の文章によつて予言されたとも見られるのである。蓑田先生が、論壇に孤立し、「狂氣」とあだ名されるほどはげしい筆剣を揮つた根底は、一にこのマルキシズム思想の滲透から「日本」をまもらうとする一念からであつた。私は主として三井・蓑田両先生の文章からマルキシズムの批評を学んだ。マルキシズムを真向から批判する人のとほしかった当時であつて、先生の記事からマルキシズム批判を学んだ人も少くはあるまいと思ふ。

九大教授・工学部長・理学博士の河村幹雄先生は、三井先生の「原理日本」の信念に共鳴して、『人生と表現』誌（『原理日本』誌の前身）に「基督の信について祖国愛のうかがはるる節々」（大正十一年『人生と表現』第一卷第十一号）を發表して、キリストの信と祖国民衆

主義との関連を論じられた。さらに先生はキリストの祖国愛の信にもとづいて、社会主義共産主義の滲透から教育界をまもるために、講演に寄稿に（『原理日本』及びその関係誌が主である）奮闘されたのである。『河村幹雄博士遺稿』（一一五八ページ）の大著がその集成である。その中の主要論文を集めた『名も無き民のこころ』（初版・昭和九年・岩波書店）が最近復刊されたので、ついで見られたい。

#### 四、川合貞一の『マルキシズムの哲学的批判』

高木尚一



川合貞一

昭和三年から十年頃にかけて、日本の国内におけるマルキシズムの流行は異常なまでに強烈なものがあつた。殊に大学高等専門学校内においては、正に一世を風靡した観があつた。

この中であつて毅然たる態度を以て終始これに学術的批判を加へることの出来た人は、まことに深い学識

と真の勇氣とを持った人で、その数は極めて少数であつた。その少数者の中に川合貞一氏がゐる。



川合貞一氏は明治三年の生れで、昭和三十年八十六歳で永眠されるまで哲学者として数々の著作論文の中にマルキシズムを体系的に批判しつづけたのである。

川合氏に親しく師事した慶応大学教授阿部隆一氏の誌した年譜によれば、明治三年、岐阜大垣に生れ、明治十九年十七歳にして大垣の中学を中退して、慶応義塾に入学、明治二十五年、大学部文学科卒業、新潟尋常師範学校の教諭を経て、明治二十九年、母校慶応義塾の西洋史の教授となる。明治三十年、二十八歳にて論理学、心理学の専任教授となる。明治三十二年、慶応義塾第一回留学生に選ばれ、哲学、教育及び心理学研究のため渡欧、イエナ大学に於て、哲学をオイケン、リープマンに、教育学をラインに、心理学をチーエンに就いて聴講、明治三十四年、ライプチヒ大学に移り、ヴントを始めフォルケルトハインツェの講義に列し、特にヴント教授に傾倒し、三十五年、ヴント教授の心理学研究教室に客員として入ることを日本人として始めて許された。三十六年、帰朝後、哲学、教育学、心理学、論理学を講じ、倫理社会学も担当され昭和三年、文学博士となる。主なる著述の中にフリードリッヒランゲの唯物論史の翻訳や『恩の思想』などがあるが、本論で紹介するのは、昭和七年三月、青年教育普及会から発行された『マ

ルキシズムの哲学的批判』である。

本書の構成は、マルキシズムの認識論に対する批判にはじまり、次にマルキシズムの本体論、弁証法に対する批判、唯物史観に対する批判、階級闘争説、国家観、社会観に対する批判となつてゐる。

#### マルキシズムの認識論

まづマルキシズムの認識論からいふと、認識は客観的現実の反映であり、外なる物質的なものが、頭脳によって写されたものが観念であるといふ一種の模写説をとつてゐる。そこで人間の思惟は能動的なものではなく、全く所動的なものであるといふ。

しかし本書四十六頁には、マルクスエンゲルスは、主観を以て所動的なものといふ見做し、単に客観を反映し模写する働きを為すこと、あたかも硝子板が物を反映し模写するのと異らないとしてゐるが、その中に主観の能動的機能を暗黙の間に許容してゐる。何故なら、抽象とか思惟とか分離とかいふこと自体、思惟といふ能動的機能を主観に賦与してゐるものに他ならないと批判し、要するに認識の主体と客体とが確立できない、心理学

発達以前の薄弱なる認識論であるといふのである。

### 弁証法に対する批判

次に弁証法に対する批判であるが、川合氏によれば、ヘーゲルの弁証法は、唯心論より出発し、マルクスの弁証法は、唯物論を出発点としてゐるが、その運動方式は、ともに形而上学的弁証法に変わりはない。運動には終極するところがある。ヘーゲルに於いては、絶対精神に終り、マルクスに於いては共産社会に終る。しかし万物流転といふ場合の事物の変化が、すべて弁証法的運動によるといふのは事実に反すると川合氏はいふ。

例へばエンゲルスのいふ現実の世界に於ける否定の否定の例として、一つの麦粒が芽すると麦粒は消滅して、それから発生した植物がこれに代る。これが麦粒の否定である。その植物が成長し、開花結実し、また麦粒を作る。この麦粒の成熟と同時に茎が死滅する。これが否定の否定で、また最初の麦粒が生ずるといふのであるが、これは現実には麦といふ植物が成長発展してゐるのであって、それに弁証法といふ枠を無理に当てはめたに過ぎない。また水が温度の変化により、液体から固体となり、また気体となる

ことも、水といふ物質が漸次その形を変ずるまでであつて量が突然質に變じたのではない。

### 唯物史觀説の批判

つづいて川合氏はマルクスが一八五九年に公にした『経済学批判』一八四七年に出した『哲学の貧困』についてその唯物史觀説を批判する。

マルクスは『経済学批判』の中で次の如くいふ。

人間はその生活の社会的生産に於いて、一定の必然的な、彼等の意志から独立した関係、即ち、物質的生産力のある一定の發達段階に対応するところの諸々の生産關係に入ることになる。この物質的生活の生産方法が、社会的政治的及び精神的な生活過程一般を制約する。人間の意識がその存在を決定するのではなくして、むしろ反対に人間の社会的存在がその意識を決定する。

かくてアジア的古代的封建的及び近世ブルジョア的生產關係が弁証法的發展により必然的に共產社会に移行變化してゆくことを予言し、同時に実践の學として、この予言を

実現すべきことを唯物史観に於いては説くのである。

そこで説かれることは、資本主義生産の下では無政府状態が行はれ、労働者は、資本家から労働をただどりされて、貧困の一路を辿り、中産階級は没落して、ここに共産革命が起る。マルキシズムではこの論旨の有産階級と無産階級はどこまでも矛盾関係に立つといふのである。

川合氏はこれに対し左記の様な批判を加へる。

①今日の資本主義的生産に於いては、労働者の労働給付は、もはや単純な人間の労働力の支出から成るだけでなく、既得の智識及び熟練、特性及び習慣の系列を予想してゐる。

②唯物史観の基礎となる形而上学的弁証法では、対立するものが産生されると説くだけで、如何にしてそれが産生されるかを説明できない。

③現実の生きた人間はそんな単純なものでなく、人間には営利的衝動の外に非営利的な幾多の衝動がある。要するに、社会的生産関係が人間の意識から独立して変化するといふ説は、歴史の正しい事実認識とならないわけである。

## 階級闘争説に対する批判

そして次に階級闘争説の批判にうつる。即ちマルクスによれば、従来の歴史は階級闘争の歴史である。自由民と奴隸、貴族と平民、領主と農奴、同業組合の親方と職人、即ち圧制する者と圧制される者との闘争であり、現代の社会では、有産階級と無産階級との闘ひである。この闘争説の基礎には、ヘーゲルから借用した矛盾論理があると共に、それに対して経済的基礎が与へられてゐる。それが余剰価値理論である。

マルクスが商品交換の標準となるところの労働なるものは、抽象的な人間労働であつて、分量上の差があるだけだといふが、そんな抽象的労働が現実に存するかどうか。我々が商品を要求するのは欲望を満足せしめんがためであつて、この商品の生産に要した労働のためではない。マルクスは商品交換の標準たる交換価値を考へるに当り、使用価値即ち効用性から抽象して考へなければならぬといひ、交換価値の基礎たる労働を考へる場合にも、その労働の有する特殊な性質を抽象化して考へねばならないといふが、川合氏は、現実にかかる抽象的な労働は存在しないといふ。例へばワットが蒸気機関を発



明したが、これに要した労働は、いくばくの筋肉労働に値するかといったことなど測り知るべからざるものである。資本主義の時代となつて、一國産業の發達が、社会一般の利益となつてゐる点など、有産階級と無産階級とが、マルクスの考へるように矛盾關係に立つてゐるとは考へられない。

余剩価値論、階級闘争論は労働者の資本家に対する怨恨を煽り立てる役割はするが、理論としては抽象論であつて、人間を利己的經濟人としてのみ考へる仮定にのみ立つてゐるものと川合氏は批判するのである。

要するに、マルキシズムは冷静な学的良心から出て來たものでなく、「世界を变革せん」との直接的動機から構成された階級運動の爲の一理論であつて、これを以て唯一の真理なりと考へるのは、誤れるのはなほだしきものと言はなければならぬ、と結論されてゐる。川合氏は戦時中文部省の國民精神文化研究所の囑託として、國民思想文化の興隆に努力され、終戦後もマルキシズムの批判の精神は一貫されてゐた。その著書は今尙熟読に値するものありと確信するのである。



## 五、寺田寅彦とマルキシズム

葛西順夫



寺田寅彦

寺田寅彦博士の文章の中にマルキシズムの理論を直接批判してをられる文章はみえないやうであるが、その随筆などの中にはマルキシズムに反対の気持や考へが随所に表現されてゐる。例へば「天文と文学」といふ一文の中に

此のやうな自然界の多種多様な現象の分化は、自ら此れ等の微細な差別のニュアンスに対する日本人の感覚を鋭敏にしたであらうと想像される。芭蕉が『乾坤の交は風雅のたね也』と言つたといふのにも、いくらか此の

意味がありはしないかと思はれる。実際満洲とか西比利亜とか露西亜とか、ああいったやうな単調な風土気候をもった国の住民の中から当然ニヒリズムやマルキシズムが生れても、俳句が生れようとはどうにも想像されにくいことである。

と言つてをられるところがある。このやうに日常生活や自然風物の観察から出発せられるのが博士の学問のやり方の特徴で、ニヒリズムと俳句との比較の中に物の真髓を見極められる眼光が光つてゐるやうに思ふ。

又弟子の宇田道隆氏が出征して、満洲から書き送られた和歌と俳句に対する博士の端書の返事を氏の著書の『寅彦先生閑話』で読んだことがある。

：お示しの歌と句いづれも実情にて面白く拝見、大いに御奮発、沢山お作りを希望致し候ふ。全く万葉集はよめばよむ程面白き本、国民がみな此れを読めば思想問題などは起るまじと思ひ候ふ。

とあつたが、「歌と句いづれも実情にて面白く」といふ一語の中にも博士の考へ方があり、万葉に対する博士の考へ方も矢張りそこにあることを示してゐる。

又博士は映画についても興味をもって研究してをられたが、映画雑誌などに映画批評

などを書いてをられた。その「映画雑感」の中で、『アジアの嵐』といふ映画について次のやうに書いて居られる。

……この映画は全体として見ると自分にはどうも余りおもしろくなかった。これは自分が『赤い眼鏡』を持ち合せないためかもしれないが、ソビエト映画ならば何でも誉めちぎり、さうでない映画は全部めちやくちやくにけなしつけるといふ批評家があった。併しさういふ批評はいくら読んでもおもしろくない。

と言ひ、又さらにつづけて

一頃学生の観客の多い映画館で、ニュース映画がスクリーンに現はれると観客席の暗闇から盛んな拍手が起る——ことによると自分の中にもある、一番みじめな弱点を曝露されるやうな気がして、暗闇の中に慚愧の冷汗を流した。(田中文平著『寺田寅彦の生涯』)

とあり、また

ロシア崇拜の映画人が神様のやうに担き上げて居る彼のエイゼンシュテインが日本固有芸術の中にモンタージュの真諦を発見して驚嘆すると同時に、日本の映画にはそ

れがないと云って居るのは皮肉である。——何となれば我邦の映画製作者でも批評家でも日本固有文化に関心をもって、此れに立脚して製作し批評して居るらしい人は少くとも自分の眼には殆ど見当らないからである。アメリカニズムのエロ姿に涎を流し、マルキシズムの赤旗に飛びつき、スターンバーグやクレールの糟を嘗めてゐるばかりでは、何時迄たつても日本らしい映画は出来る筈がないのである。(科学と文学、映画と国民性)

以上のやうな博士の考へ方は次の文章をみると一層はつきりして来る。

吾々が存在の光榮を有する二十世紀の前半は事によると、あらゆる時代のうちで人間が一番思ひ上つて吾々の主人であるところの天然といふものを馬鹿にしてゐるつもりで、本当は最も多く天然に馬鹿にされてゐる時代かも知れないと思はれる。天然の玄関をちらりとぞいただけでもう悉く天然を征服した気持になつてゐるやうである。科学者は落ちついて自然を見もしないで長たらしい数式を並べ、画家はろくに自然を見もしないで、徒らに汚らしい絵具を塗り、思想家は周囲の人間すらもよく見ないで独りぎめのイデオロギーを展開し、さうして大衆は自分の皮膚の色もみないで

之に雷同し、さうして横文字のお題目を唱へてゐる。併しもう一步科学が進めば事情は恐らく一変するであらう。其の時は吾々は少し謙遜な心持ちで自然と人間を熟視し、さうして本気で真面目に落ちついて自然と人間から物を教はる気になるであらう。さうなれば現在の色々なイズムの名によって呼ばれる盲目的なるファナチズムの嵐は収まって本当の科学的なユートピアの真如の月を眺める宵が来るかもしれない。

(蒸発皿)

と言つて居られるが、博士のものに対する考へ方のすべてはここに表現されてゐて、これ以上何もつけ加へる必要もないやうに思はれるが、ここでもう少し博士の科学そのものに対する考へを瞥見してみようと思ふ。

「科学と文学」といふ論文の中で博士は、

或る人は科学を以て現実に即したものと考へ、芸術の大部分は想像或は理想に關したものと考へるかも知れないが、此の區別は余り明白なものではない。広い意味に於ける仮説なしには科学は成立し得ないと同様に、厳密な意味で現実を離れた想像は不可能であらう。科学者の組み立てた科学的系統は畢竟するに人間の頭脳の中に築き上

げ造り出した建築物製作品であつて、現実其の物でない事は哲学者を俟たず共明白な事である。又一方に於て芸術家の製作物は如何に空想的のものでも或意味に於て皆現実の表現であつて天然の方則の記述でなければならぬ。もう少し進んで科学は客観的、芸術は主観的のものであるといふ人もあらう。しかし此れもさう簡単な言葉で区別の出来るわけではない。万人に普遍であるといふ意味での客観性といふ事は必しも科学の全部には通用しない。科学が進歩するにつれて其取扱ふ各種の概念は段々吾人の五官と遠ざかつて来る。従つて普通人間の客観とは次第に縁の遠いものになり、云はば科学者といふ特殊な人間の主観になつて来るやうな傾向がある。(科学と文学―科学者と芸術家)

と現代科学が抽象的観念的で、普通の人が思つてゐるやうに客観的ではなく却つて主観的であることを明らかにすると共に、その科学の抽象的法則のもつ有用性に引き廻はされる欠陥を批判して

従来用ひ古した解析的方法に引かかるとかかるやうな現象は誰も彼も手をつけて研究するが、従来の方法だけでは手に了へないやうな現象は假令眼前に富士山のやうに聳えて

ゐても一切見ぬふりをしてゐるといふ傾向がある。(触媒)

と言ひ、又現実そのものの観察から入らず、数式にのみ頼る理論に対して、

浅薄な理論程つまらないものはない。理論には五分もすぎなく、数学の運算に一点の誤謬はなくてもそこに取扱はれて居る天然はしんこ細工の天然である。友禪の裾模様には現はれたネーチュアである。底の知れない真の本体は却って此の為に覆ひ隠される。(統冬彦集)

と言はれてゐるが、寺田博士の物理学を世に寺田物理学といふ所以は以上のやうな考へ方によるものであらう。

博士の二百以上に余る物理学の論文の題目を素人の我々が見ただけでも、「金平糖の研究」「網に対する水の抵抗」「空中電気と植物の生長の関係」と言ふ如く、日常生活の中にみられる具体的な問題、数学的解析に堪へない直観を必要とするやうな複雑な対象に対する興味から研究が進められたものであることがわかるやうに思はれる。博士はそれについて、

西洋の学者の掘り散らした跡へ遙々後ればせに鉱石の缺けらを捜しに行くのもいい



が、吾々の脚下に埋れてゐる宝をも忘れてはならないと思ふ。(続冬彦集)

と言ひ、科学を研究する態度については、

尤も此様な直観的の傑作は科学者にとつては容易に期して出来るものではない。其れを得る迄は不断の忠実な努力が必要である。勉めて自然に接触して事実の細査に執着しなければならぬ。常人が見逃すやうな機微の現象に注意して先づ其の正しいスケッチを取るのが大切である。此様にして一見甚だつまらぬ様な事象に没頭して居る間に突然大きな考が閃いて来る事もあるであらう。(科学と文学―科学者と芸術家)

以上の如く寺田寅彦博士の考は、科学の抽象的法則が、いかなる事実から生れて来たかを考へず、それをいかなる場合にも当て嵌めようとする弊害を厳しく批判され自然の忠実な観察を第一とされたものであらう。

寺田寅彦博士が尊敬する人物として挙げた正岡子規はその芸術の基礎に写生論を説いたが、自然人生の自らなる展開に随順して常に物事を中心を把握する力を有してゐた。俳句や随筆と科学の研究にすぐれた功績を残した博士は、早くから科学と文学の間に、人間の精神の働きのの中に同じ働きのあることを述べて居られるが、この考は子規の写生

論から大いに影響を受けて居られるであらう。

論理はすべて成立する。然し自然の体験なき論理はすべて空しいものである。徒らに科学的真理を以て人を威す如く「マルキシズムは科学ですから」と言ひ、いかにも自分の思想が真理であり、人の思想が誤りであるといはんばかりに「反動」といふ特別用語を作つて他をきめつけるやうにマルキシズムを称する人々は、博士の科学的精神からみれば、それこそ固定された観念論者であり、科学の迷信者なのである。

又自らの思想を科学的法則なりとして、古代の神話や伝説を未開時代の迷信と笑ふものは博士の「化物の進化」と題する論文に注意すべきであらう。

化物がないと思ふのは却つて本当の迷信である。宇宙は永久に怪異に充ちて居る。あらゆる科学の書物は百鬼夜行絵巻物である。それを繙いて其の怪異に戦慄する心がなくなれば、もう科学は死んでしまふのである。

私は時々密に想ふ事がある。今の世に最も多く神秘の世界に出入するものは世間から物質科学者と呼ぶる科学研究者であるまいか。神秘的あらゆるものは宗教の領域を去つて何時の間にか科学の国に移つてしまつたのではあるまいか。(万華鏡)

科学教育は矢張昔の化物教育の如くすべきものではないか。法律の条文を暗記させるやうに教へ込むべきものではなくて、自然の不思議への憧憬を吹き込む事が第一義ではあるまいか。(万華鏡)

## 六、和辻哲郎とマルキシズム

古川 哲史



和 辻 哲 郎

回想するに、先師和辻哲郎教授ははげしい反共の思想家、反共の哲学者であったが、そのはげしさには幾分感情的なものがあつた。いつか、東大の研究室で、そのころ読んだ河上肇博士の『自伝』から受けた感銘を話し、その人柄を敬慕するやうなことをわたしが言ふと、教授はもつてのほかだといふ顔をされたことが思ひ出される。これには、教授が京都大学に就職された直後、学生検挙事件についての

所感を京都帝大新聞の新聞委員から求められ、いちおうは断はったのに、「文学部の先生方は皆お書きになりますから」といふ口実で再応の交渉を受け、そのとき教授はまだ新米で学内の事情にも通ぜず、帝大新聞の性質をも知らなかったため、「教師の義務として何かを述べなくてはならないのだと早合点して」(『面とベルツナ』跋)書かれた『学生検挙事件所感』といふ感想文がさまざまの波紋をひきおこし、当時京都大学経済学部の人気教授であった河上博士からは「詳細なまた手きびしい反駁」を受け、何回か応酬をしなくてはならないにが経験の記憶がからまってゐたであらう。この論争の過程において、教授は「社会科学に関しては全くの痴呆である」といふ悪罵にもさらされなくてはならなかったが、おそらくこの一件以後、教授は反共の意識を感情的にまで強くされたやうに見える。では、その『学生検挙事件』といふ感想文はどういふ内容のものであったか。

## 二

『学生検挙事件所感』といふ感想文は、死んだ安成貞雄といふ教授の友人がある文学

的な会合の席で、社会主義者の内にロシアの暴動学の本を読んで東京で暴動を起す場合の戦略を研究してゐる者があるといふ話をしたといふ回想からはじまつてゐる。大地震のとき、どこから出たともなくあの大火事は社会主義者と朝鮮人の所為だといふ噂が立つたが、これはまっかな嘘で、暴動の戦略のごときは鬱憤をやる空想でしかなかつたらしい。今度暴露した事件が青年らしい空想に過ぎぬか、あるいは具体的な実行の着手であつたか、「自分には判断がつかない。恐らく双方の混合ではなかつたかと思ふ」と教授は想像し、「それについて自分は社会科学の『研究』があくまで鬱憤をやる空想の類と離されなければならぬことを感ずる」といふ立場を明確にしてゐる。それはなぜかといへば、階級意識の昂進は破壊的手段に対する無反省な共鳴を呼び起すからで、法律さへも、反対階級の作つたものであるから認めぬといふ態度は、あきらかに暴力的である。国法に対する尊敬のゆゑに不正な刑罰を平然として受けたソクラテスの態度こそわれわれの模範となるべきで、マルクスが暴力革命主義を取つたといふことそれ自身が批判されなくてはならない。

したがってロシアにおける暴力革命も、なんらわれわれの模範とするに足りない。」

ただ壊せばよい、今よりもよくなる」とは社会主義者の放言するところであるが、しかし人道的立場より見て、革命後現在に至るまでのロシアが革命前のロシアより好かつたとは何によって立証できるか。ロシアの革命はむしろ人間が如何に過失を犯し易いものであるかの巨大な例証で、破壊手段それ自身の含む矛盾の例証にはかならぬのである。

現在の社会が改造を要するものであることは、教授も疑つてゐない。ただ問題は、普通選挙法のやうな手段によって徐々に進むべきか、あるいは暴力革命主義によらなくてはならないか、に存する。教授は、徐々にたる改造の手段によって次のジェネレーションのために経済上公正な社会を作らうとする着実な道を選ぶか、ロシアにおいて行はれた暴力革命主義的手段をそのまま模倣するために研究するのは「研究」の名に価せず、「社会科学」の「研究」を標榜して実はレニニズムの信仰の下に階級闘争の戦略を講ずるのであるならば、科学あるいは研究といふ語は妄用である、とさう言ひきつてゐる。

## 三

右のやうな主旨の感想文が大正十五年十月に京都帝大新聞に出ると、河上博士は「常



識的な無批判的な非難を私共の学問の上に多量に浴びせかけられた」として手きびしい反駁をした。それに対して同年十二月、博士の個人雑誌である『社会問題研究』に教授は「河上博士に答ふ」と題するかなり長文の積明文を掲載した。その内容は、まづ、

(一)安成貞夫が社会主義者の内にロシアの暴動学の本を読んで東京で暴動を起す場合の戦略を研究してゐる者があると話したといふ言葉を、博士は「社会科学研究会員の内にはロシアの暴動学の本を読んで京都で暴動を起す場合の戦略を研究してゐた者がある」といふ意味に解せられると言つてゐるが、まことに意外であること。

(二)ロシアの暴動学の本とは何びとの著した何といふ標題の本であるかを博士は詰問し、「レーニンその他の人々の著作を指してゐるのかも知れない」といふ嫌疑を提出してゐるが、博士の読み方には独断的なところがあること。

(三)「ただ壊せばよい、今よりはよくなる」と社会主義者は放言してゐるとあるのに対して「私共は未だ曾てかかる放言をしてゐるやうな社会主義者に出逢つたことはありません」と博士は抗議してゐるが、堺枯川の論文でそのやうな放言を見たことがあり、リーブクネヒト、スパルゴ、レーニンなどの言葉のうちに右のやうな言葉が全然ないと

は言へない。博士自身の発言にも同じことが繰り返されてゐる。

四検査された学生諸君が暴動の具体的な実行に着手してゐたらしいと和辻教授は推測したと博士は言つてゐるが、これは承引し得ないところである。右の感想文は、学生の所為には僅かに一言触れたのみで、あとはそれに関連する筆者自身の感想をのべてゐるのである。それを学生の所為に対する批評のごとく取られるのは迷惑であること。

感想文の主題とは関係の薄い右の四項目について釈明したあと、感想文の主題についての博士の批評に対する釈明にはいつてゐるが、感想文の主題はレーニン主義に盲目的に心酔して行動するのは「研究」と呼ばるべきものでないといふことであつた。それを博士は「マルキシズム、レニニズムに対する批評」と見てゐるが、短い感想文でそんな大きい批評ができるはずはない。しかし、マルクスの世界観たる唯物的弁証法が研究対象となつても、それには不思議はないではないか。

さて唯物的弁証法は唯心的弁証法から出たものであるが、この弁証的発展は、当然、さらにおのれを止揚してその綜合に向はねばならぬと思はれ、唯物弁証法が唯一の正しい研究方法ではあり得ないはずである。かかる懐疑の立場に立つて唯物弁証法の真理性

を問題とするものが唯物弁証法を唯一の正しい研究方法として信奉する人々に、その信奉は自由な研究の名に値しないと言ふのは当然ではないか。

かりに唯物弁証法を信奉するのが盲目的心酔でないとしても、なほ問題が残る。和辻教授の感想文は、ロシアにおける暴力革命をそのまま模倣しようとすることは社会科学の自由研究ではないといふことを問題としてゐるが、デボーリンの『レーニンの弁証法』によれば、レーニンも論理的弁証法と実践的弁証法とを区別してゐる。レーニンの帝国主義の研究は、唯物弁証法を方法として現実社会を分析したといふ意味で社会科学的研究であるが、レーニンの指導によって起つたロシア革命そのものは、実践的弁証法すなはち階級闘争の実践であつて、科学的研究と言はるべきものではない。したがつてレーニンに学んで唯物弁証法を用ひ日本の現実社会を分析する仕事は、たとへその方法に疑義があつても、なほ一つの科学的研究であらう。しかしレーニンの指導下に日本においてロシア風の過激な階級闘争の戦士として働くことは、科学的研究と呼ぶべきではないであらう。さうなら、教授が階級闘争の実践は研究ではないと言つたのが、どうして博士の学問に無批判的な非難を浴せたことになるのであらうか。

## 四

右のやうな河上博士とのやりとりによって、和辻教授は「社会科学に関しては全くの痴呆である」といふやうな罵声を受けたが、当時京大図書館長であった新村出博士は、図書館の前を通りかかった教授を「あ、いい処でお会ひした。一寸私の室まで」と呼びとめ、改まって館長室に対坐すると、「正に我々が言はうと思つてゐた事をよく書いて下さった」と礼を言はれたといふ。(河野与一「和辻さんの思ひ出」『図書』昭和三十六年二月号)

さういふ支持者も、むろん、あつたわけであるが、新聞委員の「文学部の先生方は皆お書きになりますから」といふ口に乗って書いたところ、新聞が出てみると文学部で書いたのは教授だけであつたといふやうなこともあつて、早合点すぎたのを教授は悔まれたのではないかと思ふが、それだけにまた、いよいよ感情的にもマルキシズムがいやになつたといふことも考へられる。

しかし河上博士との論争でも、マルキシズムやレニニズムの研究は必要であると言明してゐるとほり、教授は三十八歳から三十九歳までの文部省在外研究員時代にもその方

面の書物を読んでゐた。亀井高孝氏の回想によると、

「旅行中でもパリやローマでの少し長い滞在はペンションをかりて別室に寝起きしたが、旅をつづけて毎日のやうにホテルをかへる時はしぜん同室のことが多かった。私は不眠症に悩まされてゐたし疲れを厭って、食後の街の散歩や見物をしない時、ひとり早寝したが、和辻君は手紙を認めたり書見を怠らなかつた。それらの中で専門書を別にして旅の間むしろ熱心に目をさらしてゐたのは、レーニンやラデックなど共産主義のもの、他の時にはムツソリーニのファシズムの著作などヨーロッパ社会の動向に關するものであつて、専門に近い私の方が不勉強で逆に読後感を聴かされた」。(思ひ出の中から)〔和辻照編『和辻哲郎の思ひ出』所収〕

さういふ勉強の成果の一端は、やがて、『人間の学としての倫理学』(四十五歳)、『続日本精神史研究』(四十六歳)、『風土』(四十六歳)などの著述にぞくぞく現れてくるが、ここには『人間の学として倫理学』の「一 マルクスの人間存在」といふ章を垣間見てみよう。

## 五

教授によれば、倫理学は自然の学でなく人間の学である。人間は自然を離れてはありえないが、しかし自然が身体を介してそこから抽出せられうるやうな、また自然が自然として対象化せられうるやうな地盤であり、かかる意味における人間が倫理学の問題である。さうしてかかる人間が唯物史観における人間観によっても、実際には承認せられてゐる。マルクスは、「人」を自然対象とする唯物論を斥け、活動実践としての「人間」の主体的存在を強調した。マルクスにおける社会の強調は、人を主体的人間に転ずることにはかならなかった。

右の見地からマルクスの唯物史観の根本テーゼを見れば、それが「人間存在」を人の意識の根柢に置く考へであることがただちに明らかになる。すなはち意識が存在を規定するのではなく、存在が意識を決定するといはれるときの存在とはけっして単なる自然としての存在ではなくして、生産力と生産関係とからなる人間の社会的な存在である。この存在がただに経済面に即しててではなく、全面的に展開せられるならば唯物史観も



人間の学としての倫理学たらざるを得ない。

マルクスの仕事は、人間存在において特に「社会」の契機をのみ捉へ、その解剖学を経済学として遂行することにあつた。そこで問題は、人間存在がただ経済的なるもののみ尽くされ得るか、また経済的側面からのみ見られた人間存在が果して法や道德の根柢たり得るか、といふ点に集中して来る。社会の構造の最も重要な点は、人がその欲望の満足のために必ず共同に労働し、したがって生産関係にはいり込んで来るといふことにある。ところでこのやうな人のあいだの関係は、ただ欲望の満足のためのみであつて、それ以上の根柢を持たないであらうか。マルクスは人と動物との別を意義深くも「間柄」によって明らかにした。動物もまた欲望の満足を目ざして動いてゐる。しかし他との間柄を作るためにあるふるまひをするといふことはしない。ところが人は間柄を作り、言語と意識を發展せしめる。したがって人間存在は、欲望の満足からのみ説かれ得ない「間柄」である。またそのゆゑに物質的生産が社会的生産であり、一般に生産的な間柄が形成せられ得るのである。しかれば人間存在の最も根柢的なものは、自他のあいだに間柄が形成せられること、すなはち人があるふるまひをする (sich verhalten) といふこ



とである。ヘーゲルが人倫の直接態において捉へようとしたのはこの点であった。和辻教授によれば、ヘーゲルがそれを「家族」として捉へたのは偏狭であったが、人間存在において経済的なるものよりも更に深い層のあることが、そこには確保されてゐる。フオイエルバハが我と汝の関係として把握したのもまたその点であった。マルクスの生産関係としての社会は、実は暗黙裡にかかる「間柄」を前提としてゐるのである。

## 六

以上のやうにして和辻教授の「間柄」の倫理学は、マルクスの唯物史観をいつの間にか自家薬籠中のものとしてとかしこんでしまふ。河野与一氏は、さきに引いた「和辻さんの思ひ出」といふ文章の中で、『風土』の中に西洋に虫がゐないとか雑草がないとか、また地中海の浜辺は磯臭くないとか書いてあるが、これらは皆事実とは些か違う。それで岡本信二郎氏が「あれは詩だね」と評したさうであるが、これは揚足取りではあるまいとして、「和辻さんは抽象的な思想でも具体的な作品でも自分の中に取り入れて好みの庭石を眺めるやうに楽しんでゐたのである」と見てをられるが、言ひ得てなかな

か妙である。和辻教授にとってはマルクスも庭石の一つにしか過ぎなかつたわけであるが、ただこの場合は好みの庭石を眺めるやうに楽しんでゐたかは疑問である。河上博士を敬慕するやうなことを言つて教授のヒンシュクを買つた体験をわたしは先に披露したが、河上博士も教授にとつて庭石の一つではあり得ても、好みものではなかつたのではあるまいか。

## 七、佐野学のマルキシズム批判

川井修治



佐野学

### 略歴

明治二十七年大分県に生まれる。東大政治科卒、在学中から社会主義運動に参加。大正十一年早大講師となり、日本共産党の創立に参画、中央委員となる。翌年早大軍教事件で捜査を受け、一時ソ連に亡命。昭和二年日本共産党中央執行委員長に推され、同時にコミンテルン常任執行委員となる。昭和四年春上海で検挙され、爾来在獄十四年余。昭和八年鍋山貞親と共に転向声明を発表し、大きな反響を呼ぶ。昭和十八年減刑により出獄。戦後早大教授に復職、日本政治経済研究所を創立して反共運動を推進すると共に、学問の上では東洋および日本の社会と思想の究明に精進し、数々の業績を残した。昭和二十八年五十九歳で没。

著書 『ロシア経済史』『唯物史観批判』『日本古代史論』『清朝社会史』『殷周革命』等。没後

『佐野学著作集』五巻が公刊された。

既述の略歴が示すやうに、佐野学は、戦前においては非合法期の日本共産党のリーダーとして活躍、在獄中にその非に目覚めて転向。戦後は共産主義反対の立場から日本独自の再建方策を求めて奮闘するといふ、波瀾にみちた生涯を送った人である。一口に、「転向」と言ふのは簡単であるが、自分が半生をかけた思想・哲学を自らの意志で棄て去るといふことは、想像を絶する苦悩ときびしい自己超克を要するものと思はれる。この試練を見事に乗り越えた佐野学の「共産主義批判」は、一般の学者達の単に思索によるそれとは違って、まさに血のにじんだ自己批判であり、自己告白であることを見過してはならない。彼の共産主義批判は、その諸著作を一貫するテーマであり、もとより多岐・多量にのぼるが、ここでは紙幅の制約もあり、転向の動機と唯物史観批判の要点とを、『獄中記』および『唯物史観批判』の中から摘記して紹介したい。

「私が共産党を去った理由を数へてみれば次の如くである。

第一、外力に依存する運動の非を悟ったことである。共産党は第三インタナショナル本部の日本支部だから、本部の命令に絶対拘束される。しかも本部の命令は日本に適合せず、一の極端から他の極端に転ずることが屢々あってひどく困惑させられた。第三インタナショナルがソ連擁護の機関化することは当時から歴然としてゐた。外国依存から外国の手先へ。これは堪へられることではない。……

第二、共産党の依つて立つ超国家的国際主義に満足し得なくなつて、民族及び国家の社会主義革命における新しい意義を発見したことも私を共産党から去らしめた理由である。……民族は人間にとって強い感情的基礎であるのみならず、政治経済上における現実の能動的要素であり、又国家はマルクス主義の教えるやうに単なる階級支配機関でなく、民族の社会生活の全体的調整者である。……

第三、私は共産党の階級至上主義ないしプロレタリア独裁主義に満足しえなくなったから党を去った。……階級だけを至上絶対とすることは歴史の事実を主観的希望で押しやがめたもので、殊に民族といふ生きた力を勝手に除去するから、結局抽象的な観念論

となる。……

第四、共産党といふ党形態のなかではたうてい党内デモクラシーの発達の可能性のないことを悟ったのも私の離党理由である。……自由を基礎にしない社会主義は一の変態的な全体主義となる。

第五、共産党の戦術における非人間的な謀略主義の害悪を悟ったことも脱党理由の一つである。目的のために手段を問はざるマキャヴェリズムの現代における代表物は共産党で、ウソや中傷で人を傷け、大衆を欺瞞し、労働組合を踏み台にする。……共産黨員にあらざるものに対してはどんなトリックを用ひてもよい。私も共産黨員だったときにそんなこともやったが、その非人間的なやり方に深い嫌悪をもつやうになった。」（佐野学著作集第一巻『獄中記』六五頁―六八頁）

## 二、『唯物史観批判』から

マルクスの予言の不適中

「マルクスは幾分子言者の風を備へた天才的頭脳であつたと思ふ。……とはいへ、最

も手近な、最も具体的な、従つて最も重要な資本主義社会の成行に関する予言は大抵当らないのである。何故にさうであつたか。憤怒や憎嫉の余りに烈しい熱狂的性情や、短かな希望の混入や、直観力を殺ぐ主知主義や、真空法則的説謬などと共に、唯物史観や階級至上主義などの立脚地が、彼の予言者としての力を奪ひ去つたのである。……

ここでマルクスの予言の不中であつた数項を指摘する。……

(1) 階級対立について。——マルクスに従へば資本主義の発展と共に階級はブルジョアジーとプロレタリアートの基本対立に単純化され、他の諸階級は右の二者いづれかの附加物となり、独自の意味を失ふ筈であつた。然るに今日までの経過において農民はなほ依然として独自の階級たるを失はない。小ブルジョアは動搖的ではあるが、而も根強く社会の各方面に亘つて存在し、……イデオロギーのヘゲモニーは小ブルジョアたる知識人がにぎつてゐる。技師や経営事務者などの新中産階級が生産過程に演ずる役割は大きくなつてゐる。階級が一切の規定者となるために民族が意義を失ふといふ見透しも、余りに抽象的な、虫のよい観測であつた。

(2) 資本の蓄積について。——資本論によると、蓄積即ち労働者から搾取した剰余



価値を新資本に転化する過程が進行するにつれて、不変資本部分の割合の大きくなるに反し、可変資本部分が減少し、之によって利潤率が低下し、零となり、ここから資本主義が自動的に崩壊するといふ結論である。これは政治上の日和見主義を導き出すのみならず、抽象的に思考された論理であつて、具体的な現実世界では資本は何等かの新投資範囲を発見し、利潤率が零に近づく如き兆候は見えてゐない。……

(3) 資本の集中について。——略

(4) 貧困増大説について。——マルクスは、資本の蓄積に反比例して労働者の地位はますます悪化し、その貧困、奴隷状態、無知、道德的頹廢が相對的に増大すると説いてゐる。その論理過程は非常に巧妙であるが、陰惨にして抽象的な思弁たるを免れぬ。十九世紀前半乃至中葉の労働者の悲惨なる状態に比すれば、今日の労働者の生活条件は遙かによいのみならず、自覺と組織力を具へた主体性を獲得してゐる。

(5) 恐慌による破滅の説について。——恐慌を通じて資本主義は破滅するのだといふのもマルクス主義の重要な理論だ。マルクスは、一八四六—四八年におけるヨーロッパの革命の波と、それがその時期におこつた恐慌に刺戟されたのを目撃し、そこから新

社会の発生には恐慌が必然に伴ふ……といふ考へを終生捨てなかつた。十九世紀後半以来、恐慌は幾去来したがそれを機会として革命の起ることが無かつたから、マルクス主義者は其度言訳せねばならなかつた。……恐慌の原因、形態、影響に関するマルクスの説明は論理一貫してあるけれど、現実の具体的事情にあてはまらず、且つマルクスの知つてゐた一八八〇年前の恐慌と、それ以後の全く資本主義化した社会の恐慌とは自ら差違がある。……

(6) 小農破滅の説について——略

(7) 階級消滅及び国家死滅の予言について。——これはマルクス主義の最大の予言だ。……しかしこの予言の偽りなることは日々の事実が証明している。階級及び国家は亡びるところか、益々精力を發揮してをる。将来の階級は旧来の搾取的機能の代りに、新しい労働組織形態となり、国家は社会生活の最高の集中者、組織者としての機能を示すであらう。……

(8) 暴力革命について。——マルクス主義によれば、……ブルジョア国家よりプロレタリア国家への転化は暴力革命によりてのみ可能であるといふ。……しかし十九世紀

後半よりヨーロッパの革命の歴史は、革命の形式が内乱、暴動、市街戦などではなくなつたことを示してゐる。……革命における力の意義は否定すべくもない。ただマルクス主義のいふが如き素朴なものは時代遅れだ。……」(佐野学著作集第一卷『唯物史観批判』一三九頁—一四五頁)

### マルクスの歴史的必然性概念の主要誤謬

「この思想の誤謬を数へる。

第一にマルクスの歴史的必然性の概念は人間の能動を否定し、歴史における人間の創造活動の価値を極端に縮小するものだ。……マルクス主義における——少くとも唯物史観における——経済の概念は、人間の意志や目的から独立した、抽象的な形而上学的概念に近い。……マルクスが封建社会末期や資本主義社会における現実的諸要因を見事に分析した功績は十分承認せられる。しかし彼がこれを歴史哲学——唯物史観——に組み立てるとなると、現実には潑刺たる力を失ひ、宿命的な、非活動的な、自動崩壊論が出てくる。……

第二にこの必然論に従へば、社会主義は全生命を投ずるに足るべき意識的目的でなく  
なり、この実現のために結合する政党は断乎たる行動意志を必要としないものとなる。

……社会が真に危機状態を呈し人間本然の行動が必要となつて来れば、必然論は忽ち極  
枯化し、如何なる社会主義者も経済の自然発達なるもので自らを慰めることが、大なる  
痴愚であることを悟らざるを得ぬ。……行動を要求する時代の新しい任務は決して必然  
論によつて答へられない。……

第三にこの必然論は何等の倫理的動機なしに社会主義が実現すると云ふのである。

……マルクスもエンゲルスもむしろ非倫理的であることを科学的だと考へ、これを社会  
主義者としての態度だと考へてゐたのである。……しかしヨリ善き、ヨリ正しき状態を  
獲得せんとする倫理的動機なくして、人間の進歩は創造せられない。……

第四にマルクス主義の必然論は歴史における真の必然性をゆがめ、歴史の基本問題た  
る自然と必然の双関に関して誤った解釈にみちびいてゆくのである。……自然における  
必然性は純粹に因果性から成立するに反し、歴史における必然性は目的性の媒介を持  
ち、換言すれば個々の目的性から構成されて全体を成すところの必然性である。然るに

マルクス、エンゲルスにあっては自然必然性はそのまゝ歴史的必然性であり、自然弁証法だ。かかる目的性の完全な無視は、必然と自由との問題について正しい解決を生み出すことを不可能ならしめる。……

第五にマルクス主義の歴史的必然の観念は本質的に機械論を含んでゐる。……古来の哲学上の機械論の根本特徴たるところの、あらゆる生成変化から目的要因を全く除去し自然物理的因果関係によって対象を考察するといふことを立派に具へてゐる。……

第六にそれは宿命論へと陥って行く。資本主義の崩壊、社会主義の実現の予想は科学的精確をもった客観的現実の反映であると云ひ、上部構造の変化は下部構造の変化によつて自然必然的に決定されると云ふのであるから、人間努力の至上性は抹殺されてゐる。ここから自分の行為も予め運命的に定められてゐるといふ、徹底的な自己不信があらはれる。……

第七にそれはまた歴史認識において客観主義的誤謬を生ずる。……個人は最初から問題とならず、高々、人間集団が経済の機械的な代表者として取扱はれるにすぎない。又歴史上の諸事件は自然科学における如く純經驗的に観察されるだけで、その精神的背景

は問題とせられない。目に見える現象だけが取扱はれる。……しかし歴史は人間の創造の世界であって、歴史上の諸事件は経済其他の物質的条件を媒介としつつも、その最深の内容は精神的なものである。この精神的勝利の過程を己が心に復現し追体験することが歴史の基本的な認識方法である。歴史に対する機械論的な物質的な客観主義的方法から真の歴史認識は生れない。……」(佐野学著作集第一卷『唯物史観批判』二二四頁―二二二頁)

## 八、矢内原忠雄のマルキシズム批判

梶村 昇



矢内原 忠 雄

矢内原忠雄は明治二十六年（一八九三）、愛媛県今治市郊外の松木で、代々医者をやとしてゐる家に生れた。

中学を神戸一中で過し、その後、一高を経て、大正六年（一九一七）東大法科を卒業し、四国の鉱山に就職した。一高時代に内村鑑三、新渡戸稲造の影響を受けたことが、キリスト者としての彼の生涯を決定したといへる。大正八年（一九一九）、東大で経済学部が独立し、ちょうど植民政務を担当してゐた新渡戸が国際連盟の事務次長としてジュネーブに赴任したため、彼は呼び返されて経済



学部助教授として新渡戸の後を継いだ。当時、経済学部には高野岩三郎（一八七一—一九四九）門下の櫛田民蔵、大内兵衛、権田保之助、細川嘉六などがをり、そこで「自然に広い意味でのマルクス主義的な学問の気風に錬磨された」と言っている。（『私の歩んできた道』矢内原忠雄全集第二十六巻）しかし、彼らとの討論の中で、どうしても理解できないものがあった、と言って次のやうに述べてゐる。

経済学というものは、社会を客観的に観察し分析する。そういう分析と観察とに基づく理論であるから、もしその労働価値説というのが正しい学説であるとするならば、世界観として唯物史観をとる人でも、とらない人でも、そのことについては変りはない。たとえば、ニュートンの引力の法則というものを一つの自然科学的法則として理論的に正しいと証明されるとするならば、無神論者でも引力の法則に対しては承認するだろう。（中略）社会科学においても、社会についての科学的な知識と、その人の人生観なり世界観なりは必ずしも結びつくものではないだろう。（同上書）と。これに対し、彼らから「私の考えは不徹底であると言って、ずいぶん批判された」「しかし今でも私の考えは正しかったんじゃないかというふうに思います」と述べてゐる。「今

でも」とは亡くなる四年前の昭和三十二年のことであるから、彼はほとんど最後までこの考へ方の上に立ってゐたといふことであらう。

しかし、彼自身、自分の社会科学の研究過程を振り返つてみて、自分の熱烈なキリスト教への信仰がそれと全く無関係なものであつた、と断言できるのであらうか。社会科学の研究とは、本来研究者の人生観世界観と切り離しては考へられないはずのものである。事実彼は「マルクス主義は人生観世界観の統一的思想体系である」(『マルクス主義とキリスト教』全集第十六巻)と述べてゐる。それにも拘らず、マルクスが「阿片」といつて否定した宗教を信じながら、部分的にマルクス主義を認めるといふことは「不徹底」のそしりを免れないものと思はれるし、逆にそれは彼のマルクス主義批判の限界を示したものといはなくてはなるまい。

昭和六年十一月、彼は『マルクス主義とキリスト教』(全集第十六巻所収)といふ本を書いて、名古屋の一粒社から出版した。その後、数点マルクス主義批判の論考を書いてはゐるが、これが最もよくまとまつたものといへる。その「はしがき」に「本書は基督者に向つてマルクス主義の何たるかを説明し、之に対して信仰の堅立を勧める一助たらし

めんと欲して執筆した」と書いてあるのをみてもわかるやうに、あくまでもキリスト者としての批判であり、総合的学術的批判ではない。ここに彼のマルクス主義批判の特色があり、それがまたもう一つの限界を示すものとなつてゐる。

彼は本書の冒頭において、キリスト教は神を信じ、マルクス主義は無神論唯物論であるから絶対に相容れない(14・全集第十六巻のページ、以下数字のみ)と断じ、キリスト者の生活は「神に対しては感謝がある。物質的生産力に対しては感謝がありえない。しかし感謝なきところ何の人生ぞや」「マルクス主義偉なりといへども、これを奉ずる誰一人にも魂の平安衷心の歡喜を与へない」(17)と述べ、以下マルクス主義の主なる項目について解説し、それに批判を加へてゐる。

唯物史観に対する批判はその中でも最も鋭鋒のするどいものがある。

第一に唯物史観は物質的条件が歴史の原動力なりといふが、物質的条件なるものは歴史発展の条件にして原動力ではない。所与であつて創造ではない。一定の物質的条件を発生せしめかつその発展に秩序と法則性あらしむるためには統制的意志が存在しなければならぬ。意志は人格であり、超個人的人格即ち神が歴史の原動力たるもの

である。第二に、唯物史観は階級闘争の終結によって人類社会完成化が行はれるといふが、階級の撤廃をもって直ちに富の無限の生産ができる保障はなく、社会の富が有限ならば人々の間にこれが分配に関する争闘が起りて再び階級を成立せしめるであらう。またかりに経済的に豊富なる社会が成立しても人類の自由と平安とは物質的財産のみにはよらないのである。(22)

と述べ、彼らの言ふところは

人間は根本的に動物だといふことである。食ひ飲み着ること、そのために社会を成すこと、社会を成して食ひ飲み着ること、それが人間の人間たる根本的性質だといふのである。かれらによればヨハネ伝一章一節は「太初に腹あり」と改訳せられねばならない。唯物史観はいかに粉飾するとも唯物論である。唯物史観の根本原理をばキリスト教と調和せしむることは到底不可能である。(94)

人の生活の最も根本的なるものが衣食にありとせば、人の尊厳はいづこにあるか。衣食なければ人は生存しないけれども、思惟し詩作し神を拝する以前にまづ衣食するとは限らない。人の尊厳感とは動物と共通なる色食の本能的事実よりは来らない。それは

神より賦与せられたる靈性に基づく。(95)と。しかし、弁証法については「それは疑ひもなく自然および歴史の理解について真実に徹したる方法論である」(100)と全面的に肯定し、ただマルクス主義は「唯物」弁証法たる点が問題であるとしてゐる。たとへば、「マルクス主義は生命の弁証法をば死をもって総合止揚し、キリスト教は復活の生命をもって総合止揚する」(106)と述べてゐる。

階級闘争については「マルクス主義は階級的に支配階級に向つて闘争せよといふ。それは階級利益の上に立つ。キリスト教は個人的にもせよ、団体的にもせよ、すべての悪に向つて闘争せよといふ。それは神の義の上に立つ」(88)と言ふ。

革命論についても、社会改革の必要は認めるけれども、彼らの言ふやうに、プロレタリアの独裁↓国家の自然消滅↓自由社会の実現といふ主張は空想的非論理であり、「すべての革命の根源は心の革命、たましひの新生であり、神の国の実現はキリスト再臨によりてのみ実現する」(116)と述べてゐる。そして「キリスト者とマルクス主義者とは社会改革の目的のために共同戦線に立ちうるか」と疑問を呈し「断じていな。理由は明白、マルクス主義は神を認めないからである」「マルクス主義者は純情にして理想に燃

ゆるキリスト教青年をばかれらの陣営に獲得せんがために時に羊の面を被りて誘惑する」(Ⅱ)と強い姿勢を示し、今日のキリスト教界を予見したやうな警告を発してゐる。

このほか本書は宗教、真理、道徳、自由等の項目についてマルクス主義批判を展開してゐるが、その説くところは人生観世界観上でのキリスト教との対決であつて、キリスト者矢内原忠雄のマルクス主義批判の一語につきるものである。

昭和十二年(一九三七)十二月、反戦思想家として弾圧を受け東大を辞職、その後は個人雑誌「嘉信」を発行して伝道に専心、戦後、東大に復帰、南原繁の後を継いで総長を二期六年つとめ、退職後は学生問題研究所長となり、教育と伝道に従事した。昭和三十六年(一九六一)に没。享年六十八歳。

## 九、尾高朝雄の『法の窮極に在るもの』

高木 尚一

尾高朝雄氏は、明治三十二年一月生、大正十二年三月、東京帝国大学法学部政治学科卒業、大正十五年三月、京都帝国大学文学部哲学科卒業、昭和二年三月、京城帝国大学助教授、昭和五年、同教授、昭和十一年法学博士、昭和十八年辞任、昭和十九年五月、東京帝国大学法学部教授、昭和三十一年五月十五日、注射ショックにより急逝。

主要著書に、『国家構造論』『法哲学概論』『法学概論』『法思想史序説』『法の窮極に在るもの』などがあるが、マルキシズム、唯物史観を正面から批判してゐるのが、有斐閣から昭和三十年三月に出版された『法の窮極に在るもの』である。昭和三十年といへば、急逝された昭和三十一年の前年であつた。本書を遺して急逝されたことを思へ



ば惜しみても余りあるものがあつた。

本書の「はしがき」に於ける著者の言葉には、戦争の末期から終戦直後にかけての混乱の時代に、法の権威が薄らいで、政治の力が幅を利かす、その中であつて、自分にはなほかつ法は政治の矩さしかねであると考え、いくつかの論文を書いたといひ、本文の第一章において、マルクス・エンゲルスの唯物史観が、法のみならず政治もまた、一方的に経済によつて動かされると説き乍ら、その実、最も強烈過激な政治の指導理論であるとして、これに厳密な批判を加へるのである。

尾高氏によれば、唯物史観は経済上の生産が、法や政治の上部構造を動かすといふけれども、生産とは物から物ができることではなくて、人が物を作ることである。生産力とは人間の経済活動であると同時に、一つの政治活動であるといふ。

このやうに法哲学者として、事実を、具体的にふまえて論ずるのは、尾高氏の論旨がどこまでも具体性を失はない所以である。

右の著者『法の窮極に在るもの』は、初版が昭和三十年三月に発行されて、三十一年

に尾高氏が亡くなられたので、絶筆ともいふべき意味を持ってゐる。昭和四十年に再版第一刷が出され、同四十九年に第十七刷が発行され、広く読まれてゐることを物語つてゐる。

同書は、緒論「法の窮極に在るものは何か」で出発し、第一章 自然法の性格、第二章 憲法定権力、第三章 革命権と国家緊急権、第四章 法の原動者としての政治、第五章 法の下部構造としての経済、第六章 国内法の窮極に在るもの、第七章 国際法の窮極に在るもの、となつてゐる。

そこで本論に於いて、特に引用しつつ紹介解説したいのは、第三章の「革命権と国家緊急権」と、第五章の「法の下部構造としての経済」であつて、特にこの第五章に於いて、法を破る階級闘争法を變革する階級闘争の理念等を分析しつつ、これに批判を加へてゐる点である。

尾高氏は本書の中でくり返しいふ

唯物史観は、生産力により法や政治などの上部構造が規定される、と説くだけでなく、生産力の変化によつて、法や政治の組織が転覆する、といふ必然の過程を明らかに

しようとした。マルクス主義はこれを単に説くだけでなく、実践によりその必然性を実現しようとする。ここにおいて、唯物史観は、単なる歴史の批判でなく、目的は現代の批判であり、それは実践や運動を伴ふ法を破る力の理論であるといふ。

また同書二二五頁には次の様にもいふ。マルクス主義は秩序論を、ブルジョアジーの支配機構の卑怯な延命策を講ずる階級的イデオロギーである、と攻撃する。しかし平等の世界を実現するために、法との一切の妥協を排して、革命一路を驀進すべきである、といふマルクス主義政治観は、人間の調和性を無視するものである。そして、それにつづけて、プラトンの説いたやうに「調和」こそ政治の高き矩であり、「法の窮極に在るもの」である、といはなければならぬ、といつてゐる。ここに尾高氏のいふ「調和」こそ、氏の法哲学全体を支へる宗教的哲学的理念であることがわかる。

そして一八九頁には、近代私法制度の根幹をなす二つの最も重要な原理であるところの、私有財産制度と契約自由の原則を、マルクス主義は否定せんとしてゐること、そしてこれを否定することは、近代私法制度のほとんど全生命を否定し去らんとするものであるといつてゐる。そしてなほそれにつづけ、近代法の分野は、私法だけでなく、公法

の組織があるが、マルクス主義は、現代の公法組織（国家制度）に対しても、ブルジョアジーの地位を確保するために作り出された階級支配の道具とみて、これを根本的に変革しようとしてゐる、と批判してゐる。

かくて尾高氏は、法哲学者として、法の窮極にあるものを究めようとすればする程、階級対立の革命論に反撥せざるを得ないことを述べ、階級の対立は、一つの国家の内部の現象でなく、国際的対立になるであらうし、国際社会の法秩序にも深刻な脅威を加へることになることを強調してゐる。そしていかにブルジョア学者といはれやうとも、唯物史観が経済法則の必然性をふりかざして、一挙に圧倒し去らうとする法および法学の自主性を擁護するために、国内法、国際法両面にわたる「政治の矩」を正面から論究することが必要なり、と強調するのである。

同書二四一頁、二四二頁に、尾高氏が、日本において、歴代の天皇が「徳を以て民に臨み」給うた特殊な理念に言及し、普遍的な正しい政治の矩を天皇の大御心といふ特殊な形で把握して来たことを、日本民族固有の歴史的伝統として尊重さるべきであらう、と言及してゐることは、氏がライフワークとして求めてやまなかつた正しい法と政治の

理念に、一すぢの光明が仰がれるものであるが、年齢六十に至らぬうちに急逝されたことは何といつても残念なことである。

東京大学法学部に於いても、尾高氏や神川氏の様な学者が、時流に乗つてもてはやされることなく、ひたすら真理を求めてをられたことを思ふとき、その志を我等は伝承せねばならないと感ずるのである。

## 一〇、小林秀雄とマルキシズム

山田輝彦

### 自然と歴史



小林秀雄

小林秀雄の批評家としての出発が、「様々なる意匠」にあったことは、まづ異論のないところであらう。この処女評論は、昭和四年雑誌「改造」の懸賞論文の第二席であったが、第一席はマルクス主義の立場から芥川龍之介の死を小ブルジョアの自我の崩壊と断じた宮本顕治の「敗北の文学」であった。小林の論は、当時支配的であったマルクス主義文学も、新感覚派や新心理主義とひとしなみの、新奇を競ふ文壇の「意匠」に過ぎぬと断定

したものであった。以後、四、五年の間、彼は最も果敢なマルクス主義文学の批判者となるが、その論旨の中心は常に「概念による欺瞞」「概念による虚栄」「現代文学の不安」(昭七)から、実感、感動を救出するところに置かれてゐた。

人々は批評といふ言葉を聞くと、すぐ判断とか理性とか冷眼とかいふことを考へるが、これと同時に、愛情だとか感動だとかいふものを、批評から大へん遠い処にあるものの様に考へる、さういふ風に考へる人々は、批評といふものに就いて何一つ知らない人々である。∨(「批評について」昭七)

「批評で冷静にならうと努めるのはいふ、だが感動しまいと努める必要がどこにある」とも小林は言ふ。「科学的」「客観的」といふ言葉が教条のやうに信じられてゐた時代において、小林のかういふ発言がいかに独創的なものであったか。しかも、その状況は現代においても少しも變つてはゐないのである。

「故郷を失つた文学」(昭八)が書かれた頃には、客観情勢をもふくめて、勝負は誰の目にも明白となつてゐた。この年、小林多喜二は死に、佐野、鍋山の転向声明が出され、翌年にはプロレタリア作家同盟の解散が行はれてゐる。当面の敵の崩壊といふ現象



を前にして、小林は改めて自らの立場を確める余裕を得たかに見える。それは「自分には故郷といふものがない、といふやうな一種不安な感情」であり、「自分の生活を省みて、そこに何かしら具体性といふものが大變欠如してゐる事に気づく。しっかりと足をつけた人間、社会人の面貌を見つける事が容易でない」といふ痛感であった。かうして、小林の「歴史」への接近が始まる。いふまでもなく、唯物史観についての徹底した批判をふくめて。

小林の歴史への関心が最初に示されるのは「戦争について」(昭二二)の中であるが、彼はそこで「将来に腰を据ゑて逆に現在を見下す様な態度」を敵にいましめる。また当時流行の「歴史的境界」といふ言葉についても「過去の時代の歴史的境界性といふものを認めるのはよい。併しその歴史的境界性にも拘らず、その時代の人々が、いかにその時代のたった今を生き抜いたかに対する尊敬の念を忘れては駄目である。この尊敬の念のない処には歴史の形骸があるばかりだ」と述べ、以後の展開への基本的な姿勢を示してゐる。

小林が歴史に関する問題を始めて正面から論じたのは『ドストエフスキーの生活』の

序文として掲げられた「歴史について」(昭二四)である。

一体、時代の通念の中に腰を据ゑてしまつて、自他ともに自明のこととして疑はない言葉の中には、大きな陥穽がふくまれてゐる。「歴史」といふ言葉もその一つである。われわれは歴史とは過去から未来へつづく一本の線の上に、時代順に配列された歴史事実の連鎖といふやうに考へてゐないだらうか。小林は、あらゆる歴史事実を「合理的な発展図式の諸項目」としか考へない考へ方は「妄想」だといふ。「歴史について」の冒頭でまづ問題となるのは自然と歴史の根本的な相違である。

△自然は人間には関係なく在るものだが、人間が作り出さなければ歴史はない。歴史は人間とともに始まり、人間とともに終る、と言はれるが、この事は徹底して考へる必要がある。▽

△自然は疑ひもなく僕等の外部に在る。少くとも、自然とは、これを一対象として僕等の精神から切離さなければ考へられないある物だ。だが、歴史が僕等の外部に在るといふ事が言へるだらうか。▽

歴史を知るためには、われわれは当然「史料」を必要とする。「史料」とは、それが

古文書であれ、古い瓦であれ、その物としては単なる物質に過ぎない。そこに単なる物質ではなく、歴史をよみとるのは外ならぬわれわれの心であらう。「古寺の瓦を手にする人間は、その重さを積る一方、そこに人間の姿を思ひ描く二重人なのである」と言はれる時、「重さを積る」能力が知性ならば、「人間の姿を思ひ描く」能力は、現存しないものに対する能力、すなはち想像力である。この能力がなければ歴史は創られない。従って、歴史はわれわれの外部にある「客観的存在」ではなく、むしろわれわれの内部にある、と小林はいふのである。

### 「思ひ出」の技術

過去といふ過ぎ去った時間はどこにもない。それは虚無である。未来といふ時間もまた虚無である。われわれは二つの虚無にはさまれた不安定な現在に生きてゐる。あるのは現在だけだといふ痛感が、本物の歴史感覚には必須のものやうだ。

「歴史は繰り返す」とは歴史家の好む比喩だが、一度起つて了つた事は、二度と取返しが付かない、とは僕等が肝に銘じて承知してゐるところである。それだからこそ、

僕等は過去を惜しむのだ。歴史は人類の巨大な恨みに似てゐる。若し同じ出来事が、再び繰り返される様な事があつたら、僕等は、思ひ出といふ様な意味深長な言葉を、無論発明し損ねたであらう。後にも先にも唯一回限りといふ出来事が、どんなに深く僕等の不安定な生命に繋がつてゐるかを注意するのはいい事だ。▽

ここで、小林の歴史論のキイ・ワードの一つである「思ひ出」といふ言葉が出て来る。それは具体的には「歴史について」の中枢部につながつてゆく。

△子供が死んだといふ歴史上の一事件の掛替への無さを、母親に保証するものは、彼女の悲しみの他はあるまい。どの様な場合でも、人間の理智は、物事の掛替への無さといふものに就いては、為す処を知らないからである。悲しみが深まれば深まるほど、子供の顔は明らかに見えて来る。恐らく生きてゐた時よりも明かに。愛児のささやかな遺品を前にして、母親の心に、この時何事が起るかを仔細に考へれば、さういふ日常の経験の裡に、歴史に関する僕等の根本の智恵を讀取るだらう。それは歴史事実に関する根本の認識といふよりも寧ろ根本の技術だ。其処で、僕等は与へられた歴史事実を見てゐるのではなく、与へられた史料をきつかけとして、歴史事実を創つて

ゐるのだから。▽

ここで「愛児のささやかな遺品」を「史料」に、「母親の悲しみ」を「過去への愛惜の情」に置きかへて見れば、歴史事実が、生きてゐる人の心に蘇って来る秘密をこれほど美しく語ってゐる文も少いであろう。「史料をきっかけとして歴史事実を創る」とは、まさに歴史はわれわれの内部にあることを語ってゐる重要な言葉である。「歴史について」の末尾で、古人を今に蘇らす方法として、小林は次のやうに述べてゐる。

△あらゆる史料は生きてゐた人物の蛻もよげの殻に過ぎぬ。一切の蛻の殻を信用しない事も、蛻の殻を集めれば人物が出来上ると信ずる事も同じ様に容易である。立還るところは、やはり、ささやかな遺品と深い悲しみとさへあれば、死児の顔を描くに事を欠かぬあの母親の技術より外にはない。▽

かうして、歴史を創る根本の技術として、「思ひ出」といふ万人に生得の機能が提出される。それもまた「過去の再構成」に過ぎぬといふ批判は必ず出て来るであらう。

その微妙な相違について『私の人生観』（昭二四）では次のやうに述べられる。

△歴史の見方が発達して来ますと、過去の時間を知的に再構成するといふ事に頭を奪

はれ、言はば時間そのものを見失ふといった事になり勝なのである。私達が、少年の日の楽しい思ひ出に耽る時、少年の日の希望は蘇り、私達は未来を目指して生きる。老人は思ひ出に生きるといふ。だが、彼が過去に賭けてゐるものは、彼の余命といふ未来である。かくの如きが、時間といふものの不思議であります。この様な場合、私達は、過去を作り直してゐないとは言はぬ。過ぎた時間の再構成は必ず行はれてゐるのであるが、それは、まことに微妙な、それと気付かぬ自らなる創作であります。▽

批評意識や史観によって裁断された過去の「知的な再構成」に対して、人が誰でも備へてゐる能力によって、「うまく思ひ出す」ことは、「自らなる創作」であるとされる。先入観や既成の概念によって過去を玩弄するな、いたづらに自己批判とか清算とかふのは、「私達がその日その日を取返しがつかず生きてゐるといふ事に関する、大事な或る内的感覺の欠如から来てゐるのであります」と断定するのである。そして、宮本武蔵の「我事に於て後悔せず」といふ言葉に註して「今日まで自分が生きて来たことについて、その掛け替へのない命の持続感といふものを持て」といふ。己れの過去に愛惜の持てない人に、国の歴史が正確に思ひ出せないのは当然であらう。



## 形としての歴史

武装した冷たい目で、ひたすら歴史を観察することが、「客観的」な歴史を生み出す所以だらうか。小林は「林房雄の『西郷隆盛』」(昭一五)の中で「歴史もまた人間のやうに問ふに落ちず語るに落ちるものである」といつてゐる。自分が胸襟を開いて接しなれば、人もさうしてくれないのと同じく、虚心に、愛情をもって接しなれば、歴史は決して真実の姿を示してはくれないのだらう。だから、「歴史を貫く筋金は、僕等の愛惜の念であつて、決して因果の鎖といふやうな物ではない」(『歴史と文学』昭一六)のである。それはまた「物に対して、透徹した関心を努力して工夫」しなければ、見えるものではない。「歴史は、眼をうつろにしてゐさへすれば、誰にでも見はるかす事が出来る、平均にならされ、整然と区別のついた平野の様なものではない。僕等がこちらから出向いて登らねばならぬ道もない山」(『歴史と文学』)でもある。本当の客観的な歴史は、さういふ対象への努力と敬意と愛惜の情の中に蘇ってくるものであつて、既成の図式の中に都合のいい事実をはめこんで作られた、一見学問めいた体系の中にはないのであらう。かういふ擬科学に対する拒否の姿勢は、小林の場合見事に一貫してゐる。『考へる



ヒント』(昭三九)の中で、「歴史」は次のやうに語られる。こゝで「解放」といふ言葉が痛烈なイロニーとして語られてゐることを見逃してはならない。

△現代の歴史意識は解放された歴史意識である。何から解放されたか。昨日を思ひ明日を目指し、二度とくりかへせぬ一生を生きて育て上げた、誰も知ってゐる歴史感情から解放された。そのやうな曖昧な個人的主観性から解放された。歴史はもう他人事のやうにし書かれない。客観的と呼ばれてゐる一種の優越感と侮蔑とを持ってしか書かれない。これが歴史に現れる個性的人物といふやっかいな問題を片付けて了ふ。偉人も愚人も歴史的展望と呼ばれる機構の単なる部分品となる。▽

「実物の歴史に推参する為の手段であり、道具である」に過ぎない「史観」が、殆んど全能に近い力をふるつて、健全な歴史感覚を圧殺してしまつたといふ嘆きであらう。小林の歴史論で、もう一つ残された大きな問題がある。それは「形」といふ考へ方である。「形」とは勿論「観念」「抽象的概念」の対照語として、よみとることができよう。「歴史と文学」の中には次のような言葉がある。

△歴史事実とはかつて或る出来事があったといふだけでは足りぬ。今もなほその出来

事が在ることが感じられなければ仕方がない。母親はそれを知ってゐる筈です。母親にとって、歴史事実とは、子供の死ではなく、むしろ死んだ子供を意味すると言へませう。▽

ここで「子供の死」とは一つの観念であるが、「死んだ子供」とは「形」であり、具體的なイメージである。心にイメージとして鮮明に喚起された時、歴史事実は始めて単なる認識ではなく、歴史体験となるのであらう。「無常といふ事」(昭一八)の一篇が中世の人々の「形」をどんなに鮮かに示してくれてゐることであらう。歴史とは「記憶するだけではいけないのだらう。思ひ出さなくてはいけないのだらう」。さうして「巧みに思ひ出し」た時、歴史といふものは、「動かしがたい形」として映って来るし、それは「新しい解釈なぞでびくともするものでない」と断言されるのである。

小林の歴史論は難解だといはれる。しかし、彼の立論は、現代における「歴史主義」といふ最大の妄想——歴史は常にヘーゲルやマルクスによって定式化された図式通りに発展するといふ固定観念——への懐疑から生れてゐる。批評とは「常識の深化」だ(中野重治君に「昭二一」といふ姿勢は一貫してゐるのである。丸山真男が『日本の思想』(岩波

新書)において展開した「思ひ出」の解釈は曲解に満ちてゐる。彼はその結論を「それは直接には歴史的発展という考え方にたいする、あるいはヨリ正確には発展思想の日本への移植形態にたいする一貫した拒否の態度」としてゐるが、これは小林の歴史論が、唯物史観についての最もしたたかな批判であることの傍証といふべきであらう。

## 一一、神川彦松のマルキシズム批判

高木 尚一



神川彦松

私は昭和七年頃、東京大学法学部に在学して、神川教授の外交史の講義を聴講したが、その頃学界に蔓ったマルキシズムの風潮をもとせず、講義の中で、マルクスの文献を刻明に引用しては、根強く批判されてゐたことは、今尙鮮明に記憶してゐる。

神川氏は、明治二十二年、三重県度合郡田丸町に生れられ、今年八十六歳で尙壯健であられることはいふまでもないことである。旧制第一高等学  
校から東京帝国大学法学部を大正四年卒業、同六年同大学助教授、同十二年教授、昭和

四年法学博士、昭和二十二年九月まで国際政治史、外交史の講義を担当、現在東京大学名誉教授、日本学士院会員であられる。

神川博士の学説は、その学問研究方法としては、新カント派哲学を基礎として、ウントの国民性格学にまで自ら発展せしめてをられる。はっきりした歴史科学の方法を確立し、唯物史観の法則をそのまま古今東西の歴史に適用しようとする如きマルキシズムを、つねにはっきりと批判し乍ら学説を発展させてゐる。

その研究は東西文化の批判研究から出発して、詳細な史実を網羅し、いささかの飛躍も感じられぬしっかりした論理を以て、国際政治外交を論じ、時の権勢に屈せぬ時事評論をつづけて居られる点で敬服に値するものがある。

一九六九年に、勁草書房から第一刷が発行された神川彦松全集全十巻のいたるところに、マルキシズムに対する批判がみられる。その中から二、三の要点をひろって説明してみよう。

まづ帝国主義論についてのマルクス学派の説を神川氏は次のやうに批判する。(全集第

卷八。即ち

マルクス諸学派は、帝国主義の本質を以て資本若くは資本主義の政策なりと主張する。この派は、帝国主義の主体は資本又は資本家団体であつて、国家ではないとし、帝国主義の本質は、資本又は資本家団体の政策であつて、国家の政策ではないと主張する。しかし、資本又は資本家団体とか、資本主義とかいふものは、一定の統一的意思主体を予想しないから、政策乃至行動の主体となり得ない。しかるにマルクス主義者は、他面に於いて、「帝国主義政策は必然に帝国主義戦争に導く」と論ずるのであるが、資本又は資本主義の政策たる帝国主義なるものが、何故に近代国家の戦争に導くかは説明しない。つまり帝国主義政策と帝国主義戦争との間に、必然的関連がなければならぬのに、マルクス主義の論理に於ては、かかる論理的関連が全くないと批判してゐる。これは同氏の全集第七巻、学問方法論四九頁にはれる如く、「マルクス主義派では、マルクスのいはゆる唯物史観、すなはち経済発展段階の理論を、そのままこの国の歴史にも適用して、一律に経済史を説かうとする歴史の理論化の行き過ぎからくるものである。

外交史、國際政治学、國際政治史を一貫して論じられる神川氏の学問的態度は、あくまでも事實に基き或る国、或る時代の個性的な發展系列を明らかにしようとするものであつて、ドグマやユートピア思想をつねに排除する方法論のあらはれといはねばならぬ。

右の「学問方法論」の中に更につづけて「政策学方法論」を論じ（全集第七卷五〇頁—五三頁要約）、次の如くいふ。

マルクス主義学派は、社会制度に於ける静態的、客観的知識の獲得を目的とせず社会の動態的変革的意欲を目的とする。従つて学問的認識の目的は、社会の現実の状態の解明にあるのでなく、その変革にある。マルクス主義は十九世紀後半、自然科学の興隆時代に形成されたもので、その時代の影響を多分にうけ、まだ新カント派の学問方法論も出現せず、従来の自然科学的一元論的方法が支配的であつて、哲学と科学の分化がはっきりしてないのみならず、自然科学と精神科学の区分も理解されないうまに、マルクス主義派は自らの学問体系を「科学的」と銘打ちながら科学方法論はいまいであつた。そしてその体系全体がモザイク的で、革命的戦略的であつた。これらの点で、神



川氏自身は「マルクス、エンゲルスと根本的に見解を異にするので、これに賛成しえないのはいふをまたない」(五三頁)と明言してゐる。

戦後に出版された全集にも入っている神川氏の著書『日本外交の再出発』の中に「戦争のリアリティと平和のユートピア」といふ論文があり、その四に、「国際政治科学的予見の性格、マルクス学派の戦争論と平和論を駁す」(二七二頁—二七五頁)といふ論文がある。その後半のマルクス学派の批判の部分を要約すると次の如きものである。

マルクス学派は一方に於いて「人類の歴史は階級闘争の歴史である」といひ乍ら、一方に於いて、「将来の社会は階級なき社会である」といふ。また「人間文明の歴史は戦争の歴史である」といひ乍ら、他方では、「将来の世界は戦争なき世界となる」といふ。つまり戦争は文明の所産であり、特に私有財産の所産であるから、私有財産を基礎とする社会制度が廃止されて共産社会となれば、戦争はなくなる、と主張する。

しかし神川氏がいふには、たとへ私有財産制度が全廃されても、地球上に複数の政治集団が並存するかぎり、そして他の方法を以って政治的利害を擁護することができない限り、戦争は依然として存続する、と予見せざるを得ない。マルクス学派はいはゆる

「唯物弁証法」といふ知的魔術を使用し、現象の本質に突然変異を生ぜしめて、歴史の進化を突然停止せしめ、法則の妥当を突如として否認する。しかし、かかる芸当は、信仰や形而上学の世界ならばいざしらず、科学的思考の分野ではとうてい許されぬ。マルクス学派の科学的予見として提供するのは、ドグマかユートピアにすぎない、と批判するのである。

神川氏が戦前戦後を通じて、終始一貫して堅持される立場は、資本主義とそのアンチテーゼとしての共産主義は、平和的共存のできないものであって、その間に生死の闘争が不断に展開されるのが必然である。ここに現下の世界の不安と動乱の根本的原因が存する。(前掲書四五九頁)のであるから、両陣営の間において安易に中立政策をとることは不可能である。

神川氏の前掲の書『日本外交の再出発』の最後の章に、「わが民族性の長短とその世界史的使命」といふ大論文がある。これは昭和三十一年に発表されたものであるが、アメリカのエドウィン・ライシャワー博士、スイスの世界的神学者エミール・ブルンナー氏、イギリスの史家政治学者ロバート・シーレー教授の三人の学者の日本民族性に関する

る批判を紹介されてゐる。

それによれば、日本人は権力者への服従の習性をもつこと、終戦後の精神の分裂と空虚は、西洋文明の源泉を把握できなくなつてゐること、日本人はもろもろの文明の経験者ではあるが、それが雑種混合になつてゐる、といふ様な右の三人の批判をとり上げ、日本人が国語に自尊心と独立心をもたぬこと、敗戦後の特に若い世代の多くが祖国精神を喪失したことを痛嘆し、最後にドイツの愛国詩人カール・テオドール、ケルネルの「わが祖国」の詩の全文を引用して論文を結んでをられる。

その憂国の熱情に心打たれるとともに、我々はここで改めて、わが国の皇室を中心として、紀記万葉の時代から明治大正昭和の代に、一貫して伝はる和歌、しきしまのみちのしらべに、我らの生命の最後のよりどころを見出す同信同胞生活の、文化史的意義と使命を痛感するのである。それこそは神川氏も志し、強調してをられる東西文化融合の文化史的使命遂行の原動力となるべきものであるからである。

## 一一、三島由紀夫のマルキシズム批判

戸田義雄

### 生命の発露としての反共主義



三島由紀夫

三島由紀夫がマルキシズム批判、及び反共思想を集約して明白に表出した重要な著作は『文化防衛論』(『中央公論』昭四三、八月号)と『反革命宣言』(『論争ジャーナル』昭四四、一月号)である。思想の骨子はここに余すところなく語り尽くされてゐると思はれる。以下、こ

の二著を中心として、その具体的内容を検討してみよう。

三島にとって実かこうした文章を書くことは『英霊の声』を書いたのちにすでに予定

されてゐたことであることは確かである。何としても『英霊の声』を書かすにはをれなくなつたその思ひがあふれんばかりになつて必然的にこの二つの論述を書かせるに至つたいきさつがよく窺へる。

単行本『文化防衛論』の「あとがき」で三島は次のやうに述べる。

もちろん、誰しもこのくらいのことは言えるであらうし、人は同時にいくつもの政治的立場に立つことはできないから、一つの政治的立場から見たもの見方は、大体似たり寄つたりであらうし、これらに私の独創があると主張するつもりはない。しかし私の独自性があるとすれば、私はこれらの文章によって行動の決意を固め、固めつつ書き、書くことによっていよいよ固め、行動の端緒に就いてから、その裏付として書いて行つたということである。

従つてこれらの文章によつて私の行動と責任が規制されることも明らかであるが、私のこれらの文章が、行動と並行しつつ、行動の理論化として書かれたことも疑ひがない。(中略) 少なくとも私の『武』に属する現実行動を無視して、本書を語ることはできないし、私も亦、そのような行動の裏付なしに、こうした書物を書きたいとは毫ちと

も思はなかつた。

単行本『文化防衛論』は四篇の論文、一つの対談、それに学生とのティーチ・インが収録されてゐるが、中核をなすものは『反革命宣言』と『文化防衛論』の二つであつて「あとがき」のこの言葉は、とりわけこの二つの論述に対するものと解して誤りないであらう。ここで繰り返し強調されてゐる「行動」が、端的に、自決に至るあの最後の蹶起<sup>けつき</sup>を指してゐたことは、今日ではすでに明白である。切実な行動へと決意し、日々その決意を固めながら筆でものし、文字に書き綴るデスクワークによって更にこの決意をゆるがぬ不動のものにして行つた。行動を内から支へ、より不動の自覚にもたらず行動の理論化として書かれたのが、これらの文章であるといふ。「内容そのものに独創があると主張するつもりはない」と三島が言ふのは謙遜<sup>けんそん</sup>である。ただし、それは勿論、社交辞令としての謙遜である筈はない。文章にもられた思想がただの机上の思ひつきではなく、生涯をかけた体験から噴出した認識としての思想——それを生死をかけた確たる行動の裏付けとして書いたものであるといふことへの、むしろ自信にみちた草莽の臣の謙讓である。内容の獨創性については、謙虚であることはへおのれ一人に極まる独自の思ひ

があることを蔽ひかくす訳のものではない。△おのれ一人に極まる独自の思ひ▽は何か。それは思想のリアリゼーション・実現にもたらずこと、まぎれもなく三島といふ人格に完全に肉化せられた思想であつて、彼をおいて他にないといふ△一人の独自性▽の現実化である。そこにこれら二つの著述の根本的意義があるとみられやう。三島にとって、蹶起の行動は、彼が人間としての生の充実とその燃焼を求めて、真の意味における生が何であるかを求めに求めた果てに到達した、生命の最高の顕現に他ならなかつたのである。その蹶起行動の理論化が、一つには『反革命宣言』であり、今一つは『文化防衛論』であるのである。したがつてそこに鋭く展開されたマルキシズム批判、反共の思想は、生命の真の発露が、そこに接触し、時に切り結んでくるマルキシズムや共産思想に鋭く反応し、それを生命の許し難い敵性のものと感じとつて、おのづと批判・剔抉の挙に出たものと解される。

かくて、マルキシズムは人間の生がもつ深い意味の顕現に、根本的に抵触する最もおぞましい敵性のものとして否定されたのであつた。将にここに、三島のマルキシズム批判の発生源母胎、根源性があると言へるのである。



## 文化防衛の原点としての反共思想

『反革命宣言』（以下『宣言』と記す）は次のやうに説き起すことからはじまつてゐる。

われわれはあらゆる革命に反対するものではない。暴力的手段たる非暴力的手段たるを問わず、共産主義を行政権と連結せしめようとするあらゆる企図、あらゆる行動に反対する者である。この連結の企図とは、いわゆる民主連合政権（容共政権）の成立およびその企図を含むことはいうまでもない。国際主義的あるいは民族主義的仮面にあざむかれず、直接民主主義方式あるいは人民戦線方式等の方法的偽瞞に惑わされず、名目的たると実質的たるを問わず、共産主義が行政権と連結するあらゆる態様にわれわれは反対する者である。

具体的政治プランの上で、いかなる形であるにしろ「共産主義が行政権と連結する」事態の招来されることに対して三島は断乎抵抗した。きはめて蔽密であり、少しのゆるみも妥協もあってはならない。彼の立場は『反革命宣言補註』（以下『補註』と記す）にみられる次のやうな見通しがあつたことであつた。

もし革命勢力、ないし容共政権が成立した場合に、たとへた一人の容共的な閣僚が入っても、もしこれが警察権力に手をおよぼすことができれば、たちまち警察署長以下の中堅下級幹部の首のすげかえを徐々に始め、あるいは若い警官の中に細胞をひそませ、警察を内部から崩壊させるであろう。そのような形で次に行われる選挙は干渉選挙になることは明らかであり、これは一九四八年のチェコにおける共産クーデターに至る成り立ちがよく示している。彼らは政権の一端でも握れば、これをいつも共産政権へのワン・ステップとして利用することに全力をあげるであろう。社会党はケレンスキー内閣の哀れな役割を負わなければならないであろう。そして、全アジア諸国において容共政権が容共政権のままとどまった例はないのである。容共政権は共産党の一党独裁への準備段階として徹底的に利用され、むしろこのような緩慢な移行の方が、急激な武力革命による移行よりも彼らの歓迎するところである。

では一党独裁の過程にある容共政権、また真正の共産主義政権の成立はあくまでも拒否されねばならぬのは何故であるか。彼は明瞭にこれに答へる。

われわれの護らんとするものは、わが日本の文化・歴史・伝統であるが、これらは

唯物弁証法的解釈によれば、かれらの「顛覆せんとする一切の社会秩序」に必然的に包含されるからである。(『宣言』)

ここで、日本の文化・歴史・伝統の三つが護るべきものとして並列的に掲げられる。しかし、歴史と伝統とをもたない単なる純粹概念としての文化などといふものはあり得ないし、考へれないことだから、これらを一括して文化と呼んでさしつかへないであらう。さうしてみると三島が『文化防衛論』(以下『防衛論』と記す)で詳述してゐる文化とはその意味においてであることがわかる。即ち

文化は、ものとしての帰結を持つにしても、その生きた態様においては、ものではなく、又、発現以前の無形の国民精神でもなく一つの形(フォルム)であり、国民精神が透かし見られる一種透明な結晶体であり、いかに混濁した形をとろうとも、それがすでに『形』において魂を透かす程度の透明度を得たものであると考えられ、従つていわゆる芸術作品のみでなく、行動及び行動様式をも包含する。

とし、この一般的文化概念に立つて日本文化の特質が説かれる。

第一にそれは、「行動様式自体を芸術作品化する特殊な伝統を持っている」ことであ

り、「武道その他のコマージュナル・アートが、茶道や華道の、短い時間のあいだ、生起し、継続し、消失する作品形態と同様のジャンルに属している」ことである。第二に、「本来オリジナルとコピーの弁別を持たぬこと」がその特質として挙げられる。伊勢神宮の式年造営や歌道における本歌取りの法則などに見られる「この種の基本的文化概念は、今日なおわれわれの心の深所を占めている」と指摘する。

そして最後に「文化の生命の連続性V」といふ特質があげられる。

かくして創り出される日本文化は、創り出す主体の側からいえば、自由な創造的主体であって、型の伝承自体、この源泉的な創造的主体の活動を振起するものである。

これが、作品だけでなく、行為と生命を包含した文化概念の根底にあるもので、国民的な自由な創造的主体という源泉との間がどこかで絶たれれば、文化的な涸渇が起るのは当然であって、文化の生命の連続性（その全的な容認）という本質は、弁証法的发展乃至進歩の概念とは矛盾する。

かうした文化概念からすれば、一切の国民的な自由な創造的主体を培ふ国家の秩序を顛覆しようとし、さうすることによってのみ、ひたすら自己の目的が達成されることを

公然と宣言する共産主義（『共産党宣言』）は、反文化主義以外の何ものでもないことになる。かくて、日本の文化を護らうとする立場が、反共産主義となるのは必然であり、また原理的帰結でもあるのである。かうして、三島の反共思想の基盤は、国民的な自由な創造的主体といふ源泉を根底にたたへてゐる行為と生命を包含した文化概念そのものにあることがはっきりしてきた。

ものとしての文化の保持は、中共文化大革命のような極端な例を除いては、いかなる政体の文化主義に委ねておいても大して心配はない。文化主義はあらゆる偽善をゆるし、岩波文庫は『葉隠』を復刻するからである。しかし、創造的主体の自由と、その生命の連続性を守るには政体を選ばなければならない。（『防衛論』）

そこで選ぶべき政体は何か、といふ現実的問題となるが、その場合「現代日本の代議制民主主義がその長所とする言論の自由をよし」とし、「言論の自由を守るために共産主義に反対する」といふ立場がとられる。

それは、「言論の自由を保障する政体として、現在、われわれは複数政党制による議会主義的民主主義より以上のものを持っていない」からであり、「この『妥協』を旨と

する純技術的的政治制度は、理想主義と指導者を欠く欠点を有するが、言論の自由を守るには最適であり、これのみが、言論統制・秘密警察・強制収容所を必然的に随伴する全体主義に対抗しうるからである。」(以上「宣言」)

ここに明らかなやうに、三島は複数政党制による議會主義的民主主義をよしとした。言論の自由を守るにはそれが最適であり、全体主義に対抗しうる唯一の政体だからであるとする。従つてここで三島をファシスト呼ばはりすることは当を得てゐない。もっとも三島が言論の自由をよしとするのは、文化の創造的主体の自由と、その生命の連続性を守り、日本文化の最大限の全体性を容認する為にはそれが必要だからである。「言論の自由」といふものを空虚な概念として、あたかもそれを絶対不可侵の価値であるかのやうに言ひたてる把え方とは全く異なる。

さて重ねていふ。護るべきものは日本文化の生命そのものであり、言論の自由はそれを養ふに必要な最低限度の条件であると。だが日本共産党は言論の自由を保障すると堂々と言明してゐるではないか。さういった反論も当然予想されてくる。それに対して三島は次のやうに抗弁する。



われわれは日本共産党の民族主義的仮面、すなわち、日本の方式による世界最初の、言論自由を保障する人間主義的社會主義という幻影を破砕するであろう。この政治体制上の実験は、(もしそれが言葉どおりに行われるとしても)成功すれば忽ち一党独裁の恐るべき本質をあらわすことは明らかだからである。(『宣言』)

ヴェルト・アン・ジッヒ  
窮極の価値 自体・文化概念たる天皇と相容れぬ共産主義

日本文化防衛の原点としての反共主義は、最終的に天皇の護持といふ最も肝要な一事に帰着する。何故なら、天皇こそは、「雑多な広汎な、包括的な文化の全体性に、正に見合うだけの唯一の価値自体」なのであって、「国と民族の非分離の象徴であり、その時間的連続性と空間的連続性の座標軸」だからである(『防衛論』)。天皇こそは「われわれの歴史的連続性・文化的統一性・民族的同一性の、他にかけがいのない唯一の象徴」なのである。これに対し共産主義は「論理的に天皇の御存在と相容れない」ものであるとされる(『宣言』)。

「文化上のいかなる反逆もいかなる卑俗もついに『みやび』の中に包括され、そこに



文化の全体性がのこりなく示現」するところの「文化概念としての天皇」の意味を三島は強調する。そして、この文化概念たる天皇といふ視点を導入することによって、日本文化の本質と天皇の存在との不離一体性を明らかにし、もって日本文化を護るとは、天皇を護る以外の何ものでもないことを証したのであった。『防衛論』や『宣言』にもられた思想に自分の独創があると主張するつもりはないのだ、との彼の言葉にもかかはらず、ここに日本文化の本質と天皇の存在との不離一体性からする三島の反共思想の獨創性とその精髓があるといへやう。「天皇が否定され、あるいは全体主義の政治概念に包括されるときこそ、日本の又、日本文化の真の危機」であることを三島ははっきりと見据えてゐた。しかも、「時運の赴くところ、象徴天皇制を圧倒的多数を以て支持する国民が、同時に、容共政権の成立を容認するかもしれない。そのときは、代議制民主主義を通じて平和裡に、『天皇制下の共産政体』さえ成立しかねない」との危惧を感じつけてゐた。

そこで、「おおよそ言論の自由の反対概念である共産政権乃至容共政権が、文化の連続性を破壊、全体性を毀損することは、今さら言ふまでもないが、文化概念としての天皇

はこれと共に崩壊して、もっとも狡猾な政治的象徴として利用されるか、あるいは利用されたのちに捨て去られるか、その運命は決っている。」(以上「防衛論」と警告するのである。一方では、もし仮に世論がさうした事態に流れるやうなことが起っても、疎外を固執し少数者意識に立って、「千万人といえども我往かんの気概を以て、革命大衆の醜虜に当らなければならぬ。民衆の罵詈譏、嘲弄挑発、をものともせず、かれらの蝕まれた日本精神を覚醒させるべく、一死以てこれに当らなければならぬ。」(『宣言』)との決意を更に固めて行った。かくて

では、その少数者意識の行動の根拠は何であるか。それこそは、天皇である。われわれは天皇というときには、むしろ国民が天皇を根拠にすることが反時代的であるというやうな時代思潮を知りつつまさにその時代思潮の故に天皇を支持するのである。なぜなら、われわれの考える天皇とは、いかなる政治権力の象徴でもなく、それは一つの鏡のように、日本の文化の全体性と、連続性を映し出すものであり、このような全体性と連続性を映し出す天皇制を、終局的には破壊するような勢力に對しては、われわれの日本の文化伝統を賭けて闘わなければならないと信じている

からである。

われわれは、自民党を守るために闘うのでもなければ、民主主義社会を守るために闘うのでもない。もちろん、われわれの考える文化的天皇制の政治的基礎としては、複数政党制による民主主義の政治形態が最適であると信ずるから、形としてはこのような民主主義政体を守るために行動するという形をとるだろうが、終局目標は天皇の護持であり、その天皇を終局的に否定するような政治勢力を、粉碎し、撃破し去ることでなければならぬ。(『補註』末尾)

もはや贅言はひかへるべきであらう。この玉のやうに透徹した一文に、三島の文化防衛の意味と、その反共思想の核心は余すなく語り尽くされ、ここに極まったと言へるからである。

### 戦後左翼の没道義的体質

最後に、戦後の日本共産党及び左翼の体質に対する道義的側面からの批判について見てみる。

三島は、その思想と行動のみならず日常生活においても、道義性の潔癖さを非常に重んじた人物であった。芸術作品における形式の美と同様に、精神の美としての道義性を重視し、追求した。その価値意識からする道義的批判は、見逃せない重要な側面である。『対話・日本人論』の中で、三島は次のやうなことを言っている。

共産党の卑怯なことは、じつにけしからんと思いますよ。ただ一人、井上光晴が、文学的テーマとして、天皇制批判をやってゆく、と言っているのは、まじめな態度だと思ふ。ほかはみんな逃げている。

天皇制批判者ではあっても、その態度のまじめさにおいて作家の井上光晴は評価されるが、共産党の態度は卑怯だとこれに怒りをぶつけてある発言である。何故彼らは卑怯なのかは、「マッカーサーは、打倒できないと見きわめて天皇制を避けて通ったが、日本共産党は、いつか打倒してやるぞと避けて通っている。避けて通って、打倒もなにもあるはずはない。」といふ林房雄の言葉を受けて、三島は「それは絶対そうです。まったく同意見です。それをじつに言いたかった。左翼はじつに卑怯です。」とこれに全面的に賛同してゐることによつて窺へる。

天皇制に対する日本共産党の態度が彼ら一流の戦術であることはもとより承知の上であり、よく承知はしていても、さうした態度にまつはりついた潔癖さの無さが、嫌悪すべき卑怯さとして彼には我慢ならないのである。『宣言』に次のやうな一節がある。

われわれは戦後の革命思想が、すべて弱者の集団原理によって動いてきたことを洞察した。いかに暴力的表現をとろうとも、それは集団と組織の原理を離れえぬ弱者の思想である。不安、懐疑、嫌悪、憎悪、嫉妬を撒きちらし、これを恫喝の材料に使いこれら弱者の最低の情念を共通項として、一定の政治目的へ振り向けた集団運動である。空虚にして観念的な甘い理想の美名を掲げる一方、もっとも低い弱者の情念を基礎として結びつき、以て過半数を獲得し、各小集団小社会を「民主的に」支配し、以て少数者を圧迫し、社会の各分野へ浸透して来たのがかれらの遺口である。

また『補註』ではかうも述べてゐる。

たとえば原爆患者の例を見るとよくわかる。原爆患者は確かに不幸な気の毒な人たちであるが、この気の毒な不幸な人たちに襲いかかり、たちまち原爆反対の政治運動

を展開して、彼らの疎外された人間としての悲しみにも、その真の問題にも、一顧も顧慮することなく、たちまち自分たちの権力闘争の場面へ連れて行ってしまふ。

日本の社会問題はかつてこのようではなかった。戦前、社会問題に挺身した人たちは、全部がとはいわないが、純粋なヒューマニズムの動機にかられ、疎外者に対する同情と、正義感とによって、左にあれ、右にあれ、一種の社会改革という救済の方法を考えたのであった。

しかし、戦後の革命はそのような道義性と、ヒューマニズムを、戦後一般の風潮に染まりつつ、完全な欺瞞と、偽善にすりかえてしまった。

後半は、左翼に限らず、戦後社会全般のもつ没道義的退廃の風潮に対する強いいきどおりとなっている。

このやうに、文化概念からする原理的批判に道義的批判が相俟ったればこそ、三島のマルキシズム批判、反共主義は十全にして現実的な、それ故にこそ最も心の琴線の深奥にかなでられる不滅の基調音となつて残されたのであらう。

付章

カントロヴィツチの經濟理論をめぐる  
ソ連經濟学の潮流——

吉田靖彦



一	経済システムと資源配分……………	273
二	社会主義経済とマルクス経済学……………	274
三	ソ連経済と計画編成システム……………	276
四	資源配分と一九六五年経済改革……………	279
五	カントロヴィッチ経済学と労働価値説……………	284
六	カントロヴィッチ経済学の影響と効果……………	293
七	カントロヴィッチ教授とノーベル経済学賞……………	298



カントロヴィッチ

## 一、経済システムと資源配分

稀少資源配分の問題はいかなる経済社会も日々時々刻々に解決せねばならない最要の経済問題である。ここで資源配分とは換言すれば「何を」「どこだけ」「いかに」そして「誰のために」生産し、分配するかという問題に他ならない。<sup>(1)</sup>

これらの問題を解決するために現代の発展した経済社会では二つの経済システムがとられている。<sup>(2)</sup>一つは競争市場における価格機構 (price mechanism) によってこれらの諸問題を解決するシステムであり、他は中央の計画当局による行政的指令によって問題を解

決するシステムである。一般に前者を市場経済 (mar-

ket economy)、自由企業制度 (free enterprise system) と

言い、後者を計画経済 (planned economy)、あるいは命令経済 (command economy) と呼ぶ。<sup>(3)</sup>

古典学派以来、この稀少資源配分の問題は経済学の重要なテーマであった。ライオネル・ロビンズの有名

な経済学の定義は「経済学は、諸目的と代替的用途をもつ稀少な諸手段との間の関係としての人間行動を研究する科学である」とする<sup>(4)</sup>。ここで「稀少な諸手段」は「稀少な諸資源」と同義である。この定義はまさに経済学の主題がここにあることを示している。

## 一、社会主義経済とマルクス経済学

ソ連を先達とする社会主義国では、この資源配分の問題は中央計画当局による行政的指令によって処理されてきた。しかしマルクス経済学が国定学説の地位を占めるソ連では、この稀少資源配分の問題が経済学の重要な主題として取り上げられることはなかった。ロンドン大学の共産主義経済の研究者P・ワイルズは「マルクス主義は、経済的選択、あるいは、競合する目的のあいだの稀少資源の分配、すなわち多くの西のエコノミストが経済学の関心事だと思っていることには、関心をもたない」と述べている<sup>(5)</sup>。マルクスやエンゲルスの膨大な文献の中から資源の「稀少性」について言及した箇所は見出しえないのである<sup>(6)</sup>。

既述のように労働価値説はマルクス経済学の根幹をなす部分であり、そこでは商品の

価値は社会的必要労働支出によって決定されると考え、古典学派以来の生産の三要素説を否定する。したがって利子、地代は稀少資源使用のコストと考えず、本来労働者階級に帰属すべき部分が特定の搾取階級によって収奪される部分、すなわち余剰価値と考える。この労働価値説の思想はソ連の第一次五カ年計画発足（一九二九年）当時の計画編成当事者や経済学者にも大きく影響していた。人類の歴史に新しい頁をひらくユートピアの建設を夢みた人達にとって、搾取階級擁護の理論的武器と目してきたブルジョア経済学の主題とする稀少資源配分の理論が、社会主義経済建設のための計画編成の指針になるなどとは毛頭考えなかつたのである。

一九二一年の国家計画委員会（ゴスプラン）の創設以来その重要メンバーであり、第一次五カ年計画編成の指導者であつたスタニスラフ・ストルミリンは当時次のように述べている。「われわれの任務は経済学を学ぶことではなく、それを作りかえることである。われわれはいかなる法則にも束縛されない。ボルシェヴィキが攻撃できない要塞はない。テンポの問題は人間の決定に従属するのだ<sup>(7)</sup>」。この言葉はこの間の事情をよく物語っている。

### 三、ソ連経済と計画編成システム

人類の歴史に新しい頁をひらくといわれたソ連の五カ年計画は、一九二九年より稀少資源の適正配分を無視してゴスプランが設定した計画目標に向って強行された。一九七五年に完了する第九次五カ年計画に至るまで戦前、戦後を通じて八つの五カ年計画を経験するが、その計画編成の制度、方法は、現在に至るまで本質的には変わっていない。

先に述べたようにソ連や東欧諸国では、経済資源の配分は自由市場におけるプライスマカニズムを通して行われるのではなく、ピラミッド型の官僚組織を通して行われるのである。この体制では、国の経済政策の基本路線を決定する最高意思決定機関は共産党政治局であり、共産党書記長がその頂点に位置する。ソ連ではスターリン、フルシチョフの独裁時代には彼ら個人の意思が政治局を支配した。政治局員はソ連共産党の最高指導者であるとともに、政府の閣僚の地位を占める場合が少なくない。行政機関である政府の閣僚会議は党政治局の方針を実行する機関であり、経済政策の基本路線——その主なものをあげると、国民所得や主要産業部門の生産物産出の成長、国民所得中の消費および

投資、軍事支出等への配分、主要産業別投資の配分、家計の平均消費水準等——の実質的決定はすべて党政治局の掌中にある。政治局の決定する経済政策の実行機関である閣僚会議のもとに政治、経済、教育、軍事、社会諸般の各省がある。経済関係についていえば、工業各部門省、農業、建設、輸送、通信、商業の各省がある。党政治局の決定した経済政策の基本方針をうけてこれを斉合的な国民経済計画編成の作業に具体化する機関が国家計画委員会（ゴスプラン）である。それは委員会名称であるが省に相当し、長官は副首相の地位を占める。またソ連を構成する十五の共和国、州および地区にもゴスプランの下部機構が存在しそれぞれの地域の計画編成に従事する。このほか価格の形成、決定の業務を担当する国家価格委員会、統計、報告、情報を収集し、これを分析、加工し、ゴスプランや財務省その他の行政機関に伝達する中央統計局もそれぞれ各省と同等の地位を与えられ、共和国、州および地区に下部機関をもつ。

これらの経済各省がいくつかの主管局（グラフィク）を管理し、さらに各主管局がそれに従属する企業群を管理するという形をとる。したがって最高の意思決定機関である共産党政治局を頂点とし、無数の企業を底辺にもつピラミッド型官僚組織 $\nabla$ が構成される



ことになる。党政治局の基本方針に則ってゴスプランが作成した計画原案が閣僚会議↓各省↓主管局↓企業の順に細分化され、下達される。他方下達された計画原案に対して企業はその実情を斟酌してそれを修正した呼応計画とその計画を達成するに必要な資材、原材料の配分申請書を作成して企業↓主管局↓各省を経てゴスプランおよびゴスナブ（国家物資供給委員会）に送り、ゴスプランはこれを調整し最終計画案を作成し、党政治局の裁可をえて法令化された後再び各段階で細分化されつつ前記の階層を経て下達する。企業長はこの計画の遂行結果によって成績を評定される。このように上下の垂直的な情報、指令の流れによって意思の疎通、指令遵守の確認がなされるが、所属する省が異なれば諸企業の間でさえ水平的なコミュニケーションは殆んどない。したがって各省は一大経済帝国を形成し、自省中心主義が経済のぬぎがたい体質となった。この弊害を打破するために一九五七年フルシチョフによって経済各省を廃止して、代わってソ連全土をいくつかの―はじめ一〇五で後に十七に統合された―経済行政区に分けた地域経済会議（ソツナルホーズ）がつくられた。しかし今度はしだいに地域的セクシヨナリズムの欠陥を露呈するようになった。かくしてフルシチョフが政権の座から追放された後、一



九六五年に再び省制度に復帰し、今日に至っている。

#### 四、資源配分と一九六五年経済改革

ソ連、東欧諸国の資源配分は、市場経済におけるプライス・メカニズムによらず、第三節で図式化した計画編成システムによって行われた。すなわち $\wedge$ 何を $\vee$  $\wedge$ どれだけ $\vee$ 生産するかは、党政治局が基本方針を決定し、政治局の意を体したゴスプランが生産される財の詳細な品目構成の生産計画を作成する。 $\wedge$ いかに $\vee$ の問題は需要と供給とをバランスさせる方法である物財バランス方法が使用される。<sup>(8)</sup>ある財を生産するにあたっていかなる原材料、燃料をどれだけの数量使用し、労働力をどれだけ雇用するかは、原材料投入ノルマ、労働力の使用ノルマがあらかじめ決められており、それによって決定される。また原材料、燃料それによって生産される製品価格はそれらの市場によってではなく、国家価格委員会がこれを決定する。経営者である企業長は自主的判断に基づいて財の供給価格、供給数量を決定する権限をもたない。また将来の生産増加に必要な投資についてもすべて中央投資によっており、企業長が企業の内部蓄積あるいは銀行からの

融資によって自主的に投資することは、一九六五年の経済改革まで認められなかった。次に、誰のために、すなわち生産要素の価格である賃金(率)、利子(率)、地代もまた市場経済のように労働、土地および資本の生産要素市場で決定される仕組みではない。賃金率は国家労働賃金問題委員会がこれを決定し、利子、地代は一九六五年まで顕在的に全く考慮されなかった。<sup>(9)</sup>これは言うまでもなく社会主義社会には利子、地代の搾取概念は存在しないという労働価値説の立場からきている。

ところで、何を、どれだけ、いかに、そして誰のために、といった資源配分の問題が右に述べたような集権的な計画管理システムの下で日々あるいは時々刻々支障なく、しかも適正に解決されたであろうか。計画当局にとってこれが決して容易な仕事でないことは経済の現実にして考えれば容易に想像がつくであろう。現実の経済に存在する財貨用役は千や一万の数ではない。ソ連経済において財の数は八〇〇万といえるいは一千万と言われている。しかもこの数は経済の発展と共に当然増加する。これらが原材料、製品として相互に密接な代替、補完関係をもち、一財の数量、価格の変化は他の財に急速に連鎖的な波及効果をもつ。中央計画当局がこれら一千万に及ぶ財の斉合的

な計画を立案することは理論的に可能であったとしても、実際には全く不可能である。

このことはソ連の経済学者の次の指摘によって十分うなずけるであろう。中央数理経済研究所長フェドレンコは、一九六五年に全国で約一二〇〇万人が計画化と管理に従事していると推計している。またキエフのサイバネティクスの権威V・グリシコフは「現在のソ連の管理計画方式に変化がなければ、管理・計画業務の量は、産出高や企業数の二乗三乗に比例して増加してゆくために、もし一九六一年の共産党新綱領のしめす展望にしたがって発展し、この間、計画編成の方式に改善がみられないとすれば、一九八〇年には、ソ連の全国成人人口とほぼ同数の人間が管理計画業務にたずさわっていないければならなくなるであろう」と述べている。

ソ連型中央集権的計画経済が、稀少資源の配分の見地からみてきわめて効率の悪いシステムでありながら、一九二九年第一次五カ年計画開始以来当時後進的農業国であった国を三十年という比較的短い期間に米国に比肩する超大国にまで発展せしめた原因は何であろうか。それはまさにスターリン型成長戦略とよぶ方式によって遂行されてきた結果である。スターリン型成長方式とは消費財、農業部門の成長を犠牲にし、国民の生活

水準を抑えて物的資源と労働力を成長に最も寄与する重工業と、強力な外交政策を可能にする軍需部門に集中する経済成長政策である。勿論このような成長方式を長期間にわたって維持し国民に党、政府の経済政策を遂行させるためには西側先進国との自由な思想、情報の交流を遮断し、国民が西側の学問、思想、文物に接近することを厳しく監視し抑圧しうる様な全体主義的政治社会体制によってはじめて可能であった。米国のソ連経済研究家R・ムーアスチンとR・パウエルはソ連の一九二八〜一九六一年の全期間にわたる詳細な財の産出と投入を調査、研究した後、ソ連経済の成長に占める投入資源の増加の寄与は二分の一乃至四分の三以上に及ぶことを実証し、結論として「投入資源の増加が成長の根源であり、その成長はソ連の大衆に非常な犠牲を強いることによって達成された。すなわち、資本ストックの急速な上昇とそれによる今期の消費の犠牲、集団農場政策という苛烈な手段による農村労働力の都市労働力への転換、家事の犠牲による女子労働力の増加、領土の拡張による資源の獲得、によってなすとげられた。これらの投入は自発的に生じた費用ではなく、苛酷きわまりない強制を強いられた大衆の支払った費用であった。それ故ソ連の成長が急速であることは全体主義的政治統制の効率を

大いに証明するものである。すなわち、 $\wedge$  圧制による成長  $\vee$  (Growth by force) の可能性を証明している<sup>(11)</sup>と述べている。しかし一九六〇年代に入ってこのスターリン型 $\wedge$  圧制による成長方式 $\vee$ は次第にその限界につき当った。それは一九五〇年代には年率一〇パーセント以上の高い成長率を続けてきた工業生産が一九六〇年代に入って一桁の成長率に低下し、しかもそれが長期的な低下傾向を示したことである<sup>(12)</sup>。これは「先進資本主義国」ことに米国に追いつき、追い越す経済成長最優先の政策をとってきたソ連の政治指導者にとって大変なショックであったことは想像に難くない。かくして従来のスターリン型成長政策を方向転換して、資源の効率的使用による成長政策へ向わざるをえなくなる。これが一九六五年九月党中央委総会におけるコスイギンの主導によって実施された経済改革である。ところでこの経済改革に対応して一九五〇年末から一九六〇年代初めにかけてソ連の経済学にも世紀を画するような経済理論が登場した。それは先の第一次五カ年計画の当初G・S・ストルミリンがのべた計画そのものが経済に代るといふ思想を否定し、資源の効率的配分を重視する経済学の出現である。

## 五、カントロヴィッチ経済学と労働価値説

先にシ・ロビンズの定義に述べたように経済学説史上一八七〇年代の限界革命以来経済学は稀少資源の配分の問題を主題として扱ってきた。しかしスターリン独裁下のソ連ではマルクス、レーニン及びスターリンの著書、演説を訓話解釈し、それによって自説の正しさを傍証することが経済学とされ、稀少資源の配分の問題は殆んど顧みられなかった。その様な時代一九三九年にレニングラード大学の数学者レオニード・カントロヴィッチ教授はこの稀少資源の最適配分の問題を正面からとり扱った論文「生産の組織化と計画編成の数学的方法」を発表した。この論文で彼は工場における作業過程で金属屑を最小にする数学的方法を創案した。これが後に線型計画法 (Linear programming) と呼ばれる方法の最初の論文である。後に彼はこの方法の創案者の名をかちえることになるが、当時のソ連の経済学者はこの論文を完全に黙殺しだったのである。他方西側ではカントロヴィッチと全く独立に一九四七年に米国のG・ダンチヒが線型計画法を開発するが、ダンチヒの仕事は発表されるや資源の制約条件下における極値問題のすぐれた



解法として各種の経済問題に応用され、急速な普及、発展をとげる。

スターリン死後一九五〇年代半ば頃からソ連経済学にも漸く雪解けの時代が到来した。今までブルジョア経済学として否定されてきた数理経済学の禁が一部解かれ、マルクス主義のイデオロギーに反しないという制約をつけた上で、その海外からの移入、研究が許されるようになった。それと共にソ連国内で日の目をみることもなかったソ連の数理経済学の先駆者であるカントロヴィッチ、ネムチノオフ、ノボジロオフ等の業績が一せいに注目をあびるようになった。一九三九年のカントロヴィッチの論文が世界で線型計画法を開発した最初の論文として二〇年後漸く認められたのである。一九五九年カントロヴィッチは稀少資源の適正配分の問題を線型計画法の手法でソ連経済全体にわたって分析した研究『諸資源の最適使用の経済計算』を刊行した。先に一九三九年の論文では対象は一工場の資源節約の問題に限定されていたが、一九五九年の著書では線型計画法の手法をはるかに広範な次の諸問題、企業の生産計画、生産諸要素―労働、土地、資本設備諸用役―の最適使用、輸送計画の合理化、さらに長期的な投資効率の諸問題に適用した。それは今までソ連の経済学が無視してきた資源の最適配分の研究に新しい時代を画



す労作であった。とりわけその理論体系では彼が「客観的に決定された評価」——以下客観的評価と略称——と呼ぶ評価体系が最も重要な意味をもつ。ここで客観的評価とは簡単に言えば、数学的に線型（一次）不等式で表現せられる稀少な経済資源の制約の下に、企業は普通利潤の最大化をめざして行動する。この利潤という企業の目的も数学的に目的関数として一次式で表現される。いまこれを原問題とすれば、これに対応して一次不等式で表わされる制約条件の下で目的の費用関数を最小化する所謂双対問題が数学的に線型（二次）不等式で示される。この双対問題を解くことによってえられる未知数の解は独特の評価体系を示す。これが「客観的評価」であり、一般に影の価格（shadow price）と呼ばれている概念である。<sup>13</sup>

カントロヴィッチはこの著書で「客観的評価」の理論的重要性を示したにとどまらない。彼は一九五九年の本の中でソ連の計画当局が第一次五カ年計画発足（一九二九年）以来伝統的に踏襲してきた価格政策、価格形成原則を正面から批判して、「客観的評価」を価格形成の基礎におくことを提案する。ここで伝統的な価格政策及び価格形成原則とは政府補助金によって生産財価格をひき下げ、取引税——一種の間接消費税——を課すこと

によって消費財価格をひき上げる価格政策であり、工業製品の卸売価格形成について言えば部門別平均価値＋利潤の形式で形成される価格形成原則である。この価格政策、価格形成に対してカントロヴィッチの提案する「客観的評価」にもとづく価格形成原則は限界費用（機会費用）原則である。「客観的評価」は稀少資源の最適配分に必要な費用として利子、地代をふくむ限界費用に対応する評価体系である。ところでソ連経済学は利子、地代を入れることを拒否する。またマルクス経済学では商品の価値を決定するといふ「社会的必要労働支出」の概念を平均的な労働支出に解釈してきた。かくしてカントロヴィッチの「客観的評価」にもとづく価格形成の提案はマルクス経済学の根幹をなす労働価値説に背き、計画当局の伝統的な価格形成原則を否定し、ブルジョア経済学に身を売る異端の学説として多くの経済学者から激しい非難をあびた。<sup>14)</sup>ここでカントロヴィッチの経済理論と政策的提案がソ連経済学界にどの様な衝撃を与えたかを少し検討しよう。<sup>15)</sup>

一九六〇年四月四日から八日にわたり、ソ連科学アカデミー主催で「経済学及び計画編成における数学の使用」をテーマとするシンポジウムが開かれた。このシンポジウ

ムで一九五九年のカントロヴィッチの著書の内容を要約した報告がカントロヴィッチによってなされ、それをめぐる批判、賛成の討論が後に議事録として出版された。いまこの議事録から主要な発言をひろってみよう。G・ボヤルスキーは「もし最適計画において各製品の標本を相対的労働必要度の大きさの順に並べるならば、双対評価（客観的評価）は最後の（限界的）標本の労働必要度に対応する。製品の限界的標本の生産に要する労働必要度はマルクスの価値概念に一致しない」とする。ボヤルスキーはまた別の箇所でも、カントロヴィッチの経済理論が、かつて労働価値説と限界効用説との結合を意図したツガン・バラノフスキーの価値概念の改訂版にすぎないとして激しく非難した。

ペー・エス・ムステイスラプスキーは、カントロヴィッチの理論が限界効用に依拠していることを指摘し、加えて、カントロヴィッチが社会主義の基本的経済法則を無視することを非難して次のように言う。「彼等（カントロヴィッチ、ノボジロオフ）はその報告において社会主義の基本的法則及び計画された釣合のとれた発展法則の必要に言及していない。彼等は価格形成の基礎としての価値法則を忘れている。彼等は古文書から労働支出の法則及び限界効用の理論をひき出してきた。これら周知の、マルクス主義に

よってとつくの昔にきびしく批判されたブルジョア理論が数学的装置をもった解決乗数法の説明のために使用された。カントロヴィッチ、ノボジロオフは現行の計画指標の十分な点を欠陥として示し、それを中傷してやまなかつた。彼等はその理論の偏狭、一面性、欺瞞性を認めようとはしないし、彼等の理論には社会主義経済の発展過程の質的で構造的な側面が無視されている。一見して、労働節約の原理、効率の最大は社会主義の基本的経済法則の要請に一致しているようにみえる。しかしそれは一見してそう見えるにすぎない」。ムステイスラヴスキーは別の箇所で「客観的評価」を限界効用の方法によって決定されるものとしてその概念を攻撃し、それを価格形成の基礎にする試みに対し「そのような試みは無益かつ有害で放棄されなくてはならない」としている。

ヤ・ア・クロンロードもカントロヴィッチの理論と提案を激しく非難して言う「国民経済の諸問題の研究にたずさわっている同志は、価値なくして特別の開発された公評価体系でもって済ますことができると考えている。またあきらかに経済学にあまり明るくないある数学者は客観的評価によって価格の価値体系に代えることができると考えている。しかしながら、これは理論的にも実際的にも根拠のある主張ではなくその方法

論的根拠の誤謬を立証しているにすぎない。カントロヴィッチによって提案された評価をも含む各種の条件付けられた評価は、所与の計画の下における所与の工業生産複合体（工業および企業等）に関する若干の計算に使用されるかもしれない。しかしながら、そのような評価の助けによる、したがって、価格、生産費、価値等に代えてそれらの評価をもってする最適国民経済計画の作成は、主観学派、旧式の限界主義学派の古い概念を数学的衣裳をきせて再生したにすぎない。マルクス・レーニン主義政治経済学は、それが全く妥当しないことをとつきの昔に暴露した」と。

エリ・ア・ヴァーグのように、カントロヴィッチの主張を全面的に支持する学者もあつたが、このシンポジウムではごく少数の人達であつた。ヴァーグは「私はノヴォジロフとカントロヴィッチが展開した構想に全面的に同意する」と述べ「カントロヴィッチによれば効率は価格によって条件づけられ、稀少性を考慮したとき、価格は価値に一致すべきではなく乖離すべきでありとする。この問題で彼は疑いもなく正しい。据えつけられた設備の価格、使用される原料の価格は生産価格に従って労働の直接投入から乖離すべきであり、かつ客観的評価に一致すべきである。すなわち、本質的に価格は稀少



性を考慮して生産価格から乖離すべきである。」

このシンポジウムが行れた一九六〇年当時フルシチョフ政権の下で、マルクス・レーニン主義の枠を逸脱しない範囲で学問、思想の自由化への雪解けが始まった時代であった。とはいえ、ながい間経済学をふくむ社会科学がスターリンへの個人崇拜に毒され、マルクス・レーニン主義文献の訓話注釈にならずにきたソ連の経済学界に対してカントロヴィッチの経済理論と提案は強烈な衝撃を与えた。このシンポジウムだけでなく論文や会議で上述のような激しい非難がカントロヴィッチの一九五九年の著書をめぐってなされた。これらの批判の矢面に立ってカントロヴィッチがいかに応答したか。さきのシンポジウムで「客観的評価」が労働価値説にもとるといふ批判に対して次の様に答えている。「労働と並んで労働の生産性をひき上げる生産要素（土地、借入れ設備）が一定の評価をえること、かつまたその使用が生産物評価の計算に当って費用の中に考慮されるといふ事情が多くの人々にあいまいさと疑惑をもたらした。特に、客観的評価の計算に労働と相並んで条件的支出が存在することが、これらの評価が労働によるものであり、かつ労働は価値の唯一源泉としてみなされうるといふ主張といかに一致するのかという疑

問が生じた。社会主義社会の条件で決定的に重要なのは、(所与の部門における)労働の直接支出だけでは十分でなく、他の種の生産物の投入に対する影響をも考慮した労働の完全支出である。これらの完全支出の直接計算は非常に複雑である。このような計算は使用されている稀少な生産要素に対して、条件付けられた賃貸評価(準地代)を計算に導入することによってはじめて直接計算にしたがい実現できる。かくして計算に評価を導入することは、以上にのべた事実が評価の源泉を考へることを決して意味しない。価値の唯一の源泉は労働であり、そして条件づけられた支出を考慮することは、社会労働の完全支出の適正な計算の手段にすぎない」。

マルクス経済学を国定学説としているソ連の経済学界でこれを正面から否定することは、学者としての生存権を否定することである。したがって利子、地代の稀少資源のコストを含む客観的評価の着想を生かすためには、ここでカントロヴィッチの言葉にみるように労働価値説との妥協を図らねばならない。しかし商品の価値を決定するという「社会的な必要労働支出」を従来の平均原理による解釈から限界原理による解釈に移行することは百八十度の転換である。先のクロンロードの言うように「旧式の限界主義学



派の古い概念を数学的衣裳をきせて再生させた」という批判はその意味ではカントロヴィッチ理論の本質をついた批判である。しかしそのような批判はマルクス労働価値説に忠実な解釈であるとしても、資源配分の見地からみれば、無価値であり、現実の経済政策に有効な価格形成の理論となりえない。正統的な労働価値説に忠実ならうとすれば、資源の最適配分の理論とはなりえず、資源配分の理論としてすっきりした形で表現すれば労働価値説に背くことになる。ここにカントロヴィッチはじめソ連の数理経済学者のジレンマがある。またカントロヴィッチの言うように労働の直接支出だけでなく、労働の完全支出の実際の計算を行うためには、それ以前に複雑労働を単純労働に還元する計算作業を完了していなくてはならない。かつてソ連でこの作業が試験的に試みられたことがあるがそれが成功したという事を聞かない。理論的には考えられても、実際には至難という外はない。

## 六、カントロヴィッチ経済学の影響と効果

一九六〇年四月のシンポジウムを通してカントロヴィッチの理論がソ連経済学に及ぼ

した衝撃をみてきた。その後のカントロヴィッチの業績に対する評価の変化とソ連の計画編成と価格形成に及ぼした影響を考察しよう。

第一に一九六〇年代半に入ってカントロヴィッチはじめヴェ・ネムチノフ、ヴェ・ノボジロフ等の学者を先駆者とする数理経済学の方法が広くソ連経済学界に受容され、現在経済分析の手法として広範に使用されつつあることである。最近はスターリン時代のように数理経済学の分析方法そのものを俗悪ブルジョア経済学として全面的に否定する意見は殆んどみられない。一九六〇年代に入って数理経済学は急速に普及し、マルクス経済学の正統を標榜する（政治経済学派）に対立する（数理経済学派）を形成しつつある。一九六五年、ソ連政府は前記三人の学者に経済学に貢献した故をもってレーニン賞を授与した。同じ年ソ連科学アカデミー中央数理経済研究所編集の数理経済学、計量経済学を内容とする専門雑誌「経済学と数学的方法」が創刊された。したがってはこの時期にソ連で数理経済学が（生存権）を公認されたと考えてよいであろう。

第二に数理経済学が党、政府によって公認されたからといって、西側の数理経済学の概念がすべて容認された訳ではない。党、政府は経済政策上、稀少資源配分を考慮せざ

るをえなくなつたために、資源配分理論の代表者である前記三人の学者の業績を再評価したのである。したがって数理経済学に付随して入ってくる労働価値説にとって異端の思想に対してはマルクス経済学に背くものとして排撃するのがつねである。例えば、生産の三要素説、限界効用の概念は未だ公認されていない。しかし将来消費者需要の理論を問題にするようになれば、当然限界効用の概念を考慮せねばならないから、労働価値説との関連でイデオロギー上解決をせまられる困難に直面するであろう。また価格形成の基礎は「社会的必要労働支出」におくべきであると言われているが価格形成の問題を扱うに当って、すべてのソ連の経済学者が自分の理論は「社会的必要労働支出」に立つと主張して譲らず、果てのない論争をつづけている。マルクス経済学の基礎概念である「社会的必要労働支出」という概念が学者によって解釈が異なるということ自体奇妙な現象である。近代経済学で基礎概念である限界効用、限界費用といった概念が学者によって解釈が異なるなどということは到底考えられないからである。カントロヴィッチも客観的評価が「社会的必要労働支出」に対応する概念でマルクスの労働価値説になんらもとるものではなく、価値の唯一の源泉は労働であり、生産の三要素説に立つものでは

ないと主張しているが、そう主張せねばソ連の経済学界ではうけ入れられないからにすぎない。

第三に、一九六五年の経済改革の重要な一環として一九六七年に工業製品の卸売価格の改訂が実施された。新しい価格体系形成の基礎となったのはカントロヴィッチの「客観的評価」ではなく、生産価格であった。つまり従来通り部門別平均原価原則に平均利潤率を加算した形式で形成された。しかし、カントロヴィッチ等の客観的評価（機会費用）を価格形成の基礎とする主張が完全に否定された訳ではない。資本主義経済における利子に相当するフォンド支払、差額地代が価格形成に当って考慮され、資本利潤率概念に相当する収益性の概念が最重要の成功指標として使用される様になったことはカントロヴィッチ等機会費用学派の主張が部分的に入れられたものと考えてよいであろう。

第四に、ソ連に数理経済学的方法が導入された当初、その方法は社会主義経済に適用されたときはじめて大きな効果を生むように喧伝され、期待された。しかしその方法が特筆に値する程大きな効果をもたらしたとはいえない。一九六六年二月、ソ連科学アカデミー主催の「社会主義経済における価格形成の諸問題」を討議した会議でカントロヴ

イッチ自身が「経済数学的方法がその導入についてすでに五、六年も論議されているに拘らず、国民経済に期待した程の効果をもたらしていない」と述べ、その原因が「我が国の経済学者が最適計画編成の原理を把握しておらず、それが経済学者の日々の武器となっていない」ことによるとし、最適計画編成の方法を修得した経済学者、数学者の養成が急務であることを指摘している。

第五に、カントロヴィッチが提唱する最適計画編成を企業レベルから部門、地域レベルに更に国民経済レベルまで拡大するには計画編成に従事する要員の養成と共にコンピュータと情報伝達システムの拡大、充実が必要不可欠な前提条件であるが、米国の推定によると、ソ連のコンピュータ工業は西側諸国と比べて三年から十二年の遅れがあり、ことに大型では十二年の遅れがあり、しかもその格差は拡大しつつあるといわれている。<sup>16)</sup> 大型のコンピュータの未発達と要員の不足によって国民経済規模での最適計画の編成は近い将来に実現する見通しはない。これについてケエフのサイバネティクス研究所所長V・グルシコフは「ソヴェトで最適計画を解くためには四〇ないし五〇の地域に、一万の計算センターが必要である。実際には、二三〇のセンターしかないため、

このような集権的プログラムは、局地的にしか行うことはできない」と述べている。<sup>17)</sup>

カントロヴィッチの最適計画モデルを企業レベルから産業部門及び地域レベルへ、更に国民経済レベルへ拡張しようとする試みがあるが、その作業に従事する要員の不足、コンピュータ工業の遅れ、情報伝達システムの未整備によって、近い将来これを期待することはできない。現在は特定部門、地域の最適計画編成の実験、局所解の計算が試行されている段階である。

またこれらの条件が解決されたとしても、国民経済全体の目的関数を何にするか、企業、部門、地域及び国民経済の各最適計画をいかに結合するかといった重要な問題は未解決のままである。

## 七、カントロヴィッチ教授とノーベル経済学賞

スウェーデン王立科学アカデミーは十月十四日、一九七五年度ノーベル経済学賞をレオニード・カントロヴィッチ教授と米国エール大学チャリング・クープマンズ教授の二人に授与すると発表した。授賞理由は「稀少資源の最適配分に関して経済学の



古典的な問題の分析方法を再生し、普遍化し、発展させた」と述べている。

カントロヴィッチのノーベル経済学受賞については稀少資源の最適配分の方法としてのリーニア・プログラミングを世界で最初に創案した経済学者としてその賞をうけるだけの十分な資格をもつ人としてノーベル経済学賞が創設された当時から下馬評に上っていた。したがって彼の受賞には同じロシア人のノーベル平和賞受賞者サハロフ博士の場合のようなトラブルは生じないであろう。しかしソ連の党、政府にとってはソ連最初のノーベル経済学受賞を双手をあげて歓迎できないものがある。それは反体制学者サハロフと同時受賞のため、双方に往復ビザを出すかどうかといった問題の他に、受賞の直接対象となった業績のうち一九三九年の論文はソ連の経済学界では二十年近く無視されてきたこと、また一九五九年の著書を出版するに当ってマルクス経済学にもとるということで強い反対があった事情があり、今回の受賞でその間の事情やカントロヴィッチ経済学の性格が一層海外に知られることである。今回の受賞を契機にして今までタブーであった生産の三要素説、効用学説をうけ入れる素地がでてくるかもしれない。そうなればソ連経済学にとりイデオロギー上の聖域であった労働価値説が崩壊することになりか



ねない。

第二に、カントロヴィッチの一九五九年の著書にはフルシチョフ政権当時の出版ということもあって、各所にフルシチョフ政権の経済政策に対する讚美がみられる。おそらく現政権にとっても、カントロヴィッチ自身にとっても不本意なことであるが、これは著書を出版するための原著者の止むをえざる妥協であったと考えられる。しかしこの事実は共産主義体制の下ではすぐれた学術書といえどもきびしい検閲の対象になることを一層あかるみに出すことになる。一九七六年にこの著の第二版の出版が予告されているが、そこではおそらく学説の基本内容は変化はないであろうが、経済政策に関係した箇所的大幅な改訂が予想される。

(註)

- (1) 経済学の最も標準的な教科書であるP・A・サミエルソンの邦訳『経済学』(第九版、岩波書店)では資源配分の問題を『あらゆる経済社会の中心的な諸問題』として第2章で解説している。

- (2) サミュエルソンの経済学では資源配分の問題を慣習によって処理している原始的社会をあげている。しかし発展した経済社会では重要でないので省略した。
- (3) 経済システムを分類するのに生産手段の所有関係を規準にして、生産手段の私有を認めている経済システムを資本主義経済、私有を否認し公有を原則とするシステムを社会主義経済とよぶ。
- (4) L. Robins, *An Essay on The Nature and Significance of Economic Science*, 1932. 邦訳『経済学の本質と意義』昭和二十二年、二二五頁。サミュエルソンの経済学の定義参照。前掲『経済学』七頁。
- (5) P. J. D. Wiles, *The Political Economy of Communism*, 1962, p. 47. 邦訳『社会主義の政治経済学』六五—六六頁。
- (6) 前掲P・ワイルズ邦訳六九—七〇頁。
- (7) 前掲P・ワイルズ邦訳六五頁。
- (8) 物財バランス方法については、Heinz Kohler, *Welfare and Planning: an Analysis of Capitalism versus Socialism*, John Wiley & Sons Inc., 1966. 保坂、矢野訳『厚生と計画』トマンズ一三九—一四二頁参照。
- (9) 利子率に代ってひそかに回収期間という概念が使用されていた。それは利子率の逆数に相当する概念であった。
- (10) M. Kaser, *Soviet Economics*, 1970 岩田、長尾訳『現代ソビエト経済学』二四九頁参照。
- (11) R. Moorsteen & R. P. Powell, *The Soviet Capital Stock*, 1928—62, Richard D. Irwin, Inc., 1966, pp. 292—293.

- (12) 一九六〇年代のソ連経済の成長鈍化と成長政策転換の詳細については吉田靖彦著『ソ連経済の成長と資源配分』風間書房、第一章「ソ連経済の成長と経済改革」参照。
- (13) 線型計画法の「客観的評価」の詳しい解説については前掲吉田著『ソ連経済の成長と資源配分』の第九章「ソ連経済と最適計画編成」参照。
- (14) 前掲著の第九章、第五節「カントロヴィッチ提案をめぐるソ連経済学の潮流」参照。
- (15) ここでは「客観的評価」をめぐる論争に限定した。
- (16) A・D・サハロフが党、政府の指導者に送った書簡によると「……米国とくらべてソ連はコンピュータ技術ではなはだしく遅れており、第二の産業革命とよばれる経済におけるコンピュータの使用についてはその格差が非常に大きいのでそれを測定することも困難であり、我々は全く別の時代に住んでいるのだ」と述べている。Newsweek, April 13, 1970, pp. 12—13
- (17) J. Wilczynski, *The Economics of Socialism*. 1970, p. 41.

關  
係  
年  
表

## 凡例

一、この年表は、本書『日本におけるマルクス主義論集』にでてくる事項を中心とし、併せて、本書の姉妹篇である桑原暁一編『ヨーロッパにおけるマルクス主義批判論集』（国文研叢書14）の主なる事項を記載したものである。主として作者の生存年代や、文献が成立した年代を明示し、同時に、その背景となる重大な政治、社会、文化的事項を併記した。

一、本書の叙述が『西郷南州遺訓』から始まっているので、年表は明治十年—一八七七—から始めたが、カール・マルクスに関する主な項目だけは、その前に摘記した。

一、記載事項中、単行本として出版された書物名はゴチックで示し、論文等は「」で記した。書物の成立は、着稿、発表、完成、刊行等、それぞれ年時を異にするので、統一して示すことができなかつたが、なるべく本書の執筆者の論述に沿って記すやうにした。

一、「某々没」の下の括弧の数字は、数へ年による死没時の年齢を示した。

（梶村 昇）

関係年表（明治十年～昭和五十一年）

年号	西曆	日	本	外国
文政 一	一八一八			カール・マルクス生れる。
嘉永 一	一八四八			マルクス・エンゲルス共著「 <b>共産党宣言</b> 」ベルギーのブルツェルで出版。
安政 六	一八五九			マルクス著『「 <b>経済学</b> 」批判』ロンドンで出版。
明治 三	一八六七			マルクス著「 <b>資本論・第一卷</b> 」ロンドンで出版。
明治 一〇	一八七七		西郷隆盛自刃（51）「 <b>西郷南州遺訓</b> 」。	
一一	一八七八		大久保利通没（49）。	
一六	一八八三			グッコー没（68）。
一八	一八八五		マルクスの遺著	マルクス没（66）。
一三	一八九〇			「 <b>資本論・第二卷</b> 」エンゲルスによりロンドンで出版。
一六	一八九三		徳富蘇峰「 <b>現時之社会主義</b> 」。	マーシャル「 <b>経済原論</b> 」。

明治二七

一八九四

内村鑑三「代表的日本人」。日清戦争始まる。

二八

一八九五

日清戦争終結。

二九

一八九六

三〇

一八九七

片山潜ら「労働世界」創刊。

三一

一八九八

「社会主義研究会」誕生。

三三

一九〇〇

夏目漱石英国に留学。徳富蘆花「自然と人生」。土井  
晩翠「登高賦」。

三四

一九〇一

片山・幸徳ら社会民主党結成・即日禁止。田中正造  
足尾鉾毒問題で天皇に直訴。

三五

一九〇二

正岡子規没(36)。西川光次郎「カールマルクス」。

三六

一九〇三

岡倉天心「東洋の理想」(英文)。漱石帰国。幸徳ら  
「平民社」を設立「社会主義神髓」刊行。片山「我  
社会主義」。

三七

一九〇四

天心「日本の覚醒」(英文)。片山アムステルダム第  
二インター大会に出席。平民新聞「共産党宣言」を  
訳載し発売禁止となる。日露戦争始まる。

三八

一九〇五

漱石「吾輩は猫である」発表。安部磯雄ら「新紀元」  
創刊。日露戦争終結。

ブレハノフ「無政府主義と社会主義」。

マルクス遺著「資本論・第三卷」。

エンゲルスによりロンドンで出版。

エンゲルス没(76)。

バヴェルク「マルクス体系の終焉」。

ウント「民族心理学」第一卷。

ピエルソン「社会主義社会における価値問題」。

ロシア社民労働党がボルシエウキとメンシエウキとに分裂する。

ロシアで軍隊叛乱し農民暴動す(ロシア第一革命)。



明治三九	四〇	四一	四二	四三	四四	四五	大正二	三	四
一九〇六	一九〇七	一九〇八	一九〇九	一九一〇	一九一一	一九一二	一九一三	一九一四	一九一五
<p>堺利彦ら「社会主義研究」創刊し「空想より科学へ」を訳載。漱石「坊ちゃん」「草枕」「二十十日」。幸徳アメリカより帰国。北一輝「国体論及び純正社会主義」。</p>	<p>漱石「野分」「虞美人草」。堺・森近「社会主義綱要」。山川均訳「資本論第一巻」。</p>	<p>漱石「三四郎」。西川・大杉ら赤旗デモ行進（赤旗事件）。</p>	<p>安倍磯雄訳「資本論」。</p>	<p>森鷗外「青年」昂に連載、「沈黙の塔」「食堂」を三田文学に発表。荒畑と幸徳との私怨。大逆事件で幸徳ら検挙。</p>	<p>幸徳死刑（41）。蘆花「天皇陛下に願ひ奉る」発表。「謀叛論」講演。鷗外「妄想」三田文学。森近運平没（31）。</p>	<p>明治天皇崩御（61）。乃木希典夫妻殉死。鷗外「かのやうに」「興津弥五右衛門の遺書」。漱石「行人」。</p>	<p>岡倉天心没（52）。田中正造没（73）。三井甲之「ヴント氏民族心理学研究」（人生と表現）。</p>	<p>漱石「こころ」。</p>	<p>堺・高島ら「新社会」創刊。対華二ヶ条要求吉野作造これを支持する。</p>
<p>ロシア第一回国会開会する。チエスタトン「風と木と」。</p>	<p>ロシア総選挙に反政府派勝利。</p>	<p>清国に辛亥革命起る。</p>	<p>中華民國成立、孫文大總統就任。清朝滅ぶ（一二世一九一七年）。ツント「論理学」「民族心理学要論」。</p>	<p>第一次世界大戦始まる。</p>					

河上肇「貧乏物語」(大阪朝日)。夏目漱石没(50)。  
ストライキ件数三九八。二月革命後のロシア仮政府  
を承認。

吉野ら黎明会結成。山川均が吉野を批判。三井甲之  
「日本将来の人道的使命」(雑誌「雄弁」)。

河上「社会問題研究」創刊。「改造」創刊。北一輝  
「日本改造法案大綱」。

高島素之「資本論第一巻」。大杉・堺ら日本社会  
主義同盟創立。竹越与三郎「日本経済史」。

近藤栄蔵ら曉民共産党結成。三井甲之「マルクス思  
想の誤謬」(国本)。倉田百三「労働運動の道德的根  
拠について」。

堺・山川ら「前衛」創刊。小泉信三「労働価値説と  
平均利潤の問題」(改造)。山川均これに反論(社会  
主義研究)。小泉信三これに答へ(改造)。小泉信三  
「資本論以前におけるマルクスの価値論、価格論」  
(三田学会雑誌)。日本共産党秘密裡に結成されコ  
ミンテルン第四回大会で支部として承認される。森  
鷗外没(61)。山県有朋没(85)。

小泉信三「価値論と社会主義」河上肇と論争。関東  
大震災。大杉栄(39)殺さる。寺田寅彦「冬彦集」。

ロシア二月革命。一〇月革命。  
レーニン、ソビエト政府を組織。  
第一次大戦終結。

中国五・四運動。モスクワでコ  
ミンテルン第一回大会開催。ミ  
ーゼス「社会主義経済における  
経済計算」。バラノウスキ「没  
没(55)。ローザ・ルクセンブルグ  
没(50)。

イギリス、フランスで共産党結  
成。

クロボトキン没(80)。ソ連新経  
済政策(ネップ)を開始。

ミーゼス「共同体経済」。ワッ  
ントン会議。ファシスト党主ム  
ッソリーニ内閣を組織。

ソビエト社会主義共和国連邦成  
立。

大正二三	昭和	五	四	三	二	一
一九二四	一九二七	一九二六	一九二五	一九二八	一九二七	一九三〇
「マルクス主義」創刊。小泉信三「較差地代と絶対地代」(三田学会雑誌)。	土方成美「マルクス価値論の排撃」。神永文三訳「バヴェルクのマルクス価値説の終焉」。福本和夫「経済学批判の方法論」。日本労農総連合大阪で創立大会。雑誌「労農」創刊。「労農派」の発足。徳富蘆花没(60)。	福本和夫「社会の構成並びに変革の過程」。ド・マン「養田胸喜抄訳」社会主義の心理(原理日本)。和辻哲郎「学生検査事件所感」(京都市大新聞)。大正天皇崩御(48)。	榊田民蔵「資本論劈頭の文句とマルクスの価値法則」(我等)。小泉信三「改訂社会問題研究」。福本和夫雑誌「マルクス主義誌」上で河上肇・福田徳三を論難。三井甲之ら「原理日本社」創設。	土方成美「地代論より見たるマルクス価値論の崩壊」(経済学論集)。三・一五事件一六〇〇名検査される。「マルクス・エンゲルス全集」(改造社)刊行開始。三井甲之「明治天皇御集研究」。高畑素之没(43)。三木清・「新興科学の旗のもとに」創刊。福本和夫「唯物史観のために」。	小林秀雄「様々なる意匠」(改造)。二本保幾「マルクス価値論における平均観察と限界原理の矛盾」(中央公論)。小泉信三「マルクス主義とボルシェヴィズム」。四・一六事件。寺田寅彦「万華鏡」。	高田保馬「マルクス価値論の価値論」(経済論叢)。「労働価値説は支持し得られるや」(改造)。内村鑑
レーニン没(55)。	孫文没(60)。トロツキーソ連最高人民委員を解任される。ソ連共産党がスターリンの一国社会主義理論を採択する。	ド・マン「社会主義の心理」。トロツキーソ連のネップに反対し、政治局執行委員を解任される。	ムース「反マルクス論」。ハイデッカー「存在と時間」。蔣介石南京政府樹立。トロツキー派の追放始まる。	ソ連コルホーズ化のため土地私有禁止。張作霖爆死。	ソ連第一次五年計画発足。トロツキー国外追放、プハーリン・ルイコフらも追放されスターリンの独裁となる。	オルテガ「大衆の反逆」。ロンドン軍縮会議。

昭和 六 一九三一

三没(70)。高橋亀吉金解禁に反対。  
山本勝市「マルキシズムを中心として」。小泉信三「経済原論」。矢内原忠雄「マルクス主義とキリスト教」。河村幹雄没(46)。

七 一九三二

高田保馬「マルキシズムの経済学批判」。山本勝市「経済計算―計画経済の基本問題」。川合貞一「マルキシズムの哲学的批判」。寺田寅彦「続冬彦集」。小林秀雄「現代文学の不安」。共産党員大森の銀行ギャンブル事件。「日本資本主義発達史講座」刊行「講座派」発足。

八 一九三三

佐野学・鍋山貞親転向声明の発表。ムース著草間平作訳「反マルクス論」。小泉信三「マルクス死後五十年」。蓑田胸喜「学術維新原理日本」。田辺元「哲学通論」。河村幹雄博士遺稿。堺利彦没(64)。吉野作造没(57)。新渡台稲造没(72)。片山潜没(75)。共産党スパイ査問(赤色リンチ)事件で宮本顕治逮捕。

九 一九三四

河村幹雄遺稿「名も無き民のこころ」。和辻哲郎著「人間の学としての倫理学」。二木保幾没(43)。楠田民蔵没(50)。

一〇 一九三五

和辻哲郎「続日本精神史研究」。「風土」。寺田寅彦没(58)。第四回国勢調査総人口九七六九万人余。内地人口六九二五万人余。

一一 一九三六

二・二六事件起る。北一輝ら検挙される。平野義太郎講座派学者ら検挙される。

ドイツ、イギリスに経済恐慌起る。

ベルンシュエタイン没(83)。ジュネーブ軍縮会議。満州国建国宣言。ドイツ総選挙でナチス第一党となる。

ヒトラー、ドイツの首相となる。ドイツで共産党弾圧始まる。ソ連第二次五ヶ年計画を開始。

ウイヘルム・ウント没(89)。カウツキー没(81)。

ハイエーク「ソヴェト・ロシアにおける計画経済」。「集産的計画経済」。「ドウソン」。「宗教と近代国家」。「政治の彼方に」。

アラシ「わが思案のあと」。チエスタトン没(63)。

昭和	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四
一九三七	一九三八	一九三九	一九四〇	一九四一	一九四二	一九四三	一九四四	一九四五	一九四六	一九四八	一九四九	一九四九
矢内原忠雄筆禍事件で東大を辞任。北一輝死刑(55) 第一次人民戦線事件で山川均ら検挙。	第二次人民戦線事件で大内兵衛ら検挙。東大に「東 大精神科学研究会」創立。	山本勝市「計画経済の根本問題」。小林秀雄「ドス トエフスキーの生活」。	日独伊三国同盟条約調印。天心遺著「東洋の覚醒」。	山本勝市「計画経済批判」。対米英宣戦布告、大東 亜戦争始まる。	猪俣津南雄没(54)。満鉄共産党グループ検挙。	大日本言論報国会結成(会長徳富蘇峰)。	頭山満没(90)。ゾルゲ・尾崎秀実死刑。「中央公 論」改造に自然的廃刊を勧告(情報局)。米爆撃 機B29東京を初空襲。	西田幾多郎没(76)。戸坂潤没(46)。三木清没(49) 大東亜戦争終結。	河上肇没(68)。蓑田胸喜没(52)。	日本最初の片山社会党内閣八ヶ月で総辞職。	小泉信三「共産主義批判の常識」。小林秀雄「私の	
ビグウ「社会主義対資本主義」。	ウイリアム・イング「素朴な道 学者」。	独ソ不可侵条約締結。アラン 「イデー」。カントロヴィッチ 「生産の組織化と計画編成の数 学的方法」。	トロツキー暗殺(64)。	日ソ中立条約調印。ドイツ、ソ 連に宣戦	コミンテルン(国際共産党)解 散。	ハイエーク「隷従への道」。レ ブケ「人間の国家社会並びに経 済改革の基本問題」。	ソ連対日宣戦布告。オーウェル 「動物農場」。	ケインズ没(64)。	ベルジャエフ没(75)。	オーウェル「一九八四年」。オ		

昭和二五	一九五〇	高田保馬「マルクス批判」。平井新「共産主義の理論と批判」。小泉信三「私とマルキシズム」。	人生観。高野岩三郎没(69)。厚生省日本の総人口八二二〇万と発表。
二六	一九五一	杉山清「マルクス価値論の研究」。対日講和条約調印(サンフランシスコ)。	ルウエル没(47)。ロバート・リンンド没(71)。中華人民共和国樹立。
二七	一九五二	土井晩翠没(82)。	朝鮮戦争始まる。
二八	一九五三	三井甲之没(71)。佐野学没(59)。	アラン没(84)。
三〇	一九五五	尾高朝雄「法の窮極に在るもの」。川合貞一没(86)。大山郁夫没(76)。共産党、極左主義自己批判。	ド・マン「流れに抗して」。スターリン没(75)。
二二	一九五六	高田保馬「社会主義評論」。尾高朝雄没(58)。日ソ国交回復に関する共同宣言に調印。	オルテガ没(72)。ソ連首相マレンコフ辞任、後任にブルガーニン元帥。
三三	一九五七	徳富蘇峰没(95)。日本共産党平和革命方式による新綱領草案発表。	ジョイス・ケアリー「芸術と現実」。ゴミンフォルム解散。
三四	一九五九	山川均没(79)。	ジラス「新しい階級—共産主義制度の分析」。
三五	一九六〇	和辻哲郎没(72)。新安保条約成立。	フルシチョフ、首相となる。
三六	一九六一	矢内原忠雄没(68)。	カントロヴィッチ「諸資源の最適使用の経済計算」。
			韓国李承晩大統領辞職し亡命。アメリカ・キューバ国交断絶。

昭和三七	一九六二	田辺元没(78)。	ワイルズ「共産主義の政治経済学」。ミーゼス「経済科学の根底」。
三八	一九六三	部分核停条約に調印したソ連を日共が批判。	デポーリン没(83)。ケネディ暗殺さる。
三九	一九六四	小林秀雄「考へるヒント」。舞出長五郎没(74)。オリンピック東京大会開会。日共、志賀義雄らを除名。	トリアッチ没(72)。フルシチヨフ解任。
四一	一九六六	小泉信三没(79)。	中国文化革命始まる。
四二	一九六七	日共「今日の毛沢東路線と国際主義運動」を発表し中共と分離。川端康成・三島由紀夫ら中国の文化大革命に抗議を表明。	
四三	一九六八	三島由紀夫「文化防衛論」。	ソ連チュコに進駐。
四四	一九六九	三島由紀夫「反革命宣言」(論争ジャーナル)。「神川彦松全集」全十巻刊行。土方成美「経済体制論」。「三井甲之存稿」。	ジラス「非完全社会—新しい階級の彼方」。
四五	一九七〇	三島由紀夫自決(45)。	
四七	一九七二	竹内靖雄「マルクスの経済学」。高田保馬没(90)。	
四九	一九七四	レブケ著西村光夫訳「自由社会の経済学」。	
五〇	一九七五	土方成美没(86)。日共、「創価学会との十年協定を發表」。	カントロヴィッチ、ノーベル経済学賞に決定。
五一	一九七六	赤色リンチ事件の宮本顕治出獄について議会で問題となる。	周恩来没(79)。





### 編者略歴

大正七年（一九一八年）生れ。東京帝国  
大学文学部卒業。同大学院を経て助手。  
日本経済短大教授。国学院大学教授。東  
京大学・お茶の水女子大学。青山学院大  
学・大正大学各講師を歴任。昭和三六  
三八年ロックフェラー財団在外研究員  
（ハーバード大学・ミシガン大学・ケニ  
ヨン大学所属）。現在、国学院大学日本文  
化研究所所員。文学博士。著書「宗教と  
言語」「宗教の世界」「日本の感性」ほ  
か多数。

## 日本における マルクス主義批判論集

国文研叢書 No. 17

「ヨーロッパにおける  
マルクス主義批判論集」  
(国文研叢書 No. 14)  
の姉妹編

昭和五十一年三月十日 発行

資料非売品

編者 戸田 義雄

発行所 社団法人国民文化研究会

理事長 小田村寅二郎

東京都中央区銀座七一〇一八(柳瀬ビル)

電話 (五七二) 一五二一六―七  
振替 東京 六〇五〇七番

印刷所 奥村印刷株式会社

東京都千代田区西神田一―一四

落丁乱丁のものは、お取り替へいたします。



「国文研叢書」既刊目録 (新書判)

No.8	No.7	No.6	No.5	No.4	No.3	No.2	No.1	No.
<p>日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その二)</p>	<p>日本思想の系譜 — 文献資料集 (近代その一)</p>	<p>日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その二)</p>	<p>日本思想の系譜 — 文献資料集 (近世その一)</p>	<p>日本思想の系譜 — 文献資料集 (古代・中世)</p>	<p>弁証法批判の歴史</p>	<p>日本精神史鈔 — 親鸞と実朝の系譜—</p>	<p>古事記のいのち — 改訂版—</p>	<p>書名</p>
<p>小田村寅二郎 編</p>	<p>小田村寅二郎 編</p>	<p>小田村寅二郎 編</p>	<p>小田村寅二郎 編</p>	<p>小田村寅二郎 編</p>	<p>高木 尚一</p>	<p>桑原 暁一</p>	<p>夜久 正雄</p>	<p>著者・編者</p>
<p>四四・三・二五</p>	<p>四四・三・二五</p>	<p>四三・一〇・一</p>	<p>四三・二・一</p>	<p>四二・三・二五</p>	<p>四一・二・二五</p>	<p>四一・二・二五 (在庫ナシ)</p>	<p>四一・三・二五 (原版) 四八・二・一 (改訂版)</p>	<p>発行年月日</p>
<p>三八一頁</p>	<p>四〇三頁</p>	<p>四〇九頁</p>	<p>三二七頁</p>	<p>三〇九頁</p>	<p>二四一頁</p>	<p>二七九頁</p>	<p>三〇七頁</p>	<p>頁数</p>

「国文研叢書」既刊目録(新書判)

No.16	No.15	No.14	No.13	No.12	No.11	No.10	No.9	No
<p>国史の地熱 — 聖徳太子と楠氏の精神 —</p>	<p>白村江の戦 — 七世紀・東アジアの動乱 —</p>	<p>ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集</p>	<p>短歌のあゆみ — 続「短歌のすすめ」 —</p>	<p>短歌のすすめ</p>	<p>続 日本精神史鈔 — 花山院とその系譜 —</p>	<p>欧米名著邦訳(明治)集 — 文献資料集 —</p>	<p>歴史と人生観 — マルクス主義の超克 —</p>	<p>書 名</p>
<p>桑原 暁一</p>	<p>夜久 正雄</p>	<p>桑原 暁一 編</p>	<p>山夜田久 輝彦 正彦</p>	<p>山夜田久 輝彦 正彦</p>	<p>桑原 暁一</p>	<p>小田村寅二郎 編</p>	<p>川井 修治</p>	<p>著者・編者</p>
<p>四九・一〇・二五</p>	<p>四九・一・二〇</p>	<p>四八・二・二〇</p>	<p>四六・一二・一</p>	<p>四六・四・一</p>	<p>四五・一二・二五</p>	<p>四五・三・二〇</p>	<p>四三・三・二五</p>	<p>発行年月日</p>
<p>二七九頁</p>	<p>二八九頁</p>	<p>三二八頁</p>	<p>三一六頁</p>	<p>三〇九頁</p>	<p>三一〇頁</p>	<p>四八三頁</p>	<p>二八三頁</p>	<p>頁 数</p>













